人は今こゝに偶像禮拜に關せる神學問題に入らざるべし。偶像は「アイドル」なり、「見らるゝもの」の謂なり、標號なり、神にあらずして神の表號なり、蒙昧尤も甚きものも尙之を目して標號以上のものとなせしや疑ふべし。思ふに彼其手製の肖像を神なりとせず、只神之に表はると爲し、畢竟神此中に存すと爲しゝならむ。是に於てか問ふべし、此義を以てせば萬般の禮拜皆標號により、「アイドル」により、被視物に因るに非ずや。其見らるゝや、或は肖像となり、若くは繪畫となりて肉眼に映ずるも、或は想像知力の心眼に映ずるも、是假相の差にして實體の差にあらず。猶神性を表する被視物なり、偶像なり。嚴肅至高の淸敎徒尙其信仰個條を有し、神物の心象を有して之に因て禮拜す、禮拜之に因て始めて成るを得。一切の信條、禮拜式、宗敎儀式、宗敎感念を被包するもの、此義を以てせば、悉く偶像なり、被視物なり、一切の禮拜皆標號により、偶像によらざるなし——故に曰ふべし、偶像禮拜は皆比較的にして、最惡の偶像禮拜は只偶像的の最なるものなりと。



偶像の害は何くにありや

然らば其害何處にあるか。必ずや大害の內に存するあらむ、然らずんば精誠の預言者到るところ、しかく之を攻擊せざる可し。何れぞ偶像禮拜は此の如く預言者の憎むところとなるや。余の見るところ、木像禮拜に關して最も預言者を激せしめ、其心に憎惡を滿せる事物は、彼の思想に觸れ、言語と爲りて他に現はれ來りし事物と全然同一ならざるが如し。「カノプス」を拜し、「カアバア」の黑石を拜せる極愚の異敎徒、彼猶先きに吾人の曰へる如く、全く物を拜することなき牛馬に勝るに非ずや。獨り玆に止まらず其微々たる行爲の中、一種不斷の効績あり、猶詩人に褒するところと類を同うす、星辰及萬有自然の事物中、神聖の美あり意あるを認識する即是也。何が故に預言者彼を攻むると爾く酷なるや。至愚の人、物體崇拜を行ふも其心之に滿たば之を憐むも可なり、之を輕んじ之を避くるも可なり、然れども斷じて之を憎むべからず。其心をして正く是に滿たしめ、其暗黑狹隘の胸裏をして是に照らされしめ、全く彼をして之を信ぜしめよ、然らば素より善を盡さゞるも猶其可なるを失はず、人之を放置して

預言者は嘘中心より之を信ぜざるを咎むるなり

可なり、之に干渉するなくして可なり。

然れども預言者の世に當りては、何人も既に衷心よりして其偶像表號を信ずることなし、偶像禮拜の害實にこゝに始る。預言者起り之を熟察して偶像の唯一木片たるを知るに先ち、衆人既に微かに其然るを疑ひしや明かなり。責むべき偶像禮拜は不誠の偶像禮拜なり。疑惑既に其心を蝕せり、見るべし人心煩悶して聖壇に攀ぢ、其幻影となれるを半ばは覺知す。是尤も傷むべき觀なり。靈魂既に其破拜物を信ぜず、只託して信ずとなし、而して好みて自ら信ずるを感ぜんとす。コレリッヂ曰く「汝信ずるに非ず、只自ら信ずるを信ず」と。是萬種禮拜信仰の最後にして死の今近きにあるを證するなり。今日吾人の所謂空文なるもの、空文禮拜なるもの是と類を同うす。人間爲すところの不德是より大なるものなし、是衆多の不德の端なり、寧ろ將來一切の德の不可能なり、衷心の德性是が麻痺する所となりて恰も茫然唖癡に襲はるゝが如し。是に於てか人既に精誠ならず。眞摯の人之を排し、之を斥け之を罪して憎疾飽くなきもの復怪む



偉人は虚偽を惡む

に足らず。一切の眞人、一切の善、之に對して生死の鬪場にあり、責むべき偶像禮拜は虚文なり、然かも稱し〻眞虚文といふべきものたり。眞虚文——これ留意するに足る、各般の禮拜其終りや此狀に於てす。

余は「ルーテル」が偶像破壞者として何等の豫言者に讓らざるを見る。羊皮と墨汁とより成れるテッチエルの赦罪狀——ルーテルの之を惡むや、恰も木材と蠟とよりなれるコレイシの木神セマホメットの惡めるが如し。時代、方處、地位の如何を問はず、英雄の品性は實に返るに在り、物に據りて物の外觀に據らざるにあり。或は言に出すも、或は只默然深く思ふも、儼然たる事物の眞を彼は且敬し且愛す、隨て淺薄なる事物の假相、整齊婉美にしてコンイシ若くは「法議會」の敬するところとなるも、憎厭遂に堪ふべからざるなり。「新教」は亦一預言者の爲なり、夫の十六世記の預言者の爲なり、已に詐僞偶像的となれる古物に對して破壞の第一撃を加へたるものなり、遙かに將來眞となり聖となる新物に備を爲すものなり。

英雄崇拜は新教と檢着せざるや

始めて之を觀れば、「プロテスタント」教は吾人が英雄崇拜と呼びて、社會宗教等一切人界萬德の根本と爲すものを全く破壞するが如し。歟之を曰ふものあり、曰く、「プロテスタント」教は從來世上に存せしものと全く異なる新紀元を致せり、所謂私斷の世是なり。此法王背反に因りて、各人皆自己の法王となり、また法王或は靈界の雄師を信ずべからざるを悟れり。此に於て人間靈界の結合、教權と從屬と、爾來悉く瓦解せるに非ずやと。洵にかく唱るものあり。余は素より「新教」が靈界主權に背反なるを否定せず、猶また英國清教の、俗界主權に反するもの其第二段なり、巨大なる佛國革命、——これに因て靈界俗界の主權悉く廢棄され、若くは廢棄を確められしもの——其第三段たるを認む。新教は爾來全歐洲史の因て枝出する所の大本なり。靈界の事は常に人界の史上に體現して毎に俗界の起端なれば也。而して今明かに到る處自由を求むる聲あり、平等を求め、獨立を求むる聲あり、帝王に代はるに投票函あり、公選舉あり、かくして靈俗兩界の事に當りて英雄王たるもの、即衆人の一人を推戴するもの、全く此世より



新教改革は古道復歸なるのみ

脱却せるが如し。然れども此事眞ならば余は全く此世に絶望せむ。我が極めて深く信ずるところ其然らざるにあり。靈俗兩界若し帝王なく、眞王なくんば、無政の外殘すところなけむ、是尤も憎疾すべきものなり。「プロテスタント」教は何等の民主無政を來らしゝも、新且眞なる統御と秩序との起端なるを見るべし、是僞王に背反するなり、他日眞王の起るに對して傷むべく而かも止むべからざる準備なり、このと少しく說明を要す。

まづ首として之を曰はん。此私斷なるもの實に世上の新事物たるに非ず、是只當時の世界に新なるのみ。宗教改革中種類の新なるものなく、特なるものなし、只虛僞假相に反して眞と實とに返へるのみ、古今萬般の改善、醇眞の教、皆然らざるはなし。若し能く之を察せば私斷の自由は終始世上に存せずんばあらず。ダンテは其眼を刮らざりき、自ら桎梏を加へざりき、彼其カトリック教に據りて茲に一隻の烱眼を具したりき。他のホグストラーテン、テッチェル、ドクドル、エック等の徒今カトリック教の隷僕たりしも何かあらむ。裁斷の自由といふか、

誤謬を攻撃するは眞理と合する所以

鐵鎖暴力何すれぞ人心の信否を強えんや、人の判斷は其不滅の光なり、獨り上帝の恩寵に據り人茲に立ち茲に信ず。至慘詭辯のベラーミン、狂醫の敎を說き、孱弱の服從を說くもの、猶其自信の權を棄つるに當りて、一種の自信を用ゐざる可らず。此事最も可なりと曰ふは即所謂其「私斷」に非ずや。眞人存するところ、私斷の權亦力を逞ふして存ず。眞人の信ずるや、其全判斷力を以てし、心內の光明と辨識とを以てす、而してかくの如く信じ來れり。僞人は只に其信ずるを信ぜんと力めて之に處するや其道自ら異なり。新敎は後者に曰ふ禍なる哉と、前者に曰ふ善い哉と。是實に新說に非ず、一たび唱へられし古言に返るなり、曰く醇なれ、誠なれと、其眞意また茲に外ならず。マホメットは其全心を以て信ぜり、オーヂン及び眞にオーヂン敎を奉ぜしもの其全心を以て信ぜり。彼蓋其「私斷」によつて斷ぜしところ此の如し。

而して余は之を斷言せんとす。私斷の運用正く進まば決して必ずしも私橫なる獨立孤離に終らず、寧ろ必ず其の反對に終ると。無政を起すものは正直の研究



獨創の功は至誠にあり

に非ずして、誤謬、不正、半信、不眞なり。誤謬に抵抗する人は眞理を信ずる一切の人と協合の途にあり。單に空說を信ずるもの丶間に、合同の成るべきなし、彼等の心皆死して事物にすら同情を致すに由なし、心死せずんば事物を信ず可し、流說を信ずべからず、已に事物に同情せず、況んや其同胞に然かせんや。已に人と合する能はず、彼は無政の徒なり。合同は獨り義人の社會に成る可し、而してこゝに遂に善且確たるべし。

此等の論爭に於て一事の屢々等閑視され、甚きは全く度外視せらるゝものあり、其信ずべき眞理、誠心以て信ずべき眞理は、人必ずしも自ら發見するの要なきこと是なり。前に述べし如く偉人は其第一資格として至誠なり、然れども人誠ならんが爲め必ずしも大なるを要せず、是萬有萬世の要に非ず、只不幸にして腐敗せる時代の要なり。人は他より享受せしものを信じて之を至醇に己れが物となすを得、而して他に對して感謝極なかるべし。獨創の功は新奇に非ずして至誠にあり、信ずる者は獨創の人なり、其信如何に論なく之を信ずる、己の爲め

にして他の爲めに非ず。此意を以てせばアダムの子孫皆誠人たり獨創の人たるを得べし。何人か天之に命じて不誠ならしめんや。此の如くして全時代即吾人が稱して信仰の時代となすものは獨創なり、其衆人若くは其多數は至誠なり、是豐饒偉大の時世なり、其工人各其範圍内に在りて假相上に勉めず、實際上に勉め、而して事各其果を結ぶ、此の如き事業の和は大なり、物皆醇なるを以て一途に傾注すれば也、物皆加にして一の減なるもの無ければ也。こゝに眞の結合あり、統御あり、忠順あり、微々たる人世、人に景福を賦與し得べくば一切の眞にして且祥和なるもの皆こゝにあり。

英雄崇拜は革命と反するに非ず

英雄崇拜と曰ふか。あゝ人自立、獨創、眞實なること、是彼をして厭ふて他人の眞理を敬信せざらしむると相去るや極めて遠し。これ只人をして他の死文、空說、不眞理を信ずるを欲せざらしめ、爾かく之を必し之に迫りて負く能はざらしむる者なり。人は眼を開きて又眼を開くが故に始めて眞理を享く、其眞理の師を愛するに先ちて何すれぞ眼を閉づるを要せんや。感激純忠其善く愛するところ、獨り已を暗より光に導びきし英師にあり。此の如き者は眞に敬すべき眞英雄に非ずや、妖蛇を鎮せる者にあらずや。世上吾人の公敵、即ち虛僞と稱せる妖魔は、彼の勇に斃る、吾人の爲めに世を征服せるは彼なり。見ずや、かるが故にルーテル彼自ら眞の法王として、靈父として敬せらる、而して彼實に法王たり、靈父たる也。ナポレオンは極端共和黨の背亂極りなき内より出て來て王たり。英雄崇拜は決して死せず、また死する能はず。忠順と主權とは永く世に絶ゆることなし、虛飾假相の上に立たずして眞實と至誠との上に立てばなり。これ眼を閉ぢ私斷を斥くに因らず、之を開きて見るべき某物を有するに因る。ルーテルの使命は虛僞の法王君主を廢するにあり、相去ること遠しと雖も新且純なるものに生と力とを與ふるにあり。

一時の禍は忍ぶべし

故を以て夫の自由といひ、平等といひ、公選といひ、獨立といふもの、——吾人は之を目して終局となさず只一時の現象となす。其持續久しかるべく、爲めに吾人の困厄悲むべしとするも、吾人は須く之を好遇して前過の刑罰となし、

後慶の徴證と爲すべきなり。到處人は假裝を捨てゝ實に復らずんばあらず、爲めに費すところ如何を問はず是必ず爲すべきものなり。詐人は昧者を御せんと擬して上に虛妄の法王あり、下に私斷を有せざる信徒あり。我之を以て何をか爲さんや、只慘禍と誤謬とあるのみ。聯合は詐人の間に生ず可らず、水平と鉛垂と二者直角を爲すなくんば建築決して成るべからず。「プロテスタント」教以來あらゆる革命的運營の裏、余は好果の熟せんとするを見る。是英雄崇拜の廢棄に非ず、寧ろ我が英雄の全世界と呼ぶところのものなり。英雄は誠人の謂なりとせば、何すれぞ吾人皆悉く英雄たる可らざらむ。世擧て誠信ずる世——此の如きもの嘗て存せり、而して將來再び興らむ、斷じて興らざるを得ず、是正しく英雄崇拜者の全種屬なり、眞に優れるものは萬人悉く眞且善なる間にあり て最もよく敬せらるべし。——今吾人はルーテルと其史傳とに急がざるべからず。

ルーテルの生誕地はサクソニイのアイスレーベンなり、一千四百八十三年十一





月十日彼こゝに生る。此光榮アイスレーベンに歸せしは全く偶然なり。其父母は近隣の一小村モーラの礦夫にして此時アイスレーベンの冬市に來りしが、——場裏の混雜中、妻產苦を感じ、行きて路傍の民舍に避け、其生兒をマーチン、ルーテルと呼べり。熟思すれば此事頗る奇なり。微賤なるルーテル夫人其夫に伴して小交易を爲さんが爲めに行けり。思ふに手製の綿糸を賣りて二三の冬季要品を得んとせしならむ。當時全世界中微々として見るべきなきもの、何人か此礦夫夫妻に優らむ。然れども百千の皇帝、法王、君主、此に比して果してよく幾何ぞ、偉人又此處に生れ、光明を放て數百千載世界の導火たらんとす、全世界と歷史と彼を待てり。この事奇且大にして吾人を導きて一千八百年の昔、更に一層微賤の誕生時に返らしむ。この後者に關しては又一辭を發せず、只默考するを可なりとす、言以て之を盡すなければなり。誰か神異の時代去れりといふ、神異の時代は常に此處にあり。

ルーテル生れて貧、其養育亦極窶の間に成りしこと、其天職に全く適せるを見

るべし、これ一切を主宰する上帝の明命に出てしや疑なし。當時小學兒童の爲せる如く彼また毎戸に立ち謠ふて食を乞へり。貧窶缺乏は賤兒の常伴たりき、一人一物も假面を裝ふてマーチン、ルーテルに諂ふものなし、斯くして事物の外見を棄て、其實際間に人となれり。粗野薄弱の小兒、闊大熱誠の心を有し、能力感情に滿ちて艱辛を嘗めしと大なり。然れども何等の辛酸に論なく事物の實理を識ることルーテルの教課なりき。其教は天下を實に返すにあり、世已に假裝と共に住むの久しきに耐へざりき。彼れ嚴冬の旋風、荒冷の暗黑困厄の間に人となり、一朝其慘憺たるスカンヂナビアを脱し、矯たる眞人となり、神となり、基督教のオーヂンとなり正當のトールとなり其雷槌を奮てヂョーチュン及怪魔の醜類を擊たんとす。

ルーテルの發心

思ふに彼が生涯の一轉機は其友アレキシスがエルフルト門外の雷死にあり。是より先ルーテル辛酸を盡して幼時の貧窶を凌ぎ、萬障を排して篤學の能を現はせり、父彼が後來世に卓越せんことを信じ、命して法律を學ばしむ、是出身の



道なりき。ルーテル好まずと雖ども之に從ふ、時に年十九。彼れ一日アレキシスと共にマンスフェルトにルーテル家の老人を見、歸りて再びエルフルトに近くや、雷雨襲ひ來る、かくてアレキシス雷火に擊たれてルーテルの脚下に斃る。あゝ人生何ものぞ、燒くること紙の如く一瞬にして茫たる永刼に去る。王位法官等俗界の榮幾何ぞ、見よ共に縮栗して彼にあり、大地一たび開けば忽然として滅して獨り永刼の留るあるのみ。ルーテル感慨止まず、身を神に捧じて獨り之に仕へんと決す。父衆と共に止むれども聽かず、遂にエルフルトの「アゥガスチン」寺院に入りて僧となれり。

不幸遺難失望

良意決然茲に始めて開暢せる、是ルーテルの傳記中第一次の光明なり、然れども當時只四望暗黑裏の一光明に過ぎず。彼自らの言に因れば彼は敬信の僧にして誠實黽勉力めて眞理に盡せしも、思ふ如くならず、其の艱難減ぜずして寧ろ宛然無限に增加したり。寺院の新參として賤役に服するは其患ふる所に非ず、唯純深至誠の心種々の疑惑に陷り、自ら死せんこと遠からじ、死して益恐るべ

「バイブル」を得て信據す

しと信ぜり。ルーテル常時慘憺曰ふべからざる恐怖を懷き、永刼の刑罰に處せられしを思へりと曰ふ。之を聞くもの誰れか彼を憐れまざらむ、是其謙下至誠の明徵にあらずや。抑も彼何の德ありてか天に昇らん。かれ從來ただ忠難と苦役とを知るのみ、此報景福に過ぎて信ず可らず。斷食、徹宵、供養等の敎義に因り靈魂如何ぞ救濟を得る、是彼の悟る能はざるところ、彼遂に至難の悽慘に沈み、踰跟として無間失望の絕淵に彷徨せり。

此時に當てりエルフルト圖書館に羅甸文の聖書を得たること、是最好の發見たらずんばあらず。ルーテル從來嘗て此書を讀まざりき。今是に據りて斷食、徹宵の外別に爲すべきあるを學べり。敬信の經驗を有せる同學の一僧亦彼を扶けたり。ルーテルは今悟る、人は禱詞を歌ふて救はるゝに非ず、神の大慈に因りて救はると。是れ前者よりも信ずべきに近し。彼漸次盤石上に於ける如く基礎を据えたり。此好扶助を與へし聖書を崇べるは怪むに足らず、彼是を敬せしと正に此聚至上の言を敬する如く、斷して之に憑依せんとし、後果して死に至る



始めてローマを見る

まで確然之を遂げたり。

然れば是彼が暗黑の救解なり、暗黑に對する終極の凱旋なり、吾人之、彼の改宗といふ、其一身にとれば全生中の最要なるものなり。彼今日々平和と了知と を增し、天賦の才德を發揮して寺中國中の要路に當り、益人生の正業に要ある を認められしは、自然の結果なり。「アゥガスチン」寺廳彼が才あり信ありて其職に適するを知り、出して宣敎に從事せしむ、サクソニイ選擧侯フレデリック は賢王と呼ばれ、眞に其稱に背かざるもの、今ルーテルを認めて好人物とな し、擢んて丶其キッテンブルク新大學の講師とし、又併せて說敎師とす、此兩 職に當りて他に於けると等しく平穩なる人生の範圍にありてルーテル益々好人 の敬愛を得たり。

ルーテル二十七歲の時宣敎の爲め寺院より派遣せられて始めてローマを見たり。法王デューリヤス第二世及羅馬の現狀、正にルーテルを驚愕せしめしこと疑なし。聖都を拜し、地上上帝の最高僧位を拜せんとして彼こゝに來れり、而し

て其見しところは如何、是普く吾人が知るところ也。此事必ずルーテルに多くの感慨を與へしならむ、而れども之に關せる記錄多からず、思ふに彼亦何の言以て之を錄すべきかを知らざりしならむ。嗚呼此羅馬、僞僧の坐場、聖美に粧はれずして他の服裝を纏ふもの僞なり、然れどもルーテルに取て是何かあらむ。己は卑人のみ、如何んぞ世を改善し得む、改善云々は其思考を去ること遠し、卑賤孤獨の人如何んぞ世に干渉せんや。しかるすは更に優勝なる者の業なり。我が務は正く世上に歩を運ぶにあり、願くは吾只我微細の務を果さん、餘事は恐るべきも、厭ふべきも、是上帝の手中にあるのみ、我が知るところに非ず。

法王若しルーテルを激せざりせば如何

若し羅馬「カトリック」教此ルーテルに接觸せずして其荒廢の軌道を進み、而て其小徑に逆て之が攻擊を促すこと無かりせば其結果果して如何、之を想へば頗る奇なり。然らば彼羅馬の弊害に關して默然緘口、一に之が處置を上帝に委したらんこと十分信ずべきなり。推讓靜穩の人豈に好て擅に要路の人物を襲はんや。前に述ぶる如く其正當の業は己の義務を行ふにあり、濁世に在りて正く歩み、





以て己が靈を救ふにあり。如何せん羅馬の高法廳之に撞突せり、遠くキッテンブルクに隔りて彼ルーテル之が爲めに正直に生くる能はず、遂に辯難抵抗其極に奔り、己擊たれて再び他を擊ち、斯くして二者の鬪爭に至れり。ルーテルの傳記に於て此事須く留意すべし。思ふに彼が如き謙冲靜和の人、嘗て世に紛擾を起しゝことなし。彼孤獨を愛して靜處に業を樂まんこと、名聲を得しは好む處に非ざること見るべきなり。名聲よく彼に何をか爲さむ。其の世上進路の終は無限の天なり、是れ照々として疑ふ可らず、數年ならずして彼或は之に達せん、或は盡末來全く之を失はむ。ルーテルの怒を激して新教改革を起しゝものは「ドミニカン」派に對する「アゥガスチン」派の賤陋なる私憤に出づと曰ふ如き愚說に關しては余何をか曰はんや、此の如き說を唱ふる者あらば余は之に告て曰はん、先づ能くルーテル輩を明判すべき思想の領域に入れ、然る後始めて汝と論ぜんと。

法王レオ第十世の命を受け、僧テッチェニル（此人たゞ小財を得んとせしのみ、其

「赦罪狀」○ルーテルの反抗

彼若某物なりせば基督教徒に非ずして却て異教徒たりしが如し）商賈の途に出て行てキッテンブルグに其醜業を行ふ。ルーテルの配下赦罪狀を購ひ、懺悔所に彼に抗して曰く我罪既に赦さると。ルーテル若其職を嚮うするを欲せず、些々たる自個の領域に當りて、怠惰怯懦の笑を受くるを欲せずんば、赦罪狀に抵抗して起ち、この物徒爲なり、侮慢なり、何人も之に因て赦罪せられずと絶叫せずんばあらず。是全改革の起端なり。一千五百十七年十月末日此テッチエルの第一挑戰ありてより、繼さて辯難となり、論爭となり、擴張益大に、紛擾益高く、炎々遂に全世界を蓋ふに至れり、是吾人が皆能く知るところなり。ルーテルの心願は此等の禍害を療するにあり、其思ふところ教會に分離を起して法王に背反すると相去ること尚遠かりき。莊嚴なる異端王はルーテルと其教義とを等閑視せしが其喧擾を鎮せんとし、緩策を試むること三年、遂に火を以てよく之を終へんとす。即刑吏に命して其文章を燒かしめ、又之を縛して羅馬に致さしむ、蓋し又之を燒かんとせしならむ。一百年以前ハッスに處せるところ、ゼロ



ルーテル奮起す○法王の令狀を焚く

ームに處せるところ此の如し、曰く火、簡單の論法と曰ふべし。憐む可しハッス彼れ好望を抱き、安全を懷ひてコンスタンス會議に來れり。彼熱誠の徒にして背反の徒に非ず。衆直に之を廣三尺、高六尺、長七尺の石牢に投じ、其眞聲を此世より燒き去り、烟火を以て之を塾息せしむ。あゝ是良處置に非ざりき。余は敢て今ルーテルが全く法王に離叛するを恕す。莊嚴の異教徒、此火刑狀を以て當時世上最勇者の義憤を燃せり。最も謙冲最も靜和、而かも又最も勇猛なるもの、彼今已に燃えたり。我が此眞理着實の言、人間知能の極を盡して、地上に上帝の道を高め、人間の靈魂を救はんとするもの、——汝地上に上帝の宰として之に答ふるに火と刑吏とを以てするや。此言力めて上帝の使命を汝に配せんとす、汝之に答へて我と我言とを燒かんか。思ふに汝上帝の宰に非ず、他物の宰なり。我汝の令狀を虛妄となして燒く。汝次に其可と爲す所を爲すべし、我爲す所は即是なりと。——一千五百廿年十二月十日事始りてより略三年、ルーテル大衆の前に立ちキッテンブルグの「エルステル」門外に奮然として法王の投

火狀を焚きぬ。キッテンブルグ叫んで之を望めり、全世界亦之を望めり。法皇其叫を激せしと拙なりといふべし。是國民覺醒の叫なり。靜和なる獨人の心、推讓にして善く事に忍ぶもの、遂に負擔に堪へざるを致せり。空文、異端法王及虛妄假裝、其治己に餘りあり。而して更に茲に現はれ凜然として萬人に告ぐる者あり。曰く上帝の世界は假相に立たず實在に立つ、人生は眞なり僞にあらずと。

ルーテル偶を斥く

前に述べし如く吾人はルーテルを目して偶像破壞の預言者となすべし、人間を實に返す者と爲すべし、是偉人賢師の職なり。マホメット曰く汝が偶像は木片なり、汝之に油蠟を塗れば群蠅來り附す、我汝に告ぐ、是神に非ず、黑材なりと。ルーテルは法王に曰ふ汝が稱して赦罪狀と呼ぶもの墨汁を摩せる一片の粗紙なり、たゞ此くの如きに過ぎざるなり。罪を赦すは獨り上帝にあり。法王の位は神寺を總轄するもの、是豈に服裝と羊皮紙との虛觀ならんや、是儼たる事實なり、上帝の寺院は虛觀に非ず、冥府妥天は虛觀に非ず。汝我に迫るを以て



ヲルムスの大會

余こゝに立つ。微たる獨國の一僧徒我こゝに立ちて汝より强し、孤獨友なしと雖も我は神の眞理に立つ、汝寶冠三重帽を有し、財府兵庫を有し、靈俗二界の大權を有するも立つところは妖魔の僞にあり、汝よく强からず。

一千五百廿一年四月十七日ヲルムスの大議會あり。ルーテル此に臨めり、是近代歐洲史中最大の光景なり、爾來文明の全史茲に端を發す。商議論爭相重なりて遂にここに及べり。少帝チャーレス五世、獨乙の公候、法王の使節、僧俗の高官を率ゐて茲に集る、ルーテル臨みて其改言するや否やを辯すべし。天下の王侯聯りて彼にあり、礦夫ハンス、ルーテルの子一人、神の眞理の爲め立てこゝにあり。之より先朋友彼に告ぐるにハッスの事を以てし、止めて行く勿らしむ。ルーテル聽かざるなり、是に於て朋友更に相會し、騎し出てゝ之に逢ひ、諫止益激し。ルーテル答へて曰くヲルムスの妖魔瓦屋の如く多しと雖も行かんと。翌日其會議廳に行かんとするとき、民窓屋に集り或は凜然彼に告ぐるに改言するなきを以てし、聖經中「人の爲に我を知らずと曰ふ者」云々の句を叫びて

儼として且請ひ且諫む。而して是實に吾人天下の請ふ所に非ざりしや。心靈縛せられて暗中にあり、妖魔怪物三重帽を戴き自ら稱して神父といふ者の痲痺するところとなり、叫んで曰ふ吾を救へ、是汝が任なり吾人を棄つる勿れと。

ルーテル吾人を棄てざりき、二時間の長演舌、肅然聰明の調あり、正當の理ありて服從を需むる者には從ひ自餘の者には決して從はざる慨あり、曰く我が文書一部分は我が物なり、而かも一部は上帝の言なり。我言は內に人間の弱點を混ず、不愼の憤怒狂瞽等多かるべし、之を捐つるを得ば幸なり。然れども眞理と神語とに據る者は決して棄つる能はず、我如何ぞ之を能くせん。終に莅んで曰く、聖經の論據に因り、若くは明白正當の論辯に因て我を難ぜよ。然らずんば我決して改言する能はず、良心に背きて事をなすは安全ならず、また謹愼ならず。我こゝに立つ、我他に爲すこと能はず。神それ我を扶けんと。

是實に近代史上最重至要の時なり。英の淸敎、英國、英國議會、亞米利加、近代兩世紀の大業、佛國革命、歐洲及今其現今の事業、此等の萠芽皆こゝに存せ



改革に繼げる戰亂を以しルーテルを責むべけんや

り。若しルーテル此時に當て爲すところ異なりせば、此等の物悉く變ぜん。歐洲の天下は今彼に問へり、我益々沈下して虛僞に陷り、沈停腐敗に陷り、憎疾すべき死に陷らんか、或は苦惱を忍て僞を掃ひ、療せられて生きんかと。

此改革に續ぎて分離、爭鬪、大戰起り、今日に到て未だ容易に了るところを知らず。此に關して難詰論評多し。此事允に悲むべく、其實在否む可らず、然れどもルーテル畢竟之を奈何せんや。此を以て宗敎改革を責むるは奇怪なり。ハルキュールス、オーヂァス王の廐舍に流を注ぎしとき、紛擾の大なりしこと疑なし、然れども余は之を以てハルキュールスの罪となさず、罪すべきものは他に存す。革命起らば縱まにその効果を來さん、然れども革命來らざるを得ず。列世の法王及之を辯護する者或は爭ひ、或は嘆じ、或は詰らば、天下の之に答ふる左の如し、曰く汝の法王職實に僞となれり、先きに善なりしも何かあらん、汝猶善なりといふも何かあらん、吾人は已に之を信ずる能はず。天我に明知を與へて之に據らしむ、而して明知は汝を信ずべからずと曰ふ。吾人は汝を信ぜず、

信ぜんと力めず、吾人は敢て之を信ぜず。此もの詐なり、我若し詐りて之を信ずとなさば一切眞理を授けし者に背かん。之を拋棄せよ、欲するものあらば來て之に代はらしめよ、我は已に之を容るゝ能はずと。――戰爭の責任はルーテル及其新派にあらず、彼に迫りて抵抗を促したる僞物にあり。ルーテルの行爲は、正人たる者爲すべき權あるのみならず、爲すべき聖務あるものなり。僞物問ふて曰く汝我を信ずるや、答へて曰く否と――費すところ如何に論なく、失ふと如何を顧みず、是必ず爲さゞるべからず。靈界物界の組織統合遙かに法王制封建制其最眞の日に於けるに優るもの此世の爲めに來らんとす、其來らんと決して疑を容れず。然れども其來るや虛觀假相の上に來らず、事實の上に來り、來るH又事實の上に立たん。結合若基礎を僞の上に立て、吾人は命じて、詐をいへ、詐を行へといはゞ、我之を以て何をか爲さん。平和とは何ぞ、昏迷禽獸の如きものも平和なり、嫌厭すべき墳墓も平和なり。然れども吾人は生ける平和を求めて死せる平和を求めず。





然り而して新の功德を頌すると共に、吾人をして舊に酷ならしむる勿れ。舊は今眞ならずとも一たびは眞なりき。舊はダンテの時代に當りては詭辯自蔽等の詐術を要せずして、よく眞と認めらるゝを得たりき。是當時は善なりき、獨り是のみならんや、其精神中には實に死せざる善あり。抑も今日に到りては「羅馬教要なし」と曰ふも猶恐なり、寺院の新設等を致して羅馬教再興の兆ありと曰ふは虛辯の尤も甚き者なり。奇なる哉、二三の羅馬教堂を數へ――二三「プロテスタント」派の贅辯に聽き、――新徒教と自稱して冗語を弄する昏迷魯鈍の輩に聽き、而して曰ふ、新教の死するを見ずや、法王教は之よりも生けり、而して此が後猶存せんと。允に昏迷魯鈍にして自ら新教徒といふもの一にして足らず」是死せり、然れども新教は未だ死せず。眼を放てば新教今日其ゲーテを生ゝ、其ナポレオンを生じ、獨逸文學及佛蘭西革命を生ぜり、是實に生存の明徵にあらずや。獨りこれのみならんや、新教の外、他の生けるもの何かある、他の生けるものは只電氣的のみ、生命此の如きは快ならず、又永續せず。

羅馬舊教は返る可らず

法王教は寺院を新設し得、然かすると多きは敢て妨げじ。然れども法王教は返る可らず、猶異教の返らざるが如し、而して此異教亦猶殘留するところあり。此事恰も海潮の如し。人岸上に波浪の旋回するを見ん。始めは數分間其方向を辨ずべからず、然れども之を視ること半時せよ、法王位のあるところに見ることを半世紀せよ。嗚呼老朽法王の再興より大なる危難、願くは歐洲に起らざれ。法王興るべくばトール亦起て可なり。而して此動搖亦理なきに非ず、トールは全く死せり、然れども老朽法王は暫時猶全く死するとなからむ、又全く死するを要せず。中に存ずる善德全く新に遷るまては舊全く死せず、羅馬教の形を以て爲すべき善事業猶存せば、——要するに其嚮導を仰ぐ善人猶存せば、此物其採用遵奉を續くべし。かくして內に存する眞理全く吾人の吸取する所とならん迄之を排斥する吾人の面前に彷徨すべし、而して其後始めて何人も之を信ぜざるに至らん、今猶存するは一種の目的あればなり、之を能くする間其存するに任せて可なり。



ルーテル生存中戰爭起らず

寬恕

ルーテルの生存中には戰鬪殺戮嘗て起らざりき、是特に著明の事實なり。其猶世に存せる間、論爭未だ變じて戰爭とならざりき、我茲にルーテルの偉大を徵すべしとす。大亂を攪起して、遂に自ら斃れ、其渦中に轉ぜざるもの、果して幾何かある、革命者の常途實に此の如し。ルーテル能く夫の大革命の帝王となりて之を持續し、階級職務の如何を問はず、新教の徒をして皆己を仰がしめ、之を鎭して儼然中心の重を致せり。人此の如くならんと欲せば帝王の材を有せざるべからず、天賦の能力を有して事物の眞相を穿ち、剛健正直善く茲に樹立して他の眞人を來附せしめざるべからず。然らずんば永く衆人の首領たるを得べからず。ルーテルが明快深遠の決斷、其萬種の力量、就中沈默寬恕中庸の德とに於て特に著しきものあり。

我は特にこゝに寬恕といふ、彼の寬恕は至醇也。ルーテル事の樞要なると然らざるとを辨じ、樞要ならざるものは之を放任す。一日彼に訴ふるものあり、曰く新教徒某々の教師、袈裟を着せずして說法するを欲せずと、ルーテル答へて

ルーテル著作

曰く可なり、袈裟何の害かあらむ、說法に當て之を用ゐるに任ぜよ、要あらば三重を着するも可なりと。カールスバット肖像破壞に於ける、「アナバプラスト」の件に於ける、農民軍の件に於ける、彼の行爲實に剛勇の堂々たるを證す。是氣の勇に遙に異なり。彼は堅確敏捷善く事の何たるを知り、剛正にして事物の正路を示す、人皆之に從ふ。

ルーテルの著述に徵するも亦此の如し、其文辭は今吾人に陳腐となれり、然れども之を讀めば一種の妙味あり。而して單に文法上の文今尙讀むべし。ルーテルが文學史上の功績は最大なり、彼の文後に全國の文章語となれり。其廿四卷の書は好文に非ず、忙手之を書する、素より文學の爲にせず。然れども余は著者の剛爽、醇眞、高遠の性を徵すべきこと未だ此書に優るものあるを知らず。天眞なり、朴訥なり、質直なり、粗野純眞の意力なり、力量なり、光輝內より閃出して其鑿々たる訛文實に隱を穿ち微を顯はすを覺ゆ。中に又詼諧あり、溫情あり、高大あり、深遠あり。彼亦一詩人たるを得べかりしなり。彼は其務叙事詩



ルーテルの勇○惡魔を叱す

を行ふにありて、之を書するにあらざりき。余は彼を大思想家と云ふ、心の偉大己に之を徵す。

リヒテル、ルーテルの言を讀んで曰く彼の言半は戰鬪なりと、誠にしか稱するを得べし、彼が要質は戰て勝つにあり、一個の勇夫たるにあり。チユートニック人種の特性は勇なり、然れども此中にありて、後世の傳ふ所となるもの、未だルーテルより勇なる者あらず、其心之に優りて勇なるものあらず。其ヲルムスに於ける惡魔の藐視、今若し之を曰はゞ人稱して大言となさん、彼にありては然らず。ルーテル思らく冥府の妖鬼常に人を襲ふと。其著述中此のと屢見るべし、而して之に基きて彼を嘲笑するものあり。ワルツブルグの室內、ルーテル聖經を譯せる處、今猶壁上に黑點あるを見るべし、是其鬪爭の一紀念なり。ルーテル一日坐して讃歌の一篇を譯す。勞久く、食斷ち、身病み、困弊甚し、其時醜怪曰ふべからざる幻影現はれて彼に譯を廢せしめんとす。ルーテル之を見て惡魔となし、蹶起叱して硯を之に投ずれば影忽ち滅せり。黑點今に殘りて數

兇男にあら形○愛情、

事の紀念を爲す。今日何等醫學の子弟も科學に因て此幻影を如何に考ふべきかを說く。然れども妖鬼に面して之を叱する心、これ恐怖を知らざる最高の徵證に非ずや、彼が恐怖すべき者此地上に存せず、此地下に存せず、勇なりと云ふべし。彼嘗て書して曰く惡鬼此事我が恐怖に出てざるを知る。我惡鬼を見て之を叱せしと擧て數ふべからず、ライプチッヒのジョーヂ公一惡鬼に及ばざるや遠し、我若しライプチッヒに要あらば、假令天ジョーヂ公の輩を雨すと九日なりとも行かんと。行きて犯すべきジョーヂ公の類衆果して幾何ぞ。

然れどもルーテルの勇を以て兇勇となし、粗暴、不遜、頑硬、唯悍、恰も衆の爲す如きものとせば大に錯らむ。是と相去る遙に遠し。允に思慮好情の存せざるより、發する悍勇あり。吾人は虎狼の勇を賞すること大ならず。ルーテルに至ては遙に之に異なり、之を誣て兇勇となすよりも不正の勝るものなし。彼溫好にして慈愛に溢るゝこと、眞勇者の皆然るが如し。虎狼は其優者を逃る、虎狼は吾人の稱して勇と呼ぶところにあらず、彼只猛な



卓上談○ルーテル冒行

るのみ、酷なるのみ。ルーテルが雄偉粗豪の心中慈母の如く又稚兒の如き者あり、余は之に優りてよく人を感動せしむるものを見ること稀なり。事に處しては正直强頂、語に出れば純眞粗樸、其淸淨なること泉水の岩を出づるが如し。吾人は已に彼が靑年の時に當りて失望責躬の遜狀を見たり、これ卓絕沈深の溫雅、過敏過好の愛情を示すにあらずして何ぞや、これ正に彼の可憐詩人カウパーの蹈むところの途なり。微々たる評家はルーテルを目して弱となし怯となさん、彼の特質は謙虛和冲なり、而して此の如き心中に起るものは眞勇なり、一たび奮へば慷慨叱咤となり、燃えて赫灼たる天上の火焰となる。

ルーテルの遺著「卓上談」は其朋友の選にかゝり、逸話訓言等を載せたもの、其全著述中尤も珍なるものなり、ルーテルの人品佳質自ら玆に現はる。幼女マダレンの死に際して其行ふところ沈靜偉大にして尤も感ずべしとなす。渠其少女の瞑せんとするに服す、然れども暗に其死を免れんを望む、かくて肅然として心中少女の靈魂冥界を馳くるに從ふ。肅然至誠思ふに堪へたり、獨斷の信條

ルテール 冒行の綴き○樂を好む

法令あるも、彼人間智識の極めて脆弱なるを知る、神もし許さば少女マグダレン神と共にあらむ。ルーテルに取りて是一切を掩ふ、然り「イズラム」は一切なり。ルーテル嘗てワルトブルグ城にあり、夜半仰て天を望む、穹蒼極りなく雲遠く飛ぶ、渺々蓬勃として磐なきもの、之を支ふるは誰ぞ。是が支柱を見しものなし、然れども之を支ふるものあり、神即ち之を支ふ。神は大なり善なりと知るべし、而して見る可らざる所は之を信ぜざる可らず。——一日、ライプチッヒより歸りて彼れ田畝の美なるに驚く、芳莖相接して、黄穂纍々穎を垂れ風に霏く、隴畝神命に應じてこゝに再び穀を生じて人の食となす。——キッテンブルクの園中、一夕小鳥來りて塒に宿す。ルーテル曰くあゝ此小鳥、上に星斗あり百千世界の天あり、而して彼翼を收め恰も家に於けるが如く安じて息めり、造物主又彼に家を賜ふと。——而して嬉々たる談笑亦乏しからず、彼に自由偉大の心あり、其日常の言粗豪醇粹にして處々詩的の美あり、之に接して友愛俊偉の人たるを覺ふべし。彼の音樂を愛すること是恰も其溫情の綱領にあらずや。彼



其顔貌○眞偉人

笛に托して逸蕩奔放曰ふべからざるものを發す、曰ふ惡鬼我笛を聽て逃るると。一方には妖魔を叱咤するあり。他方には音樂の愛此の如きあり、此を大人の兩極と曰ふべし。一切の雄大なるもの其間に存す。

我はルーテルの顔を以て善く其性質を表はすとなす、クラナッハの肖像中眞のルーテルを見るべし。顔粗樸に額骨高く起りて、精力の優るゝを表し、一見殆んど厭惡を生ず。然れとも眼中特に悲哀の慘たるあり、言以て之を曰ふべきなし、是溫厚友情の源、是ありて餘部に高遠の印象を與ふ。前に曰ふ如く嬉笑此のルーテルにあり、然れども涕淚また彼にあり。涕淚と難業と、是また天の彼に賦するところ也、其一生の礎は悲哀なり、誠實なり。後來凱勝の後、彼は生の懶きを語る。以爲ひらく、神獨り事物の進路を整へん、思ふに「審判の日」遠からずと。己に關して望むところ唯一、曰く神我が勞を宥して靜に瞑目するを得さしめよと。此言を以てルーテルを疑ふものは眞に彼を知らざるなり。——我はルーテルを眞偉人と曰ふ。智、勇、情、誠皆悉く大にして最も愛すべく最も

宗教革命の苦國に於ける結果

尊ぶべし。其大なるや、彫截せる方尖塔の如きに非ずしてアルプスの高嶺の如し。——單純、正直、自然にして自ら大なりと宣せず、其目的大を欲するに遙に異なり。嗚呼是宛然、花崗石厚の突兀として高く遠く天に冲するもの、而して其の巖罅に當りて清泉綠溪花草の燦たるあり。眞個靈界の英雄なり、豫言者なり。是亦造化と實蹟との兒なり、近代並に將來の世紀仰て爲めに天に謝すべし。宗教改革の致得せる結果中最珍なるもの、特に英人に珍なるものは清教徒なり。ルーテルの邦にありては新教忽ち衰へて荒寞の狀を呈し、已に宗教にあらず、信仰に非して、神學上の贅論となり、人心に根據を置かずして其要質は懷疑論爭となり。此論爭益盛にして、遂に夫のヲルテーアの徒に到る。——怪なる哉、グスタフス、アドルフスの論よりして佛國革命の誹に移れること。然れども我島國には夫の清教徒なるもの興りて、遂に蘇人中に「プリスビテリアン」及國民教會をなし、發して人心の眞事業となり、世上著明の結果を來せり。是新教中上りて信仰となり、皇天人心の連合となりて、かく史上に現はれたる唯一の形



清教は純正のものなり○「メーフラワー」の出帆

式と云ふべし。吾人はノックスの爲めに二三の言を費さざる可らず。彼已に剛勇著大の人物なり、然れども後來蘇國の信仰となり、新英國の信仰となり、オリバア、クロムエルの信仰となるものを創設せる高僧たるを以て特に重要なりとす。歷史は之に關して將來言ふべきものを有せむ。

吾人は縱に清教を難ずるを得べし、而して何人も之を目して粗野缺陷と爲さざるはなけむ。然れとも其純眞なるとは萬人悉く了すべし、此物造化に採用せられて今に到るまて榮ふればなり。時として我之を曰ふ、世上の萬物皆勝敗を賭す、正く之を解すれば强は價値の標準なりと。物に歲月を貸せ、而して成らば是物正しき也。今アメリカの「サクソン」人種と、二百年前和蘭のデルフト港より「メーフラワー」號出帆の小事とを合せ見ずや。吾人若し希臘人の如くなりせば、こゝに一詩を得しならむ、是造化が偉績を以て大土の上に書する所の詩也。此事正にアメリカの元始なり、是より先きこゝに飄零の移民ありき、また某種の團體ありき、然れとも其精神は實に是に始まる。憐むべし此輩其本國を遂は

れ、和蘭に住む能はず、遂に新世界に移らんとす。こゝに荒林あり、猛獸あり、然れとも酷なること法廳刑史の如くならず。彼輩思らく、力作せば地我に食を給せん、無窮の天また我を蓋はん、因て靜平の生を送り、偶像を拜せず、眞神を拜し、善く現世に住して永刼に備ふること得んと。爰に於て共に小資を集め、小船「メーフラワー」を雇ひ將に航して海に入らんとす。

其發途の儀式載せてネールの「清教徒史」にあり。吾人寧ろ之を稱して祭典といふべし、眞に拜禮の行なればなり。宣教師衆と共に岸に下り、後に留まるものまた之に從ひ、共に肅然として祈る。願くは神其微を憐みて共に夫の荒漠に行かんとを。荒漠を造れるは亦神なり、そこに在ますと、こゝに於けるが如からんと。嗚呼彼輩事業を有せり、弱孩兒より甚きも、眞ならば早晩必ず强たらん。當時清教は只笑ふべく輕んずべきものなりき、然れども今日誰か之を笑ふを能くせん。清教利器あり、勁筋あり、火器あり、海陸軍あり、以て舟を出すべし、以て森を倒すべし、以て山を移すべし。今日普天の下未だ之より强たるものあ





らず。

蘇格蘭史中我はたゞ眞に一時代あるを見る、蘇國は此ノックスの改革を外にして世界的趣味あるもの一も存するなしと云ふべし。寒貧荒涼の國、爭鬪、分離、流血斷へず、民粗野缺乏の極にありて、今日の愛蘭土に優らざりき。兒孫の諸貴族是細民より奪ふところを分配するに當りて猶相爭ふを免れず、今日のコロンビア共和國に於けるが如く、彼等の變易は忽ち激して革命となり、舊大臣を絞臺に送るに非ずんば、新大臣を代ふる能はざりき、而して此の如き史上の觀は奇異の特なるものに非らず。勇は即勇なり、我之を疑はず、激戰亦多かりき、然れども其舊祖スカンヂナビアの海王に勝らず、而して海王の功績猶錄するに足らざるなり。蘇國は猶無精神の國なり粗野、淺薄、半禽獸なるものを除けば一も發達せるなし。而して今宗教革命起れり、外觀死せるが如きもの忽ち生命の燃ゆるあり、至高の主義燃えて導火の高に在るが如し、高きこと天の如しと雖も猶地より達するを得べし、是に據て至賤の徒皆に市人となるのみならず、ま

ノックスの改革は蘇國將來文明の原種

た基督の現世教會の一員となる。彼若し眞人たらば眞の英雄たらむ。

然り、我が所謂英雄國民、信仰國民とは是なり。英雄を造るに偉靈を要せず只神造の靈其元に忠なるものを要す、是即偉靈たるなり。此の如きものは吾人已に見たり。再び「ブレスビテリアン」より形を大にして吾人の見るところとならむ、是物來らずんば永續の善あるべからず。或曰く能はずと、誰か能否如何を曰ふ、是此世に現化の事實として存せしに非ずや、英雄崇拜はノックスの時に缺けしや。或は今日人間の成分全く異なりや。エストミンスターの信仰箇條は靈魂に新特性を加ふるや。靈魂を造れるは神なり。神は何人の靈魂をも妄說空言となりて之に滿てる、又其結果に滿てる世界に住めと爵せず。

是より本に復りて說くべし。我は曰ふ、ノックス其國民の爲めに盡しゝところ眞に回生といふべしと。是素より平滑の事業に非りき、然れどもその歡迎せられしや確たり、更に一層粗暴なりしとするも價廉なりといふべし。要するに費すところ幾何なるも猶廉なり、生命の然るが如し。民是に因て始めて生けり、費



すところ如何に論なく、是事先づ必ず爲されずんばあらず。蘇國の文學、思想、工業、ゼームス、ワット、ダビット、ヒューム、ヲーター、スコット、ロバート、バルンス、——此等の人物、現象の中心に當りて我はノックスと「宗教改革」との働くを見る、宗教改革なくんば此等の物如何ぞ生ぜん。豈獨り蘇國のみならんや、蘇國の淸教は英國の淸教となり、新英國の淸教となり、エヂンバラ高等教會の紛擾は廣まりて是等諸邦の戰亂鬪爭となり、紛擾相繼ぐ五十年、遂に所謂「光榮改革」たるもの、保身律、自由議院等と共に出づ。然らば衆人の先鋒にあるもの、夫の露兵のシワイニッツ城に於ける如く、身を投じて濠を埋め、以て後陣をして之を蹈過して攻取の榮を得せしむるといふもの、嗚呼豈に夫れ偶然ならんや。八十八年の好革命、羅幾を穿ち、美服を着け、萬歲を唱へて進むに先ち、夫の粗朴質實のクロムエル、ノックス及農民同盟員に類するもの、險惡泥濘の途に立ち、生命を賭して苦戰し、玆に爭ひ、玆に苦み、玆に斃れ、而して却て世の攻擊侮辱を受くること果して幾何ぞや。

ノックス民に盡したるが爲めに苦を受く

此蘇國人三百年後の今日に當り、恰も罪囚の如く、天下公衆の前に自ら辨ぜざるべからざること、我は以て刻薄の甚しきものとす、而して其咎は、當時力を極めて蘇人中の最勇たりしにあり。彼若し孱弱の庸物たりせば、衆と共に一隅に屏息するを得て、而して蘇國遂に救はれざらん、而してノックス責めらるゝなからむ。蘇人にして其國に功あり、天下に功あるもの、只彼一人のみ。彼れ蘇國の用をなすこと、他の宥を乞ふなき百萬人を合するに等し。而して却て是が爲に國人の宥を乞はざるべからずとなす、又怪ならずや。彼れ胸を鬪爭に暴し、囚船を佛國に漕ぎ、慘雲悲雨の間に竄謫せられ、人の非難するところと爲り、窓戸より狙擊せらるゝところとなり、人生の鬪場にありて艱辛を嘗むること極めて大なり、若し此世其報償の土なりせば、彼是に賠せしこと拙なりといふべし。吾ノックスの爲めに辯解するを能くせんや。此二百五十年、衆彼に關して曰ふところ何かあらむ。然れども吾人今彼が戰鬪を究盡し、明かに彼が凱勝の結果に生を存するを以て、自ら爲めに、訛傳紛議の彼を掩蔽するものを發



ノックスの事業發端

きて、ノックスの眞面目を觀察せずんばあらず。

國民の豫言者たる地位に立つは彼の求めし所にあらず、其較著となるに先ちて四十年間、ノックス全く隱微の生を送れり。彼は貧人の子なりき、大學に敎を受けて僧となり、新敎を採用して其光に據り、自ら歩を導て足れりとし、敢て他に迫りて之を強ゐざりき。彼一紳士の家族中に師範となりて、人其敎を聞かんとすれば、是が爲めに說き、意を決して眞理に據り、眞理を說き、他に功名の念なく、又自ら之に適するを思はざりき。此の如く全く隱微にして四十歳に達し、一旦改革徒の一小團體と共にセンーアンドルーの園を守れり。一日其寺院の法敎使戰徒の失望を戒めし後、卒爾として曰く、吾人今他の說者を要す、吾人の中、僧侶の心情と材能とを有するもの今說かざる可らず、而して我が同侶ジョン、ノックスなる者、此心情と材能とを有せりと。法敎師即ち聽衆に訴へて曰ふ、彼之を有せるに非ずや、然らば其義務果して如何。衆答へて曰く然りと。若し此の如き人、內に有する言を發するなくんば、瀆職の罪あるにあらず

や。可憐のノックス迫られて立ち、立ちて答へんとす、而して一語を發する能ず、慘然流涕し、立て戸外に走れり。此光景實に記するに足る。彼數日慘狀にあり、自ら此大業に對して施すところなきを感じ、又其受くべき辛酸如何を感ぜり。あゝ彼慘として流涕せり。

所謂我が英雄第一の資格即其至誠なること特に此のノックスに見るべし。彼が自餘の性格才能の如何に論なく、其最眞の人物たることは何處に行くも否むべからず。彼特種の天性を以て眞理と實蹟とに據る、眞理獨り彼に對して存す、他は只虛觀妄誕に過ぎず。眞實なるもの其外觀弱且微なりとするも彼たゞ獨り茲に立つのみ。セント、アンドルーの圍の後、ノックス其徒と共に移されてロアール河の舟奴たりしが、一日官吏(若くは僧侶)彼等に聖母の像を示して曰ふ、汝等外道冒瀆の徒、敬んて之に禮せよと。ノックス順已に來るとき答へて曰はく、神母とは何ぞや、是神母にあらず、只木材の一片を彩るのみ。拜さるゝよりも寧泳ぐに適すと言了りて肖像を河に投ぜり。是泛々の戲謔にあらず、結果





の如何に論なくノックス之を眞理として固守せざるを得ず、彼物彩色の木片なり、ノックス豈其禮拜を能くせんや。

此慘憺の時に當り、ノックス其同囚に告げて勇を皷せしむ、其信奉するところ眞にして後必ず榮ふべく、天下を集めて之を覆す能はず。眞實は神の造るところ、强さは獨り是あるのみ。彩色の木片眞と僞り、拜さるゝより其實寧ろ泳ぐに適するもの、果して幾何ぞや。——此ノックス實蹟に據らずんば生くる能はず、其實に攀ると、恰も破船水夫の巖に於けるが如し。吾人彼を見て人は只至誠に因て英偉たるべきを知る、彼が天賦允に大なり。ノックスに於て見るところ、其知能は凡庸にして卓絶のものにあらず、ルーテルに比すれば狹隘瑣細の人物のみ、然れども眞理に對する衷心固有の遵奉に關し、其至誠に關して彼に優る者何處にある、否、彼に等しき者果して何處にある。其心質は眞豫言者の成分なり。モルトン伯嘗て其墓上に曰へり、人面を恐れしことなきもの茲に臥すと。彼は近代一切の人に優て古へブルウの預言者に似たり。强頂峻峭にして嚴然上帝

ノックスとメーリイ女皇

の眞理を固守する、上帝に代て眞理背反の徒を酷責する、正さに是古へブルウの預言者が十六世紀エヂンバラ法敎使の裝をなすもの也。吾人は彼を目するに是を以てすべし、彼に要するに他を以てすべからず。

メーリー女皇に對するノックスの行爲、其宮殿にありて亡狀をなし、こゝに女皇を難ぜること、多く物義を招げり。酷薄粗暴此の如きもの、吾人をして憤懣に堪へざらしむ。然れども事の實際を讀み、ノックスの言意を極むれば、讀者の悲劇的趣味寧ろ壞るといはざるを得ず。彼の言辭粗暴なること斯くの如く甚しからず、我は之を以て當時の境遇に處して極めて佳るなものとす。ノックスの玆に來るは禮儀を致す爲めにあらず、全く他の使命に因れり。女王と彼との對話を讀み、是を以て平民僧が貴女に對する野鄙の亡狀なりと云はゞ、全く對話の意味と精神とを誤らむ。當時不幸にして、蘇國の人民と公益とに忠ならんとせば、人は蘇國の女皇に恭敬なるを得ざりき。故國は奸謀野心のガイス族が獵場となり、上帝の大事は虛妄虛禮と惡鬼の事業とに蹂躪せらるゝを見ざらん



寛恕とは何ぞや

とせば、勞自ら調和の道に出づるを得ず。モルトン曰へり、有髯男子輩に迫りて泣かしめんより、寧ろ婦人等の泣かんと可なりと。ノックスは本來蘇國の反對黨なり、國の貴族地位上より此役に當るべきもの之を果すに適せず。ノックスを他にして何人も往くなし。不幸なる哉女皇、——然れども女皇若し幸なりとせば國は更に不幸なる哉。女皇も亦自ら(自餘の性質と共に)頗る苛刻の點なきに非ず、女皇嘗て云へり、汝何ものなれば、敢て邦内の王侯貴族に敎ゆるをなすや。答へて曰く、邦内に生れし一臣民と、善い哉答、臣民語るべき眞理を有さば、臣民の立脚地は彼に缺けざるべし。

吾人はノックスの寛恕ならざるを咎む。何人も極を盡して寛なるべし。然れども種々の辯論を外にして、究竟寛恕とは果して何ぞや。寛恕は不緊要のものを恕し、又不緊要の何たるを辯ずべき也。寛恕は高尙なるべく、適宜なるべく、而して已に忍ぶ能はずんば憤怒に正しかるべし。然れども要するに吾人の玆に在るは悉く寛恕の爲めに非ず。吾人又玆に抵抗、制伏、勝利の爲めにあり、虛

ノックスの性格學勵

妄、盜竊、不正の事吾人を襲はゞ、之を恕せず、之に語て曰はん、汝僞なり、汝恕す可らずと。吾人こゝに在るは良法を以て虛僞を根絶せんが爲めなり。余は其方法如何に重を置かず、大に留意するは事の實行如何にあり。此意を以てせばノックスは實に頗る寛恕ならず。

自國に眞理を敎へたる故を以て、佛國の船奴と竄せられたる人は、素より常に嬉々たるを得ず。余はノックスを溫和の質を有せりと曰はず、余又彼が所謂短氣なるものを有せしを知らず。唯彼は斷じて不良の質を有せず。懇切正直の情此多くに堪へ痛く勞し、絶えず鬪ひし人に存せり。女皇を詰るを能くし、驕傲紛擾の貴族中に重をなし、（他事は舍きて貴族驕傲なると甚し）邦內の一臣民と生れて、亂國中に主權を有し、死に至るまで之を保ちて失はず、——此事既に其單に苛酷賤陋の徒に非ずして、中心剛健聰明の人物たるを證するに足る。人或は彼を責むるに殿宇破壞等の事を以てし、之を目するに煽動暴起を好む首領を以てす、善く之を察すれば殿宇等に關して此事全く表裏す。ノックスは石屋の



其餘の性行

倒壞を要せず、人生中より惡疾昏暝の逐攘を要せり。騷擾は彼が欲する所に非ず、其迫られてこゝに及べるは一生中の悲劇的面目なり。此の如き人は生れながら混亂の敵にして混亂中に身を置くを憎む、然れども是れ何かあらむ。平滑の虛僞は秩序にあらずして混亂の全局なり、秩序は眞理なり、物皆其基に立つ、秩序と虛僞とは兩立すること能はず。

又吾人が豫想せざるところ、此ノックス滑稽の氣あり、自餘の性格と合して余頗る之を愛す。彼善く可笑的のものを見る。其著史粗豪眞實なると共に、又此分子を以て活氣を沿ふること奇なりと曰ふべし。二人の僧徒グラスコー敎會に入らんとし。先を爭ふて走り、格鬪して互に法衣を攫み、遂に棒の如く其笏を振ふこと、是彼が奇觀とするところ也。嘲弄輕侮譏刺彼に多しと雖も、獨り是のみに非ず、嬉々溫柔の笑、其眞摯の顏面に上る、是呵々たる大笑に非ず、多くは眼中の笑と云ふべきもの也、彼は正直友愛の人、等く尊卑に篤く、等しく同情を有す。彼また其エヂンバラ舊宅にブルドーの烟管を有して、親愛の徒

と共に談笑す。ノックスを以て憂鬱、煩悶、叫喚、執迷の人となさば大に錯らむ。全く然らず、彼最も堅牢の人にして、實務に當り、忍耐周到にして好望を抱き、敏慧にして善く觀察し、靜に識別す。今日吾人が蘇人に與ふる性格彼多く之を有す、嘲笑的沈默あり、慧眼あり、而して自ら知るに優りて健全の心あり、又身の大事ならずんば之に關して緘口するの能あり、曰く此事何かあらむと、然れども大事に關して語るや、其調實に全世界を傾聽せしむべし。其長く默々たるに對して特に著しきを覺ふ。

此蘇國預言者は我に取りて決して惡むべき人に非ず。彼生存の苦戰を經たり、法王と戰ひ、公侯と爭ひ、失敗爭鬪全生悉く艱に、或は船奴となり、或は流徒となる。允に苦戰なりき、然れども遂に勝てり、其最期に當り、已に語る能はざるとき、衆問ふて曰く君希望を有するや。ノックス手を擧て天を指し、指して而して死せり。彼に榮あれ、彼の事業今に到て死せず、其外形は衆人の如く亡びんも、其精神は決して死せじ。





其事業の外形に關して猶一言せん。ノックスの罪尤も恕す可らざるは、其僧侶を擧て帝王に加へんと欲せしと是なり。言を代ふれば彼は蘇國の政治を神政たらしめんと力めたり。是實に其罪の全局なり。緊要の罪なり、之に對して何の宥恕あるを得んや、自ら意識せしと否らざるとを問はず、彼實に神政を欲せしこと少も疑ふ可らず。帝王、宰相、公私の萬人、外交を事とするもの、或は他を勤むるもの、皆基督の福音を奉ずべく、而して是を其法律なり至高の法律なりと知るべしと、彼が欲せし所此の如し。一たび此事現化せられ、「爾の王國を來らしめよ」の願また空言ならざるを見んと、彼が望みしところ此の如し。彼は貧賤庸劣の貴族、教會の産を奪ふを見て、痛く悲み論じて曰く、是現世の産に非ずして靈界の財なり、宜く之を教育、學校、禮拜等眞の教會用に供すべしと、而して攝政マルレイ肩を聳かして答へて曰く、是敬信の妄想のみと。ノックスが眞理正義の計畫は是なり、彼力めて之を現化せんとす、吾人若し此眞理の計畫狹隘に過ぎて眞ならずと思はゞ、ノックス之を現化せざりしを喜ぶべし、之

を勉むること二百年猶現化せずして「敬信の妄想」たるを喜ぶべし。然れども如何して彼是が現化を勉めしを難ぜんや、神政は洵に力めて欲すべきもの也、百千の預言者、熱誠の僧侶、此の目的の爲めに世にあり。ヒルデブランドは神政を欲せり、クロムエルは之を欲して之が爲めに戰へり、而して、マホメットは之を得たり。或は僧と云ひ、或は預言者と云ひ、一切何等の名稱に論なく、是實に熱誠の人皆悉く欲するところ、又欲せざる可らざる所にあらずや。上帝の法律、正義、眞理、人間中の主宰たらんこと、是人生の極致也。(ノックスの時善く之を呼んで啓示の神意と云へり、終始皆斯く曰ふべし)革命者たらんものは漸次之に近かんとを勉むべし。余が前に曰へる如く、眞の改革家は其性質上皆僧侶にして、神政の爲めに勉むるものなり。

幾何か此の如き理想は實際に致さるべき、其實際に致されざるとき吾人の不滿は何處に始まるべき、是一疑問なり。余は思ふ極を盡して之を致せと曰て可なりと。是若し人間の眞信仰ならば萬人其致されざるを見て多少不滿を鳴すを要す。



肩を聳かして「敬信の妄想」といへる彼のマルレーの輩に至りては決して世に缺くるとなからむ。余は寧ろ夫の力を盡して之を來さんとし地球を天の王國たらしめんが爲め勞苦、誘潤、抗逆の間に命を消耗する偉僧を讃せん。嗚呼地球何の世にか能く神聖に過くるを爲さんや。

文豪は新時代のものなり

珍奇の現象

# 第五講

## 文豪、ジョンソン、バルンス、ルーソー、

神人、預言者、詩人及僧侶は舊時の英物にして、其現はるゝや遙遠の時代に於てし、其中全く泯滅して再び此世に現ずる能はざるものあり。今日余が說かんとする文豪は全く新時代の產にして、文書若くは印刷と稱する速書の奇術存するの間、將來重要の英物として續かんを望むべし。種々の點に關して彼は最奇の現象なりとす。

余は曰ふ、彼は新なりと、その續きて今日に到ること未だ百年を超えず。偉靈の形夫の特異の生を爲し、刷書を以て心中天來の妙想を述べ、世人が爲めに好んで與ふところにより、力めて其處を得、其生を支へんとするもの、一百年以前は全く是あらざりき。賣買の事物は多かりき、市場にありて自ら其交易をな



史人の待遇如何を見て時世の如何を知るべし

すもの多かりき、然れども偉靈の妙智は當時に到るまで此の如く露出の狀をなして賣買せられしとなかりき。板權を有し、「板損」を有し、汚服を穿ち、陋室に住み、而して死後其墓より、生前己に食を給せる——若しくは給せざる、——歷世國民の全體を司どるもの（これ彼が爲すところ）寧ろ奇異の觀に非ずや。他英物の形未だ是よりも豫想し難きものあらず。

痛しい哉、英雄古來自ら曲げて奇形を取らざるべからず、世人常によく之を處する方法を知らず、英雄は世上に頗る奇異の面目を呈するなり。人蒙昧の崇敬を致して、オーヂンの如き賢者を神となし、神となして之を拜したる、若くはマホメットの如き賢者を神託の人となし、一千二百年間敬んで其法律に服從したる、吾人は之を以て怪なりとす、然れども賢ヂョンソン、ルーソー、バルンスの如きを目して無用の贅物とし、只消閑の具として世に存するものとし、小錢微讃を投じて、彼をして僅かに之に因て生かしむること、——思ふに是（上に暗示せし如く）他日更に一層奇怪の觀と目せられん。物質上の事を決するは常に精神

文學者の天職

上の事なるを以て、今此文豪を目して近代最要の人物と爲すべし。彼殆んど萬事の精神なり、全天下は彼が敎ゆる所を爲す、世人之に處する道は一代時勢の至重なる面目なり。善く彼の生を見ば之を生じたる奇異なる世紀の狀を探ると頗る深きを得む、吾人も此世紀に住して働く。

文人の醇なるものあり、不醇なるものあり、萬般の事皆此の如し。英雄は純人の謂なりとせば余は曰はんとす、文豪は常に光榮にして常に至高なる務を吾人の爲めに果すと、世は嘗て其最高なるを知れり。彼特種の方法を以て其天來の妙想を述べ、人間の能くする所を極む。余は天來と云ふ、蓋し吾が獨創と呼び、至誠と呼び、天才と呼び、又之に加ふるに正名なき英質偉性は、皆是謂也。眞なるもの、聖なるもの、永劫なるものは、常に無常なるもの、微細なるものゝ下に存して衆に見えず、此事物の內界に住むものは即英雄なり、彼の本性こゝにあり、或は言に據り、或は行に據り、自己を宣ぶると共に普く之の聖なるものを宣ぶ。先に曰へる如く、彼の生は常住なる造化心の一片なり、萬人の性悉く



文學者の本領（ヒテノの說）

然り——然れども衆の弱きものは實蹟を知らず、又常に之に忠ならず、少數の强なるものは强なり、儁偉なり、永劫なり、實蹟之に隱るゝなければなり。文人は他の英雄と等しく其分に應じてこのことを宣明せんがためにあり。往昔之を爲すものを稱して預言者と云ひ、僧侶と云ひ、神と云ひたると其實同一職なり、或は言により、或は行によりて之を爲さんがため一切の英雄此の世に下る。

獨逸哲學者フィヒテ、今を去ること殊んど四十年前、エルランゲンに彰大著明の講義を爲し、題して「文人の本質」と云ふ。フィヒテは超絕哲學派中の著しきものなり、彼は此學理に從ひ、首に宣して曰ふ、吾が見るところ、用ゐるところ、地上の萬物特に吾人人間は、恰も被服の如く、又意識に現ずる假相の如し、底に其神髓として所謂「宇宙の聖人」あり、是一切外觀の奥底に存する實物なり。衆人は世上に此聖意を認むる能はず、只世の外觀と事蹟と假相との間に住みて下に神聖なるものあるを夢思せず。然れども文人は特に此聖意を辨じて他人に之を現はさんがために此土に下る、此物各新時代に當り、新言辭に因て現

眞文學者
僞文學者

はれん、文人の存するは之を爲さんが爲なりと。是フィヒテの言句にして吾は之と爭ふを要せず。我が今他辭を用ひて微かに現はさんと力むる所フィヒテは稱して上の如く曰ふ、今實に是に正當の名なし、これ言以て現はすべからざる神意なり、惶懼と驚異と雄麗とに滿ちて各人各事の原質中に存するものなり、萬人萬物を造れる上帝の現存なり。マホメット之を其辭に說き、オーヂンまた其辭に說く、是百千の哲人各其辭を以て說くべきもの也。

故にフィヒテは文人を呼んで神聖物を啓示する預言者若しくは（其所好の句を用て）僧となす、文人は常住の僧侶なり、曰く、神萬人の生命中にあり、而して世上所見一切の外觀、たゞ其根底に存せる宇宙聖意の被服の如しと、其百代萬世人に敎ゆる所此の如し。世人の認知如何に論なく、眞の文人中には聖なるもの、あり。彼は世の光なり、世の僧侶なり、彼時劫の荒漠を旅行するに當りて世を導くと夫の聖火柱の如し。フィヒテ嚴に眞文人即吾が所謂文豪と僞文人とを區別す。全く此聖意中に住まざるもの、或は一部已に之に住むも仰ぎ勉めて全に



ゲーテ

住まんとせざるものは、他の好所如何に論なく、盛觀慶福如何に論なく、斷じて文人に非ず。フィヒテ曰く是粗匠者なりと、或は散文的領城に屬せば彼泥工たるべし、フィヒテ又時として彼を贅物とよぶ、要するに此に對する頗る酷にして其世に立て幸慶を享くるを欲せざるなり。是フィヒテが文人說なり、只や〻形を異にして其言ふところは全く我と同じ。

是に於てか、余は最近百年間文人中の最大較著なるものをフィヒテの同國人ゲーテなりとす。所謂宇宙聖意內の生、また內部神秘の幻影、彼に賦與せられしこと洵に奇にして、而して其著作中より天地再び靈妙に上帝の經營となり、殿堂となりて現じ來る。然かも彼はマホメットの如き激烈不純の炎光に照らずして、天上祥和の光明に照る、是實に庸劣極陋の時代に於ける預言にして、當時大事中の最大なるもの、又尤も靜平なるものなり。我文豪の標本は之をゲーテに採るべし、而して其偉蹟を論ずるは余に取て頗る快なるべし、余はゲーテを眞英雄となせばなり。彼は言行英偉にして、言行に現はれざるところ更に英偉

はれん、文人の存するは之を爲さんが爲なりと。是フィヒテの言句にして吾は之と爭ふを要せず。我が今他辭を用ひて微かに現はさんと力むる所フィヒテは稱して上の如く曰ふ、今實に是に正當の名なし、これ言以て現はすべからざる神意なり、惶懼と驚異と雄麗とに滿ちて各人各事の原質中に存するものなり、萬人萬物を造れる上帝の現存なり。マホメットの之を其辭に說き、オーヂンまた其辭に說く、是百千の哲人各其辭を以て說くべきもの也。

故にフィヒテは文人を呼んで神聖物を啓示する預言者若しくは（其所好の句を用て）僧となす、文人は常住の僧侶なり、曰く神萬人の生命中にあり、而して世上所見一切の外觀、たゞ其根底に存せる宇宙聖意の被服の如しと、其百代萬世人に敎ゆる所此の如し。世人の認知如何に論なく、眞の文人中には聖なるもの、あり。彼は世の光なり、世の僧侶なり、彼時劫の荒漠を旅行するに當りて世を導くと夫の聖火柱の如し。フィヒテ嚴に眞文人即吾が所謂文豪と僞文人とを區別す。全く此聖意中に住まざるもの、或は一部己に之に住むも仰ぎ勉めて全に





住まんとせざるものは、他の好所如何に論なく、盛觀慶福如何に論なく、斷じて文人に非ず。フィヒテ曰く是粗匠者なりと、或は散文的領城に屬せば彼泥工たるべし、フィヒテ又時として彼を贅物とよぶ、要するに此に對する頗る酷にして其世に立て幸慶を享くるを欲せざるなり。是フィヒテが文人說なり、只や、形を異にして其言ふところは全く我と同じ。

是に於てか、余は最近百年間文人中の最大較著なるものをフィヒテの同國人ゲーテなりとす。所謂宇宙聖意內の生、また內部神秘の幻影、彼に賦與せられしこと洵に奇にして、而して其著作中より天地再び靈妙に上帝の經營となり、殿堂となりて現じ來る。然かも彼はマホメットの如き激烈不純の炎光に照らずして、天上祥和の光明に照る、是實に庸劣極陋の時代に於ける預言にして、當時大事中の最大なるもの、又尤も靜平なるものなり。我文豪の標本は之をゲーテに採るべし、而して其偉蹟を論ずるは余に取て頗る快なるべし、余はゲーテを眞英雄となせばなり。彼は言行英偉にして、言行に現はれざるところ更に英偉

ゲーテ、ルソー、バルンス、ルーソー、

也、眞にこれ一大觀なり、儁邁偉大の古人、近代高等の教育修養を受けたる文人と現じて、其言ふところ宛然古代の英雄に似たり。過去二百五十年間他此の如き偉觀なし、他に能く之の偉觀を呈するものなし。

然れども如何せん、今日ゲーテに關する世上一般の智識は、今彼を說かんとする計畫をして殆んど有害無益たらしめんとす。余之を說くも諸君の多くは茫然としてゲーテを解する能はざるべく、得るところは獨り假僞の觀念ならむ。故にゲーテは他日に讓らざるべからず。デ■ンソン、バルンス、ルーソーの三大人物、時代之より早くして其境遇遙に之に劣るもの、優りて玆に吾人に適せん、三人共に十八世紀に屬し、其境遇ゲーテが獨乙に於けるよりも、遙に今日吾人の猶英國に於けるに類す。悲哉三人ゲーテの如く勝たず、只勇を奮て戰に斃れたり。彼等は光明を齎らしゝ者にあらず、之を求めしもの也。彼等は困阨の境遇に立ち、障碍恰も山の如きに抗して遂に自ら暢達する能はざりき、遂に彼の聖意を啓示する能はざりき。我今諸君に示すところ寧ろ三文豪の墳墓なり、塚



文人の境遇、社會の混亂、

瑩累々として靈界の三大巨人其中に臥す、頗る傷心のこと、然かも英偉にして趣味甚だ滿てり請ふ少しく之を說かん。

今日吾人が所謂社會の紛亂に關して訴ふるもの屢是あり、曰く社會上整齊の力何ぞ効をなすの拙なる、曰く盛大の諸力にして混乱紛擾の狀をなすもの何ぞ多きと。是眞に正當の怨言なり、吾人よく之を知る。然れども書籍と著書とを顧みれば、恰も自餘一切の紛亂の全局を見ん、是恰も心臟の如し、天下の紛擾之より出て、天下の紛擾之に歸る。著者の天下に爲すところ、天下の著者に施すところを考ふるに、是當時世上の尤も奇々怪々なるものと曰ふべし。若し之れが說明を試みなば夫の混沌の海を測ること鉛錘よりも遙に深かるべし、然れども我題目の爲めに只一瞥見を以て足れりとせざるべからず。かの三文豪の生涯中最惡の要素は其事業位置此の如き混沌たりしにあり。通路を走るは難きに非ず、然れども嶮塞を貫きて路を造るは大難なり之に斃るゝもの果して幾何ぞや。

文人敬會に代る○文人の孤立

我が敬虔の祖先演說の必要を感じて敎會を起し、之に財を給し、之に典則を附せり、文明の邦土到るところに講壇あり、複雜の儀式之に副ひ、勸奬の法之に加はり、人をして此上に立ちて同胞に說くに便ならしむ。我が祖先以爲ひらく此事極めて要あり、是なくして一善事のあるなしと、是允に正當敬虔の美事なり。然れども今文書の術、印刷の術開けて、此事全く面目を一變せり。書を著はすものは獨り某日某地に說くにあらずして、萬世萬邦に說くに非らずや。他人の行爲如何を顧みず、渠正く之を爲さんこと、其視るところを正實に述べんこと、素より緊要なり、然らずんば悉く他を謬らん。而して今や彼之を爲すこと如何、之を爲して良否如何、天下何人も之を慮るの勞を採らず、甚しきに至ては彼果して之を爲すや否やを考ふるなきなり。書賈其著書より利を得んとせば、著者或は幸にして是が用を爲さん、之を外にして彼一の用をなすことなし。彼何處より來り、何處に行く、何の道に因てこゝに到れる、何の法に因て其進路を奬勵する、是何人も問はざるところ。著者の世界に於けは偶然のみ。嚮導



書籍の奇怪なること

書籍の勢力

錯誘の孰を問はず、世上の靈光たるを失はざるも、彼空く茲に漂浪すること恰も古のイシュメイル人に似たり。

文書の術は人間工夫の最も驚愕に堪へざるもの也。オーヂンの「ルーチス」は英雄事業の初式なりき、書籍文辭は新式の「ルーチス」にして又神怪なるものなり。過去全體の精神は書中にあり、過去の形體全く飛散して恰も夢の如しと雖も、其音聲止りて書中に聽くべし。艦隊、軍旅、港灣、兵庫、整齊高層の大都、是貴く且大なり、然れとも遂に何物となるか。アガメンノン、ペリクルスの徒全希臘と共に皆沈零して形を止めず、獨り斷片破碎の默禰たるのみ、殘るは希臘の書籍なり。哲人の眼中茲に希臘猶眞に生けり、再び生に回すを得べし。何等の「ルーチス」も其怪異未だ書籍に優らず、人間の行爲、思考、事業、生存、皆悉く書中に存して、恰も魔術を以て貯ふる如し。是人間の至寶なり。

古「ルーチス」を喩へて奇蹟を行ふといへり、書籍は猶之を爲すにあらずや。書籍は人を勸誘す。田里の癡女が弄する至賤極卑の小說、猶其家事婚嫁の實際を

大學の起原

整齊するの助なくんばあらず。曰く某女斯く思ひ、某子斯く爲せりと、癡たる人生說夫の少婦の頭腦に印して一日遂に實際に現ぜん。思へ神仙詩家が荒唐を極むる想像中、何等の「ルーチス」か果して某書の實際世上に於ける如き奇術を爲せしや。「セントポール會堂」を築けるは何ぞや、事の內心を觀ば是ヘブルウの聖經に非ずや。而して其一部は四千年前シナイの荒漠にメヂア人を育てし一浮浪モーゼスの言也。是事の最奇なるもの、然かも最眞なるものなり。文書の術ありて人界中奇蹟の眞代始まる、(印刷術は其自然の系裔にして比較上素より重大なるものに非ず) 書籍ありてより、遙遠なるもの、過去なるもの、時間方處中に現在と密接し、繼續して、一切の時代方處、今日と此處とに關し、一切の人事、敎授、敎說、政治等人界重要の事業、皆一大變遷を受けたり。敎授の例を以て之を說かん。大學校は近世の彰明貴重なる制度也。而して書籍の存在に因て根底より大變革を來せり。大學の起りし當時書籍を得ること極めて難く、一卷を得んとせば一領地を以て之に替えざるべからざりき。狀態此の



今日の風大學は書籍の集合なり

如きが故に人其知識を他に通ぜんとせば、面のあたり學徒を集むるの要ありき。アベラードが知れる所を知らんとせば、行きてアベラードに聽かざる可らず。故を以て行きてアベラードに聽き其形而上神學を學びし者三萬人に及べり。而して今他の敎師其說を述べんとする者に一大便利あり、即篤學者數千人已に集りて彼に在り、是敎師に取りて最善の地なり、第三の敎師あれば此處益可なり。斯くして敎師の增加と共に其便益多し。爰に於て帝王たるもの此新現象に注視し、數種の學派を一校に結合し、是に建築と特權と奬勵とを與へて大學即萬學の敎校と爲せり。パリ大學の要質此に在り。之を模範として後來百千の大學陸續起り來れること今に六百年、思ふに大學の起源此の如し。

然るに書籍を得るの便(たゞ此一簡易の事狀)ありて此事全く面目を改めしと瞭かなり。印刷術一度發明せられて一切の大學を變形し、若くは之を廢止せり。敎師今其知るところを語らんとせば、特に我周圍に人を集むるを要せず、之を印刷して書となせば、遠隔の學徒小錢を出して之を其爐邊に致し、之を學ぶこ

と遙に正確なるを得べし。素より演說に今尙特種の効あり、書を著はすもの猶時としては言に述ぶるの法を用ふ、本會の如き即是なり。人其舌を有せる間、演說と文章及印刷と、各自其領域を異にす。各事に關して然り、就中大學に於ける亦此の如し。然れども二者の限界未だ指摘せられず、確定せられず、況んや其實行をや。大學にして全く夫の新なる大事實即印刷書籍の現存を容れ、而して巴里大學が十三世紀に於ける如く十九世紀に關して明亮の地歩を占むるもの未だ嘗て起らざるなり。能く之を考ふれば大學即最高學校の吾人に施すところは、たゞ初歩の學校が始めしところ、即只讀方を敎ゆるに過ぎず。吾人は種々の國語と科學に關して讀むことを學ぶ、吾人は一切書籍の「アルファベット」と文字とを學ぶ、然れども吾人が行きて知識を(理論上の知識すら)得るは實に書籍にあり、究竟博士等が力を盡して吾人に施すところ如何に論なく、要は吾人の讀むところ如何にあり。今日の眞大學は書籍の集合也。

然れども敎會に關しては、余が上に暗示せる如く、書籍の輸入に因て其說敎其





運動等全く一變せり。敎會は僧侶預言者等善訓を以て人心を導かんとするもの の公共聯合なり。文書なかりし時、寧ろ簡易の文書法即印刷なかりし時、音聲の說敎は之を遂ぐる唯一自然の法なりき。然れども書籍ありて今果して如何、眞書を著はして英國を勸誘する者、彼豈に實に英國の長老にあらずや、大長老にあらずや、敎長に非ずや。余は屢々之を言ふ、新聞、雜誌、詩歌、書籍の記者は皆近代有効實際の敎會なりと。獨り說敎のみならず、禮拜も亦印刷の方法を假るにあらずや、天賦の才を有するもの、好調の言辭に因て高尙の思想を述べ、以て他人の心中に好調を起すもの、若し能く之を解せば是實に禮拜の性を帶ぶるにあらずや。此紛擾の時世に當り、是より他の禮拜法を有せざるもの萬邦至るところに多し。何の法によるを問はず、吾人が從來知れるに優りて善く百合花の美を告ぐるもの、彼豈に之を以て美全體の本源より流溢すとなすに非ずや、造物者が手書の覩るべきものとなすに非ずや。彼聖歌の一章を吾人が爲めに謠へり、吾人をして共に謠はしめたり、事眞に此の如し。況んや同胞の高尙

なる行爲、感情、勇敢、堅忍、――之を歌ひ之を語りて、吾人が心に之を移し來れるものをや。渠實に我心を動かせること、恰も聖壇の活火を以てせるが如し。思ふに之に優れる正當の禮拜なるものなし。

文學は萬有の天啓なり、公開秘密の現示なり。凡庸俗界中聖物の存する

純眞の文學は萬有の天啓なり、公開秘密の現示なり。凡庸俗界中聖物の存するを不斷啓示するものといふフィヒテの言頗る正し。聖物常に茲にありて、種々の言辭に現れ來て明快の度互に異なり、天賦の歌人天賦の說者、自ら意識するも否らざるも皆之を行ふ。バイロンの執拗偏僻なるも、其暗澹慘烈の痛憤猶此分子を含む、佛蘭西懷疑家の陳腐なる嘲笑、――虛僞を嘲笑して眞々敬拜するものすら猶然り。況んやセークスピア、ゲーテの天體諧調ミルトンの會堂音樂をや。バルンスの醇深謙下恰も告天子の音に類する者亦た價あり、是告天子隴畝の間より上り、高く碧空に入りて純眞の歌を謠ふなり。蓋し眞歌は禮拜の性あり、經營事業の眞なるもの皆然るが如し、而て歌は後者の記錄に外ならず、其適當好調の表象に外ならず。「教會禮拜式」及「勸世文」の斷片妙に凡眼に隱れ



書籍は亦議院なり政黨なり

て吾人が漫然文學と呼べる印刷文辭の泡沫海に泛ぶを見るべし。書籍は又我が教會なり。

更に政治に關して之を見ん。古の議院碩老會は大なりき。國家の大事茲に議せられ、茲に決せられき。今は議院の名尙存すと雖も議院的討論は遙に抱括を大にして各時各所に行はるるにあらずや。バルク嘗て曰へり、議院に三級あり、然れども遙かに之より重大なるもの、第四級、夫の傍聽筆記席にありと。是修辭上の譬喩に非らず、又奇警の談謔に非ず、如字的事實にして今日尤も重要なるものなり。文學は又我が議院なり。必然文書より起り來る印刷は民政に等し、一たび文書を發明すれば民政遂に避くべからず。文書あれば印刷あり、日々臨時の印刷あり、今吾人の見るが如し。全國民に語るもの一の權力となり、議院の一派となり、法律の編成、公司の各事に關して離るべからざる重量を有するに至る。其位階、歲入。服裝の如何は問ふところに非ず、要は他をして聞かしむべき舌を有するにあり、要たゞ此一事のみ。國民を治るは國民の舌を有する

もの也、民政は實に玆にあり。更に之に加へて權力の存するあれば漸次に組織を生ずるを思へ、此物束縛、隱微、障碍の下にありて私かに經營し、自由無碍にして萬人の見るところとなるに至るまで決して止まず。實力上の民政は逼りて觸覺上の民政たらんとす。

人間地上に爲す所、造る所の中、重要、神異、有效、遙に他に拔んずるものは所謂書籍也、吾人は到る處此の結論に迫らるるにあらずや。夫の組紙の微片、內に墨汁を有するもの、毎日新聞よりヘブルウ聖經に至るまで、其爲さゞりし所何かある、其爲さゞる所何かある。蓋し事の外觀如何を論ぜず、(粗紙の微片と我は云ふ) 書籍を產出するは人間知能の最高なる運營にあらずや。是人間の思想なり、眞個神異の德なり、人之に因て萬事を行ふ也。人の爲すところ、起すところ、悉く思想の服裝なり。此ロンドン府、——人家、宮殿、會堂、蒸氣機關、廣大無邊の貿易混雜を有するもの——是思想にあらずして何ぞや、千萬の思想合して一と爲りしに非ずして何ぞや、是廣大無邊なる思想の靈、瓦石、





烟塵、宮殿、議院、傭車、カザリン埠頭等に體現せるなり。人もし瓦の製造を思ふとなくんば其一片も生ずべからず。我が所謂墨汁を磨する紙片、是人間思想の最純なる體現なり、最も有爲にして最も高貴なること豈怪むに足らんや。近代社會に於ける文人至上の要あること、又印刷術歩を進めて講壇、議院、碩老會に代れること、久く世に認めらる。而して近時に至りては一種の感情上の勝利と驚嘆とを以て認識さるゝに及べり。我思ふに感情上のもの漸次變じて實際上となるべし。文人の效化此の如く盛に、一代また一代、一日また一日、此の如き事業を遂ぐとせば、吾人は斷じて曰ふべし、文人は夫のイシュメイル人が世に認識せらずして散漫瓢蓬の途を踏むが如くなるべからずと。實力ありて他に知られざるものは、一旦其外包桎梏を脫して觸目有聲の力を現じ來らむ。人他人の服裝を穿ち、他人の俸祿を取るも何の益かあらむ、是不正なり、是不法なり。然れども之を正うせんと、何等將來の永遠事業ぞ。我が所謂「文學社會の制度」前途尙遠く、無窮の困難之に粘附せり。近代社會中何の處置か尤も

錢財の法助は無用なり

文人に可なるや、文人の位置あり、社會の位置あり、二者の實蹟上に礎すること尤も精にして、其勸奬と整理とに至便なる制度は何ぞや。之を問ふものあらば余は謹みて謝して曰はん、我が能ふところにあらずと。是一人の能ふところに非ず、衆人相繼ぎ熱中して之に盡さば、漸く其解釋の近似なるものを得ん。最善の制度如何は何人も語る能はず。然れども最惡の如何を問ふものあらば我答へて曰はん、吾人が今有するところ、混沌其判官たるところ是最惡也と。最善のもの、或は善なるもの前途尚遠し。

一言止む能はざるものあり。王家若くは議院の給財は決して大事に非ると是也。文人に俸祿恩給等金錢上の奬勵を與ふるは事に效あらず。要するに人は錢財の萬能力たるを聽くに倦む。我は寧ろ曰はんとす、眞人の貧は決して禍に非ず、己の眞否如何を證せん爲め文人須く貧なるべしと。古基督教會中善人の一團食を乞ふもの即「メンヂカント、オーダー」の制ありき。是基督教主義の尤も自然且つ必要なる發達にして、其基礎は貧困、憂愁、抗拒、大難等、俗界の困阨と屈



文人と貧窶

辱とにあり。是等の苦を知らず、是に因りて其教ふべき無價の教訓を學ばざるものは、修業の好機會を失へりと曰ふべし。赤脚、襤褸、麁繩を纏て食を乞ひ、世人の輕侮を被るは佳事に非ず、又何人も見て以て榮となす所にあらず、然れども高尚の人之を爲して此事遂に某人の榮とするところとなる。

乞食は今日吾人の途に非ず、然れども之を外にして誰か一ヂョンソンの貧彼が爲め可ならずと云ふ。外形上の益、各種の好果、其求むべき目的に非るを知るは究竟彼の要するところ也。誇傲、浮華及各種の私欲、他人と等しく其胸中にあり、此物首として心裏より驅除せられざるべからず。——何等の痛苦あるも、無用の贅物として扯裂捐棄せられざるべからず。バイロン生れて富貴なりしも、貧平民のバルンスよりも成すところ少なりき。誰か夫の前途文學社會最善の制度中、貧窶尚重要の一元素ならざるを知らんや。文人自ら靈界の英雄を以て任ずるもの、其時尚今日の如く、心之を欲するに非ずして猶一種の寺僧となり、此醜怪なる貧窶に繫がるれば如何——斯くして文人遂に貧の何たるを知り、之を

文人を知ること如何

利して己の用となすを學ばん。財のなすところ多しと雖も悉く萬事をなすべけんや。吾人は是れが領域を知りて茲に之を限り、外に闖出せんとせば奮ひて蹴却せざる可らず。

且夫の錢財の奬勵、之を施すの好期、之を與ふるの人、皆定るも之を享くべきバルンスの輩如何して其認識を得んか。彼れ糺問を經て己を證せざる可からず。文人の生といへる混沌の塊、是亦一種の糺問なり社會の下層より社會の上層と報酬とに向て力爭常に續くべしと曰ふ觀念の中に明白の眞理あり。剛健の人某地位に立つべきもの他の位置に生まる。此の如き莫大紛糾普遍の力爭、所謂社會の進歩を組成す。而して又斯く組成せざるべからず。文人此の如し、百千他種の人亦此の如し。然らば此力爭を制するの道如何、全局の問題實に茲にあり。盲目なる機會の意に任して之を放置し、爲めに混亂の諸分子互に相消却して、千中の一其所に達し、其九百九十九途に亡び、高大のヂョンソンをして或は空く陋巷に老しめ、或は印刷工ケープの拘束を受けしめ、バルンスをして衡量官と



文界束制度早晩來らん

文人待遇如何は社會に大影響あり

なりて焦心に死せしめ、ルーソーをして狂憤に陷り怪說を唱へて佛蘭士大革命を燃さしむ、是我が前に述べし如く最惡の制たること明か也。最善の制は嗚呼吾人を去ること遠し。

然れども其來らんと疑を容れず、數世紀の胸奥に潛みて徐々吾人に向ひ來ること、是預言して誤るなき也。人事物の要を認めば、直に之を整へ、之を易うし之を奬進せしむるに着手す、而して之を成して若干の度に進むに非ずんば止まず。吾は曰ふ僧侶、貴族、治者等の諸階級中最緊要なるは著述者なり、此事一瞥以て悟るべく、以て幾多の系說を引くべし。バルンスの救助を求めらるゝに當り、ピット氏答へて曰く、文學自ら慮らん。サウゼー答へて曰く、然り文學自ら慮らん、而して君之を顧みずんば文學亦君を慮らんと。

文人一身上の結果は大事に非ず、夫の文人唯個體にして社會全體の玄微僅少なる一分子のみ、彼輩從來の如く、力め爭ふて或は生きん、或は倒れん。然れども社會其光明を高處に掛けて之を嚮導と爲すや、或は從來の如く之を足下に蹂

支那學業の制度

躙し、之を荒漠に撒布するや(炎焔なきに非ず)是社會の一大問題なり。光明は現世界唯一の要品也、智慧を社會の頂上に置かば天下鬪ひ勝ちて最善の天下を爲さん。吾は亂雜なる文界の紛擾を目して、自餘一切の紛擾の中心、即其原たり産たるものとす、是に對する良制度は新活動の特徴たるべく、又一切萬事の良制度たらむ。已に歐洲の某國中、(佛蘭士、普魯士の如き)文界制度の起端を窺ふべし、是此の如き事物の漸次可能たるを徵する也。吾は其可能なるを信ず、其可能ならざる可らざるを信ず。

余が支那人に關して聞くところ尤も珍異なるものあり、事未だ十分明瞭ならずと雖も其茫寞の狀に於てすら無限の好奇心を激せしむ、即支那人其文人を以て知事たらしめんとする是也。其方法如何、成効の度如何は容易に斷言すべからず。凡て此の如きものは思ふに皆失敗甚しかるべし、然れども微細の成功尙尊し、之を企つると已に尊し。支那全土中到るところ、少壯の人材を求むるに多少活潑の運動あるもの、如し。學校萬人の爲めに設けられ、修學の法頗る愚な



るも猶一種の修學たるを失はず。少年下級の學校にありて能を隱はせば高等なる學校に揚げられ、斯くして漸次益其能を顯はすべし。官吏若くは初級の治者は此中より選拔せらる。かくて是輩を試みて治に堪ゆる如何を檢す。而して最善の希望實に玆にあり、彼輩已に知能を現はしたればなり。請ふ試みに之を檢せん、彼輩未だ治を爲さず、未だ政を行はず、恐く或は能はざらむ。然れども其一種の知能を有するや疑なし。而して知能なくんば何人も治を行ふと能はず。吾人稍もすれば知能を器具に譬ふ、是過てり、知能は手肢なり、普く器を握るものなり、請ふ試みに之を檢せん、萬人中彼尤も試驗の價ありと。天下の政府、憲法、革命、會社制度機關中未だ此の如く吾人の好奇心を喜ばしむるものあらず。有知の人上位に立つこと、是一切憲法、革命の目的(彼もし目的ありとせば)なり、蓋し有知の人は常に我が唱へ且信ずる如く、また高尙の人物なり、眞正仁勇の人物なり。彼を以て治者とせば萬事則成らん、誤て彼を失はゞ、憲法の多きと粟粒の如く、議院各村里に存するとも終に一事の成るものなけむ。

十八世紀文人の禍難○懷疑時代

是等の事外觀允に奇にして通常吾人が勘考する所の如くならず。然れども吾人今奇異の時代にあり、是等の事之を熟考し、之を實際に施すの要あり。而して今や諸方に呼號の聲あり、曰く慣例の時代は已に終る、事物從來存せしこと以て其存在を持續するの理由となすに足らずと。從來の事物は衰微となり、無能となり、歐洲の各社會中人間の大衆は已に從來の事物に據りて生存する能はず、數百萬の人其力を極盡して自個の糧を得る能はず、而して人口の三が一毎年卅六週間粗品の馬鈴薯に乏しき時は從來の事物斷じて自己を變ずる備を爲さざるべからず。——文人制度論茲に終る。

痛しい哉、夫の禍難激しく我が文豪に迫りしもの是文人制度の缺乏に非ざりき。是より遙に深うして文人と一般の人生とに於ける數多の禍難の源泉たるもの也。我が文豪街路なく、儔侶なく、無機の混沌を經過し、其生命其知能を茲に横へて一街路を穿つを助けぬ、——若其知能麻痺顚倒せざりせば彼己の不運を恕して以て英雄の常運となせしならむ。彼等の至慘の禍殃は時世の心靈的痲痺



十八世紀の思想

にあり、之に依て其爲すところ如何に論なく、其生亦半は麻痺せり。十八世紀は懷疑の時代なり。而して全「パンドーラの禍匣」此一小語中にあり。懷疑は獨り知的疑惑の謂のみならず、又道德上疑惑、即一切不信、不誠、心靈的痲痺の謂也、思ふに開闢以來英偉の生難きと未だ此世紀の如く甚だしきものあらず、是信仰の時代に非ず。英偉の可能なることを恰も人心中より特に斥けられし如く、英偉全く去りて、凡庸、式文、細瑣之に代れり。「神異の時代」嘗てありき。思ふに或はあらざりき、然れとも今は斷じて無し。是老耄の世なり、驚異、偉大、神聖今こゝに住むと能はず、一言評し去れば無神の世界なり。

當時思想の法何すれぞ卑俗矮少なる、獨り基督敎のセークスピア、ミルトンに比して然るのみならず、古昔異敎の詩人に比し、一切の信人に比して尙且つ然り。活樹「イグドラデル」枝葉の廣さ全世界を蓋ひ、颯然として佳調預言の震搖をなすもの、死して世界機械の鏘音に化せり。「樹」と「機械」と、——請ふ此二物を比せ。我は斷じて曰ふ世界は器械に非ずと、我は曰ふ其運營は輪翼の「動

機」自利、阻遏、權衡、に因らず、內に紡績器の響及び議院の多數とは遙に異なるものあり。要するに斷じて是器械に非ずと。上帝の世界に關し、往古北歐の異敎徒は、此賤陋なる器械懷疑者に優りて眞正なる思想を有せり、往古北歐の異敎徒は誠實の人なり。然れども此等賤陋の懷疑者は誠實なく、眞理なく、半眞理及傳說を稱して眞理といへり。彼等思ひらく眞理は外見の美なり、投票の數に因て之を計るべしと。彼等は誠實の可能を忘れ、又誠實の何たるを忘れたり。數多外見の美なるもの其德の毀傷せらるゝを憤り、眞に驚きて問ふて曰く我誠ならざるやと。心靈痲痺は是世紀の特質にして殘るは獨り器械的の生のみ。通常の人幸にして其世紀より下りて前時代に屬するに非んば信人たるを能はず、英雄たる能はずして知らず知らず此有害なる感化の下に葬られたり。至剛の人は無弱の力爭を以て始めて半ば働くを得、悲慘蠱惑の道に靈界死中の生を送りて半英雄となることを得べかりき。

此一切の主要の徵候とし、原由として、吾人は懷疑の名を命ず。是に關して曰







ふべきもの極めて多し。十八世紀に對する所感を述べんとせば、一講說の一部分ならずして數多の講說を要せん。所謂懷疑、及之に類するもの、實に生命の仇敵なり、至慘の疾病なり、人生始まりしより以來一切の敎訓、講論悉く之に向ふを以て信仰不信仰の戰鬪遂に止む可らず。又之を論ずるは馭擊の途に出るに非ず。吾人は當時の懷疑を以て舊信仰の衰頽となし、後來優秀なる新信仰の準備とす、是物遂に避くべからず。吾人は之を以て人を咎めず、却て其非運を吊せんとす。舊形の破壞は常住なる材料の破壞に非ず、懷疑は悲むべく、憎むべしと雖も是れ事の終局にあらずして起端なるを知るべし。

前日偶然ベンザムが人間論及び人生論を說ける時之を呼びてマホメットの說よりも賤しと爲せり、一度之を口に發して余は今是余が熟考の說なるを曰はずんばあらず。然れども是れゼレミイ、ベンザムなる人、或は之を敬信するものを咎むに非ざるなり。余はベンザム及其信條を以て猶比較的に賞美すべしと爲す、是天下從來の傾向を一決したる也。人危機に會せんか、死を得るに非ずんば則

快癒を得む。我はこの鄙俗なる功利説を目して新信仰の近接となす。是僞説を公白せるなり、人自ら語て曰く此世は死せる鐵器械なり、引力と私欲と是が主宰たり、請ふ其輪翼を阻遏し、平均し、整理して、爲し得るところ如何を見んと。ベンザム主義は決然其所信に頼りて一種の勇あり、之を英氣と呼ぶも可なり、但失明の英氣也。十八世記の人生を一貫して躊躇因循の狀にありし者、遂に茲に終り茲に定る。思ふに神を拒む者、神を口舌に信ずるもの、勇且つ直ならば皆ベンザム徒たらざるを得ず。ベンザム主義は失明の勇なり。不幸盲目のサムソンがヴィリスチン人の磨臼に於けるが如く、人間種屬煩悶して、磨舍の楹桂を抱き、顚覆を招き、遂にまた救濟を招く。我ベンザムを罵りしものならんや。

然れども無生の器械を外にして、宇宙間他に一物を觀ざる者は尤も痛むべく眞理の秘訣を失へるものなり、我敢て之を曰ひ、萬人の悟りて之を心に銘ぜんを望む。神聖なるもの吾人が宇宙の概念より脱却せんと、是人間誤謬中の至慘なる





もの也、(我は異教を貶して誤謬と云はず)此物眞ならず、其中心僞なり。此の如く考ふる人は天下の萬事を誤想せん、此原罪は自餘一切の決論を壞らむ、吾人は之を呼んで迷妄の極となす、妖術尚之に優る。妖術は少くも活魔を拜せるに、之は無生の鋼鐵を拜す。神を拜せず、魔を拜せず、高尚、神聖靈妙の物之に因て悉く人生より脱却し、到る處獨り枯骨を殘すのみ、精神逃れて只器械の累塊を留むるのみ人如何ぞ偉業をなすを得んや。「動機論」は人に教へて曰ふ、人生は其實、樂を愛し、苦を恐るゝに外ならず、名利等一切の慾は人生最後の大事なりと。一言に盡せば是無神論にして遂に恐るべく己を罰す。かくて人間の精神は麻痺し、神聖なる宇宙は只動機、阻遏、權衡に因て、動ける非生の蒸汽機關となる、恰もファラリス自製の銅牛の如し、ファラリス自ら腹中に死せざる可らず。

余は信仰を稱して人心の壯業と曰ふ。信仰を得るは一切の大事と等しく神秘玄妙の事なり。吾人皆天與の心あり、是抗議反論の爲めに非ず、物を洞察して

懷疑は復道德的なり○十八世紀の偽文時代

是が明快の信仰と了知とを得て進みて爲すあらんが爲めなり。誠に疑惑そのものは罪にあらず、吾人は素より狂奔して首先に見るところを取り、直に之を信ずるを爲さず。一切の討究疑惑所謂スケプシスなるもの、有理の人心に存ず。これ信知せんとする所に處する人心の動作にして樹木の根より出づる如く信仰は皆是より起る。然れども平生の事物に當て人猶其殘を默守すべく、其やゝ拒否或は確定となるに至るまで、之を喋々すべからずとせば、全く言說以外の最高事業に對しては如何ぞや。人其疑を喋々し、討論論理を以て、知能の勝利となし、眞爲となす、豈知らんや討論々理は思想を告げ、信不信を告ぐる所以の道に過ぎざるを。嗚呼是れ樹木を顚覆し、綠枝果葉に代へて盤根の天に向ふを示すが如し、生長なし只死あるのみ、禍あるのみ。

蓋し懷疑は獨り知的にあらず、又道德的なること前に述べしが如し、是靈魂の慢性病なり。人の生けるは事を信ずるに因り、事を討論辯難するに因らず。人其取て信ずるところ、只之を懷ろにし一種の覺官を以て消化するところに止まら



ば痛むべき哉。是人間墮落の極なり。斯く墮落する時世を至賤、至痛、至慘の時世と曰ふ。天下の心麻痺して病めり、其肢體如何ぞ健なるを得ん。世事の各部に當り、純眞の働作止めて狡僞のもの始まり、俸給收められて事業爲るなく、英雄去りて奸佞來る。羅馬の天下は懷疑、虛觀、衰頽の時代なりき、爾來孰れの世紀が誇大奸佞の徒に滿てると此十八世紀の如きや。彼等は道德仁惠に關して浮華誇大に言を吐き、賤陋虛妄の徒は一團をなして、カグリヲストロ是が先鋒たり。當時欺妄を事とせざるものなし、人之を以て眞理の要素となすに至れり。チャタム繃帶を纏ひて議院に來る、曰く激痛ありて展顚煩悶を極めたりと、かくて彼はワルポールの言の如く病者を眞似ねしを忘れ討論沸騰の際、腕を繃帶より脫して揚々之を揮ふ。チャタム己に半英雄半僞人なる奇性の生を送る、蓋し世己に癡者に滿ちて而して人は世の推擧を得ざる可らざれば也。此形勢に當り、如何して世務を果さん。誤謬は失敗を含み、失敗は悲哀と禍害とを含む。而して此誤謬世事一切の領域に漸々集まると果して如何、吾人は之を

懐疑時代漸次に去らんとす

算するを要せず。

思ふに之を呼びて懐疑世界となさば、是天下疾病の神髄を穿つ也。是れ不信の世界なり、無神無道の世界なり。社會疫病の全群、佛蘭士革命、及劈狀黨の如き皆是より生じて、而して其存立の要亦こゝに歸す。是斷じて一變せざるべからず。然らずんば一物も改善すべからず、世界に對する我が惟一の希望あり、世界の禍害を覩て我に不拔の慰籍あり、即是物一變すること是也。處々に知る人あり、曰く世界は眞理にして虛飾虛僞にあらず、人は活物なり、死せるに非らず、麻痺せるにあらず、世界亦活物なり、神聖の氣を含みて壯麗儼然猶開闢の日に於けるが如しと、之を知ると猶古の如き也。一人一たび之を知れば萬人悉く之を知るに至らん。何人と雖も之を知らんとして其眼鏡を脫せば、明に彼に存するを見ん。此の如き人に對しては不信の時代已に其不祥の結果を率ゐ去て今速に消滅せんとす。此等喧擾にして外觀壯大なる僞物、背に全天下の歎呼を負ふも、彼悠然之を離れて曰ふべし、汝眞ならず、生存せず、似て非なるのみ、



世を離れて獨立せよ

汝須く退くべしと。然り空漠の虛文、鄙野のペンザム主義、凡庸無神の假僞は、明かに且速かに傾覆の途にあり。類似のもの時に起るも、不信の十八世紀は例外なり。我は預言す、世又た一たび誠實とならむ、信仰の世とならむ、中に衆多の英雄を有して英雄の世とならむ。是に於て始めて優勝の世たるを得べし、是時來るまでは決して之を能すべからず。

更に之を考ふるに世の優勝何かあらむ。人々世を說くと多きに過ぐ。世自ら其道を行きて治亂興廢を來すに任ぜよ。吾人各自ら送るべき一生を有するに非ずや、ただ是一生、二大刧間瞬時の生、一たび去らば盡未來再び現ずる期なし。人たるもの當に愚ならず、僞ならず、賢となり、實となりて生くべきにあらずや。世救はるゝも我救はるなけむ、世失はるゝも我滅ぼさるなけむ。人須く已を顧みるべし、所謂「內に留まる義務」の中功德の大なるものあり。而して更に眞を云へば余は未だ此事を外にして世の救はるゝあるを聽かず。夫の「救世病」已に其空漠の矯飾と共に、又十八世紀の一片也。吾人願はくは之に隨ふと過遠

ヂョンソン等の境遇

なるなからむ。救世は我信じて之を上帝に托して、面して少しく自己の救を顧みんとす、是優りて吾人に適せん。要するに世の爲めまた自己の爲め、吾人は懐疑、假僞、器械的無神説其毒霧と共に退去の狀にあり、已に殆んど退去し了れるを喜ばん。

ヂョンソン時代の文人は此の如き形勢の下に生けり。是正に人生中一も眞理の存せざる時なり。舊眞理は斃れて殆んど啞に、新眞理は潜みて未だ語らず。人此世にあるは眞也、實也、而して永久此の如く續かん、此事夫の冥々の際未だ曙光を放たざりき。佛國革命の類も猶未だ存ぜざりき、冥府の陰火に包まるとは雖も、佛國革命は亦一の眞理なり。ルーテルの途は一定の目標ありき、ヂョンソンの途は、已に信ずべからず解すべらざる俗説に圍まる、其相去ること幾何ぞや。マホメットが攻撃の空文は油蠟を塗れる木片にして進路の外に之を燒却するを得べかりき、憐むべし、ヂョンソンの空文は之を燒くこと遙に難し。事業は困難の謂也、痛苦の謂也、强者は常に力を極めてこれに當らむ。然れども夫



三人皆眞理に據る

の文豪は勝を制するに至難の境遇に立てり。障碍、亂雜、書賈オスボールン、四「ペンス」半の日給——獨り之に止まらず、自個靈魂の光また彼より去れり。地上に一の道標なし、而かも天上嚮導の星無きに比して是何かあらむ。夫の三人中一も勝を制せし者なき、豈怪むに足らむや。彼其戰に忠なりしこと已に至上の功なり。吾人は今哀痛の同情を懷きて、前言の如く勝てる三雄の活物ならず、斃れし三雄の墳墓を觀んとす。彼また吾人の爲めに道を開きて之に斃れたり。其巨人の亂戰中に抛ぜる山嶽あり、力盡き命絶して三人今此山下に埋まる。」或は偶然に或は特に、吾已に此文界の三雄を説けり、想ふに諸子の多くは之を知らむ、再び之を書し、之を述ぶるの要なし。唯三雄はこゝに奇異なる時代の奇異なる預言者として吾人に關係す、彼等は眞に預言者なればなり。是の點より觀ずれば三人並に當時の狀態、吾人を沈思に導くと十分なるべし。多少の度を異にするも余は三人を皆眞人と呼ぶ、其多くは自ら意識するなくして、力めて眞ならんとし、力めて常住眞理の上に立たんとしたりき。此事優に彼等を賤陋

狡猾なる同時の儕輩と別つべく、而して當時の預言者として多少眞理の說者と稱せらるゝに足らしむ。造化是に高尙の命を加へて爾かあらしむ。彼等は性質上虛僞の上に生くる能はず、雲霧泡沫之より退く、其立つところ常に堅固の地上にあり、こゝに立つを得ずんば彼等休息するを得ず、整齊の動作をなすを得ず。矯飾の時世にありて彼等多少亦造化の兒なり、亦獨創の人也。

ヂョンソン――我は彼を目して生れながら英國偉人中の隨一なるものとなせり。剛健高尙の人、中に死に到るまで發揮されずして殘るもの甚だ多し。その境遇和好なりせば、詩人、僧侶、帝王、何の成るべからざるあらむ。要するに人は其「境遇」其「時世」等を恨むべからず、是允に益なし、時世惡からば彼茲にあるは之を善くせんが爲めなり。ヂョンソンの少時は貧窮孤立無望にして極めて慘悽なりき。外面の境遇至便なりとするもヂョンソンの性は苦痛の外なるを得ざりしが如し。彼が世を益せし所或は更に多きを得べし、或は少きを得べし、然れども其努力世に反抗するもの、斷して易々たるを得ず。造化彼を高尙ならし



しめ、而して是が報として之に求めて「慘痛の境遇に住め」と曰ふ。思ふに悲慘と高尙とは親和して互に離るべからざりしなり。ヂョンソン不斷の鬱憂病、肢體幷に心靈の苦痛を帶びて其道を行かざるを得ず。彼は燃ゆるネッサスの短衣を着る一ヘルキュールスの如く短衣彼に不治の禍害を注ぐ、而してネッサスの短衣剝ぐ可らず、其生來の皮膚なればなり。ヂョンソン此の如くして生きざるを得ず。試に想へ彼は癖症不治の諸病あり、偉大熱冲の心あり、また曰ふべからざる思想の混沌あり、而して、蹌踉慘憺恰も是世の人ならざる如し、彼其觸接するところの靈知を貪り、他に優るものなくんば語學文法の類をも辭せず。全英國中最大の靈にして、世の之に給する所は一日四「ペンス」半のみ、然れども猶巨大不屈の魂也、眞人の魂也。人々善く夫のオックスホルドに於ける靴の談を記せむ――粗野、羸瘦、皺を帶べる大學の給費生、破履を穿ちて冬天に徐步す、慈善家あり、私かに一足の新履を其戸に置く、而して羸瘦の給費生取て之を矇眼に眺め、何の思ありてか忽ち之を窓外に放擲せりといふ。濕脚可な

り。泥、霜、飢餓、亦可なり、然れども乞丐斷して不可なり、吾人決して乞丐を學ぶ能はざる也。頑梗粗豪の自助こゝにあり。其境遇は汚穢、粗野、慘悽、虧缺に滿つ、然れども勇剛高尚の德又共に在り。此履を投ぜるとヂョンソン一生の標本なり、あゝ彼原元の人、古物に非ず、借るものに非らず、乞ふものに非ざる也。要するに吾人をして必ず自個の基礎に立たしめよ。我は我得る所の靴を用ゐん、泥霜上にあるも可、然れども玆にありて直なるべし、造化吾人に與ふる實物上に立つべし、假物の上、若くは造化他に與ふるものゝ上に立つ可らず。

ヂョンソンの敬信溫順

○而して此粗暴傲岸の性と自助とに關せず、溫好友愛にして眞の在上者に忠順なると、誰かヂョンソンに優らむ。偉人は常に在上者を敬して之に忠順なり、只小人は然らず。前日吾曰へり誠者は性從順なり、英雄世界に於てのみ英物に從順ありと。ヂョンソン是が無上の好例なり。獨創の神髓は其新たるに非らず、ヂョンソン全く古を信じ、古說の信ずべく又己に適せるを見て、儼然正當に之



式文の說

に據れり。之に關して彼頗る究むるに足る。ヂョンソンは遠く空言虛文の人に異なり、眞理の人なり、實事の人なり。彼古式に據れり、而して是事彼に幸なり。然れども其據るところの式文中尤も純正の物質なかるべからず。夫の誇學、傳說を以て縫合せる空漠の「紙時代」に當り、宇宙の大事實、驚異、明晰、靈怪、言以て稱すべからざるもの爛々として彼を照せしこと極めて奇なりと云ふべし。彼如何して式文と實とを調和せる、此の如き形勢に當り、彼如何して善く之に處せる、是允に注視の價あり。肅敬と憐憫と畏懼とを以て之を見るべし。ヲルテイアの時代に當りてヂョンソン猶禮拜を致せる「セント、クレメント、デーンス」の寺院——吾謹て之を敬す。

ヂョンソン預言者たりしは、其誠實の德に因り、當時流行の矯飾を免れずと雖も、多少萬有の衷心より語りし德に因る。言辭は皆「矯飾」(人工)に非ずや、矯飾なるもの必ずしも虛ならず、——否、萬有の眞產物自ら作形せんと止む可らず。人工的の物其初めは皆眞なりと曰ふべし。余が式文と呼ぶもの、其原は惡なら

ず、必ず善なり、式文は方法なり、慣例なり、人存ずる處式文必ず存ず。式文の成るや道路の如し、人々、歸向せる聖物に趨く公道の如し、請ふ之を思へ、一人事に熟して之を爲す所以の道を發見す、或は至上者に靈魂の崇敬を捧ぐるの道ならん、或は單に其同胞請安の辭に過ぎざるもあらむ、是を爲すや發見者の要あり、自他の心に住て、發せんとして發せざる思想、彼之を述べたり。彼の所爲斯の如し、これ趨歩なり、道路の起端なり、而して今や第二の人自ら前者の歩に從ふ、是最易の法なればなり、然り前者の歩に隨ふ。然れども其要あるときは改良と變易とを以てす、要するに行く者多に從ひ道路漸次に大に、遂に天下の大道となりて、人或は歩み或は馬車を驅るに至る。其前途に當り、都市社廟の實物尚存せば此公道正に踏む可き也。一旦都市亡べば我之を捐てん。天下の制度、慣習、規律此の如くして起り、此の如くして亡ぶ。式文皆實に物充てるに始まる、人之を呼びて既存物の形體、皮膚及肢足を爲すと云ふべし。前述の如く、禮拜者の心に對して此物未だ疑似となり、空虛とならずんば、偶



アヨンソンの誠德誠實

像未だ偶像的ならず。吾人式文に反して曰ふところ多しと雖も、何人も亦眞式文の深旨を知らざるとなからむを望む。是れ吾人在世の必須缺く可らざるや器財なり。」

又小デヨンソンが其誠實に誇るや否やを見よ。彼は自ら特に誠なるを覺えず、何等特殊の者たるを覺えず。艱苦辛勞の人(或は其自ら云ふ如く「學者」)餓えず盜まずして正當の職を求めんと力む。高尚の無意識彼に在り。彼は「其印璽に眞理と刻」せず、然れども眞理に據り、眞理を語り、眞理を奉ず。事常に此の如し。宜く之を熟思すべし。造化人に命じて大事をなさしめんとせば首として之を造化の大法に通ぜしむ、是ありて彼不誠實なるを得ず。其壯大、豁達、多感の心は造化を一の實蹟と見る、傳說は皆傳說なり、玄妙偉大なる人生神秘は彼が承認如何を問はず、甚しきは彼之を忘れ之を拒むも、常に目前に現はれて恐るべく驚くべく此にあり、又彼にあり。彼は誠實の基を有す、然かも其認められざるは、人之を問はざればなり、寧ろ問ふを能くせざればなり、ミラボー、マ

ジョンソンの教說

ホメット、クロムウェル、ナポレオン等、余が聞ける一切の偉人は其要質として必ず之を有す。無數の庸人は到るところ其庸說を囂々たらしむ、彼之を論理に因り、諳誦に因り、他手を歷て學べり。眞人は玆に採るところなし、彼は眞理を有せざる可らず、自ら感じて眞理とならすところを有せざるべからず、然らずんば彼如何して立たん。其全心常に彼に曰ふ此を棄てゝ他に立つところなしと。彼は天命に應じて眞ならざるを得ざる也。此世に關して、ヂョンソンが思想の法、我と均しからざると猶マホメットの如し、然れども我は二者の中誠衷の素要を認め、而して喜んで二者と共に無用に歸せざるを見る。二者共に粃糠に非ず、播かば生育せんもの其中に存す。

ヂョンソンは當時の豫言者なりき、彼れ民に福音を說きしこと預言者の皆然るが如し。其至上の福音、吾人は之を一種道德上の細心となすべし。曰く爲すべきこと多く、知るべきと少なき世にあり、汝の爲す所如何と見よと。是允に敎示の價あり、「爲すべきと多く知るべきと少き世」也、無間無底なる疑惑の深淵



其文章○其字書

に陷る勿れ、慘悽なる不信仰の絕淵に陷る勿れ、然かすれば汝不幸なり、狂なり、無力なり、如何して事を爲すを得んと、ヂョンソン此の如き福音を說く。而して理論並に實際上之に對するに他の大なる福音を以てす、曰く心中の矯飾を去れと。矯飾を用ゐる勿れ、霜天泥路の中に立て、然れども己の破靴を以てせよ、マホメットの曰ふ如く「此事優りて汝に可ならむ」。余は此二者の結合を大なる福音と呼ぶ、思ふに當時中の最大なるものなり。

一たび流行名聲ありしヂョンソンの文、今は青年社會の捐つるところとなれり。是怪むに足らず、ヂョンソンの說は速に陳腐となるなり。然れども其思想の法、生存の法は決して陳腐たらざらんを望むべし。吾はヂョンソンの書中、偉大なる知能心意の明跡を見る、阻遏顚倒甚しきも猶愛すべし。其言は誠實なり、其言中必ず實あり。奇怪なる硬固の文體（當時彼れが得べき最善のもの）整々堂々として徐步するもの今は已に陳腐たり、時としては內意に應ぜざる誇大浮華の言あり、是皆恕すべし、誇大なるも然らざるも其言中常に物あれば也。世上

ボスエルの英雄崇拜

の華麗の文體、華麗の書――中に一物なきもの、之を書するは天下の罪人なり。此の如き物は避けざるべからず。ヂョンソン其の字書の外一物を殘さずとするも、人其内に偉能と純人とを見るべし。其定義の明快、其一般の堅牢、正直、達觀及有效の方法を見なば、是が百千字書中の最良なるを知らん、内に建築的高大なるものあり、堅牢方正なる巨館の如く、完美整齊にして彼に立つ、眞の工匠之れを作れるを見るべし。

講說の太急に關せず、豎子ボスエルの爲めに一言せざる可らず。人皆以爲く彼浮華變蹇の賤物なりと、而して此事多くの意義に於て然り。然れども彼がヂョンソンを敬せしことは常に記すべし。浮華愚昧なる蘇國の地頭、(當時の尤も浮華なる者)肅然として夫の急性偉大なる敎師に其陋室に近く、是哲人に對する純正の崇敬なり、是當時何人も慮るなき英雄崇拜なり。見るべし英雄常に存す、而して其禮拜亦常に存す。吾人は又夫の機警なる佛人の言、何人も其僮僕に對して英雄ならずと曰ふを拒まんとす。或は此事然りとせば其過は僮僕にありて



ヂョンソンの說

英雄にあらず、彼其心僮僕たること是なり。彼が英雄に期する所、帝王の戲場的粧服をなし、後に長裾を曳き、前に皷樂を奏して整齊步を進むるにあり。故に寧ろ云ふべし、何人も其僮僕に對して大公侯たらずと。ルイ十四世より其王服を剝げ、頭に妄想を滿たせる兩脚蘿蔔の外、他何をか殘さむ、何等の僮僕も之を賞贊すべからず。僮僕は英雄を見るも之を知らず、吁英雄を知るは一種の英雄を要す。而して天下虧缺の一は多く此類の虧缺なり。

要するにボスエルの嘆賞其當を得たり、彼全英國中他に此の如く低頭すべき者を得ずと曰ふべし、而して夫の沈欝偉大のヂョンソン、彼よく其困難亂雜の生を送りて剛正者に耻ぢずと曰ふべし。彼れ病軀羸眼にして貧窮、塵埃、冥暗の間に處し、夫の著述業の混沌及び夫の宗敎、政治及人生の理論上實際上懷疑の混沌を役して勇者の如し。永劫界全く嚮導の星なきに非ず、勇者皆之を要する如く、彼猶嚮導の星を有し、之を凝視して人世濁浪の旋渦中、何等の爲めにも其途を替えず、死と飢餓とを荷へる虛僞の靈に決して其旗を下ぐるとなし。勇

ルーソー○剛強の人

ルーソー亦誠なり

なる哉老リミユール、眞にローマ人の終なるもの也。

ルーソーと其偉業とに關して余は多くを云ふ能はず。彼は余が所謂强者に非ず。病的にして激し易く、痙攣性の人、畢竟强に非ずして激烈たるなり。彼尤も尊むべき沈默の能を有せず、是佛人の特長に非ず、寧ろ當時何等の人の特長に非ず。惱む者は先づ自己の烟を消すべき也、之を變して火となすに至らずんば烟を擧ぐるの用なし、而して烟皆化して火と爲るを得る也、譬喩の意に於けるも亦此の如し。ルーソーは眞英雄第一の性格深沈宏量を有せず。激烈と嚴酷とを强と呼ぶは大謬也。癲癇の病潮を起すものは其起す時六人合して制する能はざるも强者にあらず。重きを負ひ躓かずして歩むもの之を强者となす。吾人は常に、特に今日啾々の世に當りて自ら玆に顧みるを要す。語るべく動くべき時來るまで默居する能はざるは正人に非る也。

余はルーソーの顏善く其性を顯はすと思ふ。顏中强けれども狹き激情あり、額骨出で、眼深く窪み、中に擾亂の相ありて鋭視烱然たり。彼は辛苦の相あり、



其缺點

而かも賤き辛苦の相あり、而して辛苦と爭ふ相あり、平凡微賤の相總に激情に補はる。是所謂狂熱者の面なり、慘悽狹陋の英雄なる哉。吾人こゝに彼を名ざす所以は其缺失多きに關せず、彼英雄第一の資格あれば也、即中心より熱誠なればなり。彼熱誠なり、當時佛の哲學者中他に一人の然る者なし。其熱誠自餘の鋭敏なる寧ろ薄弱なる性に對して多きに過ぎ、終に彼を奇異なる撞突殆んど錯亂に陷らしむ。ルーソー遂に一種の狂病に罹れり、其理想鬼の如く之に憑き、之を逐迫して絶崖に陷らしむ。

ルーソーの短所並に禍難は吾人が只「主我」の一語を以て名ざすところ、是實に何種を問はず、百千短所禍難の本源なり、總合なり。彼全く自ら欲望を制する能はず、衆種の飢餓尙其動機たるを免れず。吾其極めて浮華にして人の賞贊を貪ぼりしを恐る。人よくゼンリか彼を試みしを記せむ。彼女劇場にヂャンヂャックを伴ふ、ルーソー約すらく固く微服せん、「斷じて見らるゝを欲せず」と。然れども慕偶々引かる、觀客ヂャンヂャックを認めしも著く之に注意せず。ル

ルーソー憤懣甚だし、終夜沸然として只怨言を吐くのみ。彼の憤は其見られしに因らず、見られしとき歡呼されざりしに因る、多辯なる伯爵夫人之を確知せり。彼は性全く毒せられ、孤疑、孤立、憤懣より他なきに至れり。彼何人とも共に住む能はず。地方の一名家數々彼を訪ひ、常に相對して崇敬愛憐を述ぶるもの、一日ヂャンヂャックが懊惱として解す可らざる狀にあるを見る。ヂャン、ヂャック眼を怒らして曰く、足下、余は子が來れる所以を知る。即我貧狀如何を見、夫の釜中に烹るところ僅少如何を見んが爲めなり。肉半「ポント」、胡羅蔔一、及三個の葱是のみ。子若し欲せば行て之を天下に告げよと。此種の人は遠く去れり、笑談の爲め、劇場的興味の爲め、天下このヂャンヂャックが顚倒煩悶より得るところの奇話多し。痛哉是ルーソーに取りて談笑若くは劇場的にあらず、命將に絕えんとする「劍客」の煩悶なり。場中の觀客樂んで之を見る、然れども劍客至痛に惱みて將に死せんとす。

或は諸母に哀訴し、或は「社會契約」を書き、或は自然を讃し、甚きは自然の壁





風を讃して、ルーソー亦實に實蹟に觸れ、實蹟に苛ちて、其能ふ如く時代の能ふ如く。預言者の職を行へり。夫の毀傷、頽墮、狂妄の裏、微たるルーソーの胸奥に當りて奇異に一片天火の閃光あり。萎靡冷嘲の哲學、懷疑戲弄の群中より、不滅の感情知識復之に臨めり。曰く人生眞なり、懷疑にあらず、理論にあらず、戲弄にあらずして、實蹟なり、儼乎たる實蹟なりと。造化彼に之が啓示を爲し命じて之を述べしむ、而して彼之を述ぶるを得たり、朦朧にして明快ならずとするも彼其極を盡せるなり。過失あり、顚倒あり、亂雜あり辛酸あり、甚きは夫の絹紐の偷掠あり、然れども善く之を解せば、菲弱使命に應ずるに堪へず、行途未だ求むる能はずして、病眼眩し、步逶迤するに外ならず。人奇異の途に導かるゝあり、之を怨し、之に望み、其爲さんとするところを試みしむる可なり、人、生あれば、又望あり。

ルーソーの文才は今猶其國人の間に好評嘖々たり、然れども余之に關して多くを謂はず。彼の書は其人物と等く我が所謂不健なるものなり、善書といふ可ら

ルーソーは世と親和するを得ず

ず。ルーソーに物慾あり、其天賦の知能と合して華麗妖艶の狀を呈すと雖も、純眞の詩的に非ず、白日の光に非ず、劇場的にして脂粉の粧飾なり。ルーソー以來此事佛人中に往々見るべし、或は寧ろ普通といふべし。スタイル夫人稍之を有す、サンピーア亦然り、而して下て今日の激烈なる「失望文學」に至るまで到るところに多し。この脂粉は眞色に非ず。セークスピアの如き、ゲーテの如き、或は下りて尙スコットの如きを見よ、一たび之を見なば眞と外眞との差を知り、長く二者を判別するを得む。

吾人ヂョンソンに於ては、亂雜不利の境遇にありて預言者の世に處すところの如何を觀たり。今ルーソーに見るところは、此亂雜にありて、好處に伴へる禍害の量如何にあり。ルーソーの事は歷史上最も豐沃の觀なり、或はバリの陋室に逐はれ、暗澹として思想と窮乏とを侶とし、或は四方に竄せられ、憔悴僻屈心遂に狂して、天下及天下の法我と與ならざるを感ぜり。若し能ふべくんば、此の如き人、世と抗敵せざるを可とす、彼以て陋室に閉すべし。以て狂者として



バルンス

笑ふべし、以て檻裏の猛獸の如く餓死せしむべし、然れども其天下を炎々せしむるを妨ぐべからず。佛國革命は使徒をルーソーに得たり、文明世界の禍害、野蠻の文明に優ること、此等に關せる半狂の思想佛國全般の發狂に貢資せり。人よく問はん、天下此の如き人を處する如何、天下の治者之を如何せば可ならむと。天下の治者之に處するの法如何、之を曰ふこと難し、之を處する法不幸にして、明瞭に過ぐ、其多くを斬首する即是なり。ルーソーを說くこと已に足る。

萎微不信陳腐なる十八世紀に當り、一英雄ロバート、バルンスの形を取りて、矯飾賤陋なる事物間に崛起せしは奇異の現象と曰ふべし。これ岩石荒沙の間に小泉の溢るゝが如く卑俗の遊戲室裏、天上の光麗俄に輝くが如し。民之を處する如何を知らず、之れを目して一片幻室の烟火となす、惜い哉、彼之に反し死力を盡して抗爭せるも自ら爾か認めらるゝを致せり。同胞より不當の待遇を受けじこと此の如きは他にあるべからず、慘悽の活劇、復一たび此世に演ぜら

バルンス生れて農夫たり

バルンス一家の惨狀

る。

バルンス生涯の悲慘は諸君のよく知るところ也。人運の乖戻をなすもの材と位との應ぜざるに因るとせば、バルンスの運よりも乖戻なるものなし。十八世紀の陳腐なる活劇者、爲すところ多くは滑稽戲に過ぎず、此間に復た一たび巨大獨創の人、永劫の深淵に達して人界に雄を稱するあり、而して彼エールシァイアの貧舍に生る。全英土中最大の靈魂蘇國貧農の形をなして來れり。

父は貧にして勞働の人、數事を試みて一も成すところなく終始困厄に陷る。地主（蘇人之を factor と曰ふ）書を與へて脅迫して、彼を泣かしむ、是バルンス自白の言也。父は勇にしてよく勉めよく忍び、母亦一の女丈夫たり、而してバルンスは其數兒の一なり。地廣きも身を掩ふところ無し、書「全家を泣かしむ」と、狀想ふに堪たり。余は常其父を勇なりと云ふ、無言の英雄、無言の詩人、彼なくんば其子決して有言のものたるを得ざらむ。バルンスが小學の敎師後日ロンドンに來りて、上流社會の何たるを知れり、然れども猶自ら曰ふ、



バルンスが境遇の不利○其本質

夫の農夫の蹌邊に於けるが如き愉快の談話未だ嘗て他にあらずと。而して彼が微たる故山の七「エークル」爲めに爲すところなく、粘土產地の一小土、其藉りて生を營まんとせしもの、皆爲すところなく死に至るまで苦鬪す。然れども彼れ賢正不屈善く之を支へ、默爾として日々其辛酸を呑下し、知られざる勇者の如く戰へり、何人も其高風を新紙に載せず、何人も爲めに選擧投票をなさず、然れども不利ならざりき、一物も失はれざりき。ロバートかれにあり、其生むところなり、而して後世の之と等しきもの亦其生むところなり。

バルンスが境遇の不利到らざるところなし、貧にして敎育なく、手肢の勞を自らし、偶々書するときは其國中の一小部に知られし鄙言を以てす。彼もし其の作を英國一般の國語を以て書かば、我が最大文人の隨一、或はかく爲るべき者と認められしこと疑なし。其言辭の厚皮を貫き、衆を誘ふて內に入らしめしは非常の物玆に存するを徵すべし。彼今若干の承認を得てサクソン世界の各所に漸次擴まらんとす。サクソン語の行はるゝ處、人々自ら究めて、十八世紀中彰明

較者なるサクソン人の隨一はエールシァイアの農夫、ロバート、バルンスたりしを解せんとす。然りサクソン型の一片こゝにありき。彼は大地の奥底に根せるハルツ岩の如し、内に甘味の清泉あり。感情才能の狂熱靜に此に眠り、内に天上の佳調を畜ふ、高尚粗豪の醇なり、卑近粗野正直なり、單純剛勁なり、而して情熱電光の如く、慈甘露に似たり、彼は往古北歐の農民の神トールの如し。

バルンスの弟ギルバルト聰慧重厚の人なり、彼が余に告ぐる言に因ればロバート少時家の窮困に關せず、常に尤も快辯にして談笑諧謔、情あり、知あり、後來弟彼を見し時よりも、茲に衣を脱して濕地に泥炭を穿ちしとき、遙に愉々たりしといふ。余能く之を信ず、此快活の基（ミラボー老侯の所謂「快活」の基）は光明歡喜の要素にして、自餘の幽深熱誠の性と相並て其性情中尤も愛すべき者なり。希望の巨資彼にあり、悲慘の史あるも悲歎の人にあらず、勇を奮つて悲を掃ひ、揚々として勝を制する、恰も獅子の鬣より露を拂ふが如し、槍刀を





揮ふを笑へる駿馬の如し。然れどもバルンスの有せる如き希望愉樂是正に溫和寛厚の情より來るにあらずや、是各人に取て一切の端なり。

我バルンスを稱して、該世紀英人中最傑出の天才なりといはゞ人或は怪まん、然れども余は信ずこれを云ふも小虞なき日將に來らんとすと。以上の如き障碍に際して彼の書せる所は彼の心の一小部分に過ぎず。博士ステワルト說くこと甚だ正し、曰はく彼の詩は何等特殊の材能に非ず、生れながら剛强獨創の心自ら現はれて之を致すのみと、一切の眞詩人皆此の如し。バルンスが談話に現はれし材能は聽者が常に讃稱して措かざる所、萬種の材能、嫻雅の禮辭、激辯の高熱、嘻々たる談笑、娓々たる溫情、簡潔の語勢、明快の視力、皆彼にあり。機警なる貴婦人彼を賛して人をして覺えず踴躍せしむとなす、是妙なり、然れども更に妙なるはロックハルト氏が記せしところ、吾之を引用せしこと一回に止まらず、曰く旅亭の僕婢皆其の臥床を出で群り來て此人の談話を聞けりと。あゝ僕婢、一彼輩亦人なり、而して茲に亦一個の人ありし也。其談話に關して余が聞く所多

し、然れども昨年彼と親交なりし某紳士より聞きしところ最佳なり、曰く其言中常に内に某物ありと。此老人我に曰ふバルンスは寧ろ語ること少かりき、當時恰も在上者の列にあるが如く寧ろ默座し、而して一旦口を開けば鑿々として事理を辨ぜりと。何人も言はんとするものは此の如くなるべき也。然れども其一般の心力、其剛健の德、卒直機警勇毅なるを見ば何處に天賦之に優るものを求むべけんや。

十八世紀の豪傑中余はバルンスを以て尤もミラボーに似れるを感ず。二者甚だ外見を異にす、然れども須く其内眞を觀るべし、心身二つながら粗豪强頂にして老侯ミラボーが所謂「快活」を基とせること二人相等し。其性質其發育更に其國土に因りて、ミラボーに傲慢の分子多し、是喧囂奮進不穩の人なり。然れどもミラボーの特種は亦誠實と聰慧と視力の卓絶となり。其言辭常に記すべし、是事物達觀の閃光なり、二人の言ふところ此の如し。彼等一樣激烈の熱情ありて又之を高尙友愛の情に顯はすを得、詼諧、哄笑、精力、直白、誠實共に兩者



に存す、二者の模型相類せざるに非ず。バルンス亦或は治を行ひ、或は「國民議會」に討論するを得べし、政治の才之に優るもの少なし。痛しい哉バルンス、或はソルエー江口に密行船を捕ひ、或は演述を得ずして悶々の奮激に發し常に緘口して其勇僅に是に現ぜしのみ。此勇以てプレゼイ等を叱し、帝王の國を司り、緊要の時世を治めて萬人の眉目に映ずるを得べし。然れども上官彼を咎め之に書を送りて曰く、汝たゞ業を勤むべし、考ふべからず。吾人は國中最大なる汝の思考力を有せず、汝宜く麥酒を量るべし、汝獨り之に用あるのみと。奇なる哉是洵に記すべし。吁吾人は之に答ふる如何を知る、此言恰も天下の時と處と位置を問はず、思想を以て實に必要物と爲さざる觀あり。非運の人は考へざる人に非ずや、考ふる能はず、見る能はず、只匍匐幻視して事物の性質を誤る者に非ずや。彼之を誤視す、所謂之を「誤り取る」、物其預想する所に非ず。彼齷齪として遂に一も爲す所なし。彼非運の人なり、若し至上の位にあらば非運曰ふべきなし。或曰く何すれぞ之を咎むる、强は每に其處を拒まる、

誠實

英雄崇拜の形と原理

是古今の通患なりと。洵に然り、而して余は「處」爲めに不幸なりと答へむ。怨言は益なし、然れども眞を述ぶるは益あり、佛蘭士革命今正に破裂して、而して麥酒を量るの外歐洲またバルンスに用なしと謂はゞ我安んぞ之を賀するを得むや。

吾人茲に再言せざるべからず、バルンスの要質は誠實なりと、其詩に於て然り、其生に於て然り。其謠ふところは空想に非ず、衷心眞に感ずる也、其首要の功は眞理なり。バルンスの事業と一生と皆此眞なり。我は其生を稱して莊大悲劇の誠と曰ふ。一種蠻風なる誠也、酷なるの謂に非ず、遙に之と異にして奔放にして眞理と裸角するの謂也。此義を以てせば一切の偉人皆蠻風を帶ぶ。

等く英雄崇拜といふ、オーヂンとバルンスとの差幾何ぞ、されど彼の諸文人一種の英雄崇拜なきに非ず、只其狀今何ぞ奇なる。蘇國旅亭の僮僕等窓隙より覘き、力めてバルンスが隻語を捕へんとするもの、彼等知らず々々々偉人に崇敬を致せるなり。ヂョンソンは其崇拜者ボスエルを有せり。ルーソーは多くの崇



拜者を有せり、王侯陋室に彼を訪ひ、大なる者、美なるもの、此貧狂爺を禮す。ルーソーの一身に取れば是尤も恐るべき撞着なり、其生の二極調合すべからず。一方には王侯の卓に列し、一方には食を得んが爲めに樂譜を寫さゞる可らず。而して此樂譜を寫すことすら猶得ず。自ら曰ふ食を得ずして家に餓死せんとせりと、是れ其崇拜者に對して亦尤も疑似の件なり。若し英雄崇拜法の良否は時世の幸不幸の驗なりとせば、吾人豈當時の時世を以て第一流と爲すを得んや。—然り而して我が文界英雄、或は敎へ、或は治めて、帝王たり、僧侶たり、(其稱號の如何を問はず)世到底之を妨ぐ可らず。天下にありて考ふる人、見る人—天下は之に從はざるべからず。天下其方法を變じて或は祥和恒久なる夏日の日光となすべく、或は不祥暗黑なる疾雷狂飈となすべし。二者天下の效益に無上の大差あり。方法は變ずべし、其實蹟は普天の下何等の力に因るも變ずべからず。光明—然らずんば電火、世其一を撰で可なり。一オーデンを神と呼び、預言者と呼び、僧侶と呼ぶ、其名稱如何にあらず、只吾人其言を信ずるや

エヂンバラに於けるバルンス

否や、事こゝにあり。是眞言ならば信ずべし、信じて之を行ふべし。其人を稱する如何、其言を迎ふる如何、是吾人の大事なり。新眞理、萬有秘密の新且深なる啓示は皇天使命の性を帶ぶ。是從はるべし從はれざるべからず。

終に莅んでバルンス傳中至要の點即ち其エヂンバラ行を述べん。余思らく當處バルンスの行爲尤も善く其人品を現はせりと。善く之を考ふるに重荷の人力に負はるゝもの之より難きは稀なり。激變此の如し、夫の無數の人を陷れたる通常の衒耀好奇は此に比すれば殆んど無なり。恰もナポレオンがラヘール聯隊の砲兵中尉より一躍して大帝となりたるが如し。バルンス時に年二十七、今や已に一農夫にも當らず、侮辱囹圄を免れん爲め亞米利加に奔らんとす、此月彼は破產の農なり、給料は年七「ポンド」にして是猶既に無し、然るに翌月は高官美人の光明中にあり、珠玉燦爛の貴婦人より競ふて宴席に招かれ、萬人の一樣注目する所となる。禍難は時として人に難し、然れども繁榮に堪ふるものは內に百千禍難に堪ふる力あり。余はバルンスが善く之に處せるを感ず、何人も此の



バルンスの最期

如く痛く誘惑に陷らず、又善く此の如く儼然己を失はず。彼は沈靜安定擾れず高ぶらず、醜拙なく、矯飾なし、自ら感ずらく我はロバード、バルンスなり、位階は貨幣極印に過ぎず、名望は燭火に過ぎず、人の何たるを示すのみ是が優劣を加ふるなしと。嗚呼人よく慮はらずんば、名望必ず人を劣らしめん、憫むべき脹大の風蹇遂に破れて死獅子となり、某人の言へる如く其骸蘇生せずして、生ける狗子に劣らん、—バルンス之に於てか賞す可きなり。

然り而して余が他日述べし如く此の獵獅輩(好奇の輩)はバルンスの頽墮死滅を來せり。バルンスを生くる能はざらしめしは彼等の爲なり。衆彼を圍繞して是が勞作を妨ぐ、彼何處に行くも免るゝ能はず。バルンス正を好んで其衒耀を忘れんとせしも能はず、不平に陷り、禍難に陷り、過失に陷る、世は益慘悽となりて、其健康性格、心の靜和、皆悉く去る、寂寞幾何ぞや。之を思ふも悲慘なり。衆來りて只彼を見んとす、同情若くは憎疾に出るに非ず、只少く慰樂を得んと欲してなり、而して之を得たり、而して英雄の生命爲めに竭く。

リヒテル曰くスマトラ島に一種の巨螢あり、人之を竿に貫きて夜行を照すと。貧人は此の如くして路上愉快の光明を得、之を賞すると盛なりといふ。螢の榮や大なり然れども……



帝王

偉人を上位に置かば完全の

# 第六講

## 帝王、クロムエル、ナポレオン、近代革命

吾人は今英雄最後の形式に來れり、之を稱して帝王と曰ふ。彼は人民の治者なり、衆人の意は彼の意に附從して誠忠を致すべく、而して之に因て其安寧を求むべし、是偉人中至要の者なり。彼は吾人に對して諸種英雄の統合なり、僧侶、教師等靈界俗界の權長にして人中にあるを想ふべきもの、茲に現はれて人を制し、賦するに實際の敎を以てし、告ぐるに日常我爲すべき所を以てす。人彼を呼んで Rex と曰ふ佛語 Roi 之より出づ、治者の謂なり、英語に曰ふところ之よりも善し King は「有能」の謂なり。

衆多の考察、幽深窈冥不測の域に向ふもの茲に現はる、其大部は今斷然其講說を省かざるべからず。バルク嘗て曰へり、思ふに正當なる「陪審試問」は政治の神

政治成らん

完全の理

髓なり、立法、行政、議會討論等は皆公平なる十二人を陪審席に致さんが爲めなりと。是と等しく、更に强固の理に因て、余は茲に之を曰ふ、有能を得て有能の標證を附し、之に權威崇拜王權を與へ、彼をして其能に應じて嚮導の任に當らしむること——是成功の良否に論なく、此世に於ける社會全經營の事なりと。「撰擧演說」「議會動議」「改革案」「佛國革命」等其內實悉く是なり。何の國を問はず、國中の至能を擧げて至上の地位に致し、謹んで之を敬せよ、其國完全の政府則成らむ。——投票函、議會演說、選擧、憲法、建築、及其他の機關、一毫も之に加ふ可らず。かくて邦家は完全の狀にあり即理想の邦也。至能の人は至眞の人、至正の人、至高の人なり。其吾人に命ずる處、正に至眞至當にして他之に優るはなし吾人は忠誠の感謝を以て疑はずして之を行ふべきなり。然らば世上の事物政府の管理し得る限りよく管理せられむ、憲法の理想茲にあり。

嗚呼吾人は能く之を知る、理想は決して全く實際に致す可らず。理想は常に離



想望む可らずと雖も之に近くを求むべし

無能人上位にあるを以て擾亂止まず

れて遠かるべし、之に近きて稍々堪ふべきに至らば以て滿足すべし、感謝すべし。シルレルの曰ふ如く、此微々たる世上にあり、喃々として實地の產物を測るに完全の權衡を用ふるは不可なり、此の如き人あれば、吾人は以て賢者となさず、疾病不平の愚人と爲す。然れども他の一面より決して理想の存在を忘るゝ勿れ、理想に近くと全く之なくんば、全事地に落んと必せり。工人牆を築くや、完全に垂直ならず、是數學上能ふべきに非ず、垂直若干の度にして可なり、而して工人能く事を果さんとせば、爲すところ此の此し。然りと雖も彼垂直を去る甚だ遠からば——特に全く鉛垂と水準とを拋棄して、徒に手に來るまゝ瓦片を積まば如何、余思ふ此の如き工人は過てり、彼己を忘れたり、然れども重力法は之に働くを忘れず、かくて工人墻壁共に壞崩せざるを得ず。

佛國革命、近古社會暴動等一切騷亂の歷史は皆是なり。人其上に設くに無能甚きものを以てし、賤劣、怯懦、癡愚なるものを以てす。人は全く有能を擧ぐるに法あること自然の要あることを忘れたり。瓦片は縱に自ら累積せざるを得

治者と被治者との間に神聖の關係あり

ず。人事の施行に當りて無能の僞物は僞物と合せざるべからず、隨て整理なく、失敗禍難亂塊を爲さゞるを得ず、外にあり又內即靈界にありて不幸の萬民手を延ばして支撑を求む、支撑求むべからず。而して重力法は働く、自然法は一も働を忘るゝとなし。不幸の萬民潰裂して「サンキュロット」(極端共和黨)等の狂亂を起し、工人瓦片混沌として枕藉す。

殆んど一百五十年前「帝王神權」を論ぜる書、惘むべし今一人の讀むなくして國中の各圖書館に腐堆す。余豈豈其倉庫中に害なくして靜に世より消失せんとするを妨ぐるものならんや、然れども其莫大の塵堆其精神を留めずして空く去ると無らんが爲め、余は是が若干の意を含みしを曰はんとす。是の內實に若干の眞あり、人皆之を銘記すべし。何人を問はず、只人々接觸して(之に接する某種の法に因り)金屬の一圓片を其頭上に加へて王と稱するものに、靈德忽來りて彼を神の如からしめ、而して神明之に材能と權威とを賦して縱に人を治めしむと云ふ。——余此說を如何せんや、書館に殘して靜に腐死せしめんのみ。然



社交上神聖なるものなしといふは大謬なり

れども余は又曰はんとす、(而してこれ夫の神權論者の意なり)、曰く帝王の內、又一切の威權の中、また人間相互の關係中、實に神權あり、然らずんば魔害あり、二者必ず一あり。蓋し前の懷疑世紀吾人に告げて此世全く蒸氣機關なりといふもの僞なり。此世に神あり、而して神の制裁(然らずんば其壞破)一切の統治と服從とに現じ、一切人間の德行に現ず。統治服從より優れる德行人中に存せず。當らずして服從を促すものは禍なり、當るとき之を拒むものは禍なり。法典の行はるゝ如何を論ぜず、玆に上帝の法律あり、各人相互要求の奧に神權あり、然らずんば魔害あり。

之を考ふると小害なし、萬般人事の關係中特に至高王權の服從中、此事吾人に關係す。夫の近代の誤說、「事物の根本は自利にあり、貪慾の心を或は制し或は均ふするにあり、要するに人間社交上一物の神聖なるものなし」といふ、これ不信世界に當然なるも、余は之を以て夫の帝王神權說よりも更に一層賤むべき過となす。余は曰ふ我が爲めに眞王(「有能」)を求めよ彼則ち神權ありと。多少

之を求むる法を知ること、求めば好んで其神權を認むること、是實に當今の病世が求むる治法なり。眞王は實際の嚮導として內常に敎僧の如きものあり、故に又實際の因て起る靈界の敎導たり。帝王は敎會の首長なりといふもの亦眞也。—然れども吾人は今死世紀の論材を靜に其書架に放置せんとす。

有能を求むべくして之に處するの法を知らざること誠に恐る可し。現時悲慘なる天下の形勢は是なり。今日は革命の時代なり、從來また然りき。工人其瓦片と共に、鉛垂若くは重力法を顧みずして頽落し、頽積すると吾人の見るがごとし。然れども其起端は佛國革命に非りき、吾人は佛國革命は寧ろ終ならんを望む。其初は三世紀の昔、ルーテルの時代にありといふ事更に可ならむ。自ら稱して基督敎會といふもの、僞となり、無恥厚顏、出て、錢貨を以て罪を許すと僞り、又自然の眞理中其爲さゞりしところを爲すと僞りしと、重病の源、實に茲にあり。內已に惡なれば外のものも益々惡し、信仰は死せり、物皆疑なりき、不信なりき。工人其鉛垂を投じて曰く、重力とは何ぞや、瓦片彼に重ると。嗚呼人





事中上帝の眞理あり、物皆歪面にあらず、政略にあらず、外交にあらざることを今に至つて人々猶解せざるなり。

ルーテルが首先重要の宣言、「汝自稱の敎父、汝全く靈界の父にあらず、汝は—怪魔なり、余其禮辭上の名稱を知らず」—是宣言より進んで人民百千の怪魔に反して潰裂せしとき、王宮中カミーユ、デムーランの周圍に起りし「兵器々々」の叫喚に至るまで、自然なる史上の接續あり。夫の叫喚、恐るべく半ば冥府的のもの、亦一大事なりき。是再び擾々として怪夢より起つが如く、死眠より覺むるが如く、國民覺醒して人生實なり上帝の世界は政略に非ず、外交にあらずと、微に悟れる聲也。其聲や冥府的也—然り彼輩他を欲せざれば也、天上にあらず又地上に非れば勢自ら冥府的也。空漠不誠止まざるべからず、一種の誠起らざる可らず、戰慄時代、佛蘭士革命の惶懼等、費すところ如何を問はず、人は眞理に返らざるべからず。而して前述の如く茲に一眞理あり、冥府の火焰に包まれし一眞理あり、彼等他を欲せざればなり。

佛國革命を狂癲と見はる誤なり

英國及他若干の人士中に行はれし一說ありき、曰く當時佛國民は恰も狂せるなり、佛蘭士革命は狂人の爲なり、佛國及世界の大部、暫く一種の癲狂院に化したるなり。洵に事起れり亂れたり、然れども癲狂のみ、空漠のみ、今や幸にして夢となり、妄想となりぬと。——一千八百三十年七月の三ヶ日は此の如き太平哲學者を驚かさずんばあらず。佛國民茲に再び立ち、銃鎗を振ひ、死力を盡して夫の狂なる佛蘭西革命を完くせんが爲め、銃擊し、また銃擊せらる。見るべし、子孫此計畫を固守して之を增益せんとす、然らずんば身之に斃れんとす。夫の「狂」を唱へて一生の大系統を組成せる哲學者を驚かせし現象之より大なるはあらず。傳へ曰ふ、プロシヤの敎授兼史家ニイブール之が爲めに焦心して斃れたりと、曰ふところ信ならば彼「三ヶ日」の故に病み且死せしなり。是明に勇死に非ず、一度ルイ十四世に睨視せられて斃れしラシーンの死狀に優るなし。當時の世頗る激動に堪へき、人々思ひらく世は「三ヶ日」の亂に善く堪ふべく而して是後尙依然として其軸上に回轉せんと。然るに「三ヶ日」萬民に告げて曰へり、



佛國革命の現證するところ

先の佛蘭西革命は外見狂に似たるも、癲狂一時の激發に非ず、吾人が住せる地球の純產なり、是眞實蹟なり、到るところ世人之を眞と認むべしと。

誠に佛國革命なくんば、人此の如き時世を如何に解すべきかを知らざらむ。吾人が佛國革命を喜ぶは、破船の水夫が無間の海波中に堅岩を喜ぶ如し。恐るべしと雖も是萎微矯飾の時代に於ける天啓也、證して曰く自然は超自然なり、神靈ならずんば魔鬼なり、類似は眞に非ず、進んで眞となるべし、然らずんば天下は焚けん、焚けて而して空に歸せん。虛飾は了れり、空文は了れり、多くの物了れりと。其萬人に宣布する恰も審判の喇叭を以てするが如し、之を學ぶこと速かなるものは賢なり。人之を悟るに先ち、混擾の長時代あり、其時到らずんば平和斷じて求む可らず。擅着の世界に圍まれて、誠者は常に忍ぶを能くし、忍びて中に自己の業を勉むを能くす。死刑の宣告夫の混沌に反して天上に書せらる、死刑の宣告今地球上に布かる、誠者眼を開て之を見む。而して他の方面を考察すれば、巨大の困難存する幾何ぞ、萬人其解釋を求めて急迫すること幾

英雄崇拜の要

何ぞ、之を考ふれば今日人の爲す可き所、極端共和黨の領域外に存せんこと容易に悟るべきなり。

此形勢に當て、余は英雄崇拜の事貴重曰ふべからざる實蹟となるを覺ゆ。是今日世界至大の慰藉なり。世界の整理に關して常住の希望此内にあり、人間の設くる所、萬般の習慣、整理、信條、社會等、悉く亡ぶも是獨殘らむ。英雄降臨の確實北來る時英雄崇拜の可能と必要、此事恰も極星の如く烟塵、雲霧、環落、燒燼の間に耀く。

革命家は英雄崇拜を斥く

思ふに佛國革命の戰士及び經營者は、英雄崇拜を怪まずんばあらず、彼等に偉人の崇敬なし、偉人の再現に關して希望なく、信仰なく、又願望なし。彼等思ひらく萬有機械と化して恰も老耄せる如く、已に偉人を產する能はずと。我は之に告げむ、然らば萬有全く事を廢して可なり、偉人なくして吾人爲すところなしと。然れども余は又夫の「自由平等」と爭ふものにあらず、彼等は曰ふ賢者已になければ平均なる無數の愚者を以て足れりと。余は此信念と爭ふものにあらず、



是一時の形勢のみ

是當時當處自然の信念なり、曰く自由及平等なる哉、權柄已に要なし、權柄の崇敬、英雄の崇拜は僞なり已に要なし。從來吾人は贋物を得たり、今何をか信ぜんと。悪貨幣市場に行はるゝ多し、人普く信ずらく金貨已に存せず、而して金貨なくも頗る可なりと。普遍なる「自由平等」の叫喚中、余は就中之を見る、而して當時の形勢上其甚だ自然なるを見る。

然り而して是只僞より眞に生る過渡たるのみ。全眞理として考ふれば全く僞なり、猶只見んと勉むる懐疑的盲目の見なり。英雄崇拜は永久到るところにあり、獨り忠道のみならず、普く神聖の禮拜より人生最下の日常に至る。亂離顚倒せば寧ろ捨つべしと雖も、要するに人に低頭するは英雄崇拜なり、同胞の體内、神聖なる一物の存するを認むるなり、ノバリスの言ふ如く各人皆肉體中の天啓なるを認むるなり。一切の禮式を案出して人生を貴からしめし彼輩亦詩人なる哉。禮式は僞にあらず、影にあらず又爾かあるを要せず。而して忠道及宗教禮拜猶存すべし、否猶避く可らざる也。」

偉人の天職は秩序を來すにあり

吾人は更に曰ふ可らずや、近代英雄の多くは寧ろ革命家として働けるも、偉人眞人は其性質上秩序の兒にして亂雜の兒に非ずと。革命に働くは眞人が悲慘の地位なり。彼は外見上無政主義の如し、而して痛むべき無政の分子隨處に之を圍む。而かも彼は全心を以て無政を憎む。彼の使命は秩序なり、一切の人間悉く然り。亂雜混沌を整齊たらしめんが爲め、彼茲にあり。彼秩序の使徒たり。秩序を致すは世上萬人の務に非ずや。匠者は粗材を得て是が形を爲し、之を方正にし、之を目的に供す。吾人は生ながら亂雜の敵なり、肖像を破り、堂閣を倒すに與るは吾人が悲む所、況んや偉人我に優る者は之を悲むこと疑なし。此の如く一切の人事、至狂なる佛國の極端共和黨、亦秩序の爲めに力む、而してしか力めずんばあらず。狂亂の極に達する者猶常に秩序の方向に動かざるなし。人の生命は既に秩序の義なり、亂雜は瓦解なり、死なり。何等の混沌も其旋回の中心を求めざるなし。人若し人たらばクロムエルの如き、ナポレオンの如きもの極端共和の終局なり。英雄崇拜其尤も信ず可らざる今日に當り、尤も信ず



清教軍○ロードの人物

べき法を以て現じ來り、自ら實際に固守すること妙なり。廣く之を考ふれば、神權は即ちまた神力の意なるを見るべし。僞の舊式蹂躙破壞せらるゝと共に、眞の新物俄に起て壞る可らず。王權廢せられて恰も死せるが如き逆亂時代に當り、クロムエル、ナポレオン再び王として現出し來る。二人の歷史は我英雄最後の形式として今吾人が見んとするところ也。舊代吾人に歸れり、帝王の作られし法、王權の始めて起りし法、再び此二人の歷史に現はる。

英國に內亂多かりき、紅白薔薇戰爭、サイモン、ド、モントフオルトの戰ありき、而も是等の戰は甚だ重大なるものに非ず。只夫の清教徒戰爭は一種特有の意味あり。思ふに諸君の公明なる、他方に當りて我が今日ふ暇なきものを悟らむ、我は之に賴り、夫の戰爭を目して眞世界史を構成する普遍大戰の一局部と云ふ、信不信の戰爭即是なり。是れ事物の神髓に熱心なる人、事物の類似外形に熱心なるものと爭ふ也。衆の觀るところ、清教徒は蠻風なる肖像破壞者、猛烈なる儀式破滅者ならむ、然れども寧ろ之を虛形憎疾者と呼ぶを正しとす。吾人は清

教徒と共にロードと其王とを敬すべきを知る。思ふに可憐のロードは不正なるに非ず、只薄弱にして不運なるのみ、只不幸なる誇學者なるのみ、他何等の惡物に非ず。其「夢」其迷信、衆心の笑ふ所となるもの、寧ろ愛すべき性あり。彼は大學の教師に似たり、其全天下は儀式と校則とのみ、思らく此儀則是れ天下の生命なりと。彼其不幸不變の見を懷きて俄かに國民の上に立ち、(大學の上に非ず)複雜幽深なる利害を制す。彼思らく、人適宜の古制度を奉ずべし、否、其救濟は之を增し、之に補ふにありと。かくて弱者の如く彼は痙攣猛激其目的に進み、之を固守して、警戒の聲を聞かず、乞哀の叫を聞かず。彼校人をして校則に循はしめんとす、曰く是至要の事、是を果さずんば他に何をかなさんと。前述の如く彼は非運の誇學者なり。彼れ世をして此の如き大學たらしめんと欲す、而して世然らざりき。吁々其命甚だ艱なるに非ずや。其施せる害の如何に論なく、彼恐るべく復仇されしにあらずや。

形式を守るは嘉すべし、宗教及び一切の物皆形式を被る。到るところ形ありて





社會始めて住むべし。淸教の赤裸なる無形式は余が嘉する所にあらず、余は之を憫む、嘉みするは之を止む可らざらしめし精神にあり。物皆形式に裝はる、然れども是に適當にして眞なるものあり、不適當にして僞なるものあり。至簡の定儀としてかく曰ふべし、物の周圍に成長する形式は(吾人正しく其語を解せば)其眞性と趣意とに適はん、眞且善ならむ、ことさらに物の周圍に附着せる形式は非なりと余は諸君のこゝに顧みんを乞ふ、是禮式に於て虛と信とを分ち、一切の人事に於て熱誠の嚴肅と空漠の虛禮とを分つ。

形式には實あるべし、自然發動あるべし。日常の集會に當りて所謂「腹案」の言をなすものは厭ふべきに非ずや。客廳の中もし衷心の誠より出るに非ずして其實歪影たる禮讓を見なば人必ず之を厭はん。然れに今死生の大事超絕の事(例せば拜神の如き)あり、全心過度の感情に打たれて之を述ぶる如何を知らず、故に發言を捐てて、無形の沈默を擇ぶと想像せよ。此際若人あり進んで我が爲め之を述ぶること滑稽に類せりとせば如何、此の如き人、身を惜まば速に去る

清教徒の排斥したる儀式

こと可なり。人其獨子を失ひ、黯然痛悼、涙尚出ざる時、人煩く是が爲めにグリーキ風の葬禮の演技を行はんとす。此の如き滑稽劇は獨り受く可らざるのみならず、又憎む可し、忍ぶ可らず。是預言者の所謂偶像禮拜なり、空漠の外觀を拜するなり、一切の誠人悉く之を排せん。乃ち吾人は多少夫の清教徒の心事を解するを得る也。ロードが「セント、カザリン宗」寺を祭るや、其法吾人の嘗て記せし如し、複雜の禮拜動作叫喚、寧ろ是廬式の誇學徒、其校則に熱衷なるもの也、事の神髄に熱衷なる預言者に非る也。

清教は此の如き儀式に堪ゆる能はずして之を蹂躙せり、曰く儀式此の如くんば無に如かずと、吾人はこれを恕せざる可らず。手に獨り一卷の聖書を取りて清教立ちて空壇に設けり。人その誠心より他の誠心に說くは、一切教會の神髄なり。蠻風亦裸の實は一切莊嚴の假相にまさる。且是れ眞ならば漸次正當の假相を着せん。是恐るゝに足らず、少も恐るゝに足らず。人あらば衣自ら得られん、人自ら衣を求めん。然れども一襲の衣僞りて自ら人なり、衣なりといはゞ



王政復興の際清教徒の虐待
○清教徒の事業泯びず

如何。三十萬の紅戎衣は佛人と戰ふ能はず、人必ず內に存せずんばあらず。余は斷じて曰ふ、混相は實に實と離るべからず、假相若し之を爲さば假相に背反する者必ず起らん、彼僞となればなり。ロード清教徒の件に當て、二個の反論相鬪ふものは其古きこと殆んど天地と等し。當時二者英國中の激戰となり、混亂爭鬪頗る長ふして吾人に多くの結果を殘せり。

次代に當りて清教徒及其事業は公正の審判を望む可らざりき。チャーレス二世及びロチェスター輩は清教徒の價値と本旨とを判すべき人にあらず。人生に信あり、眞理あることは夫のロチエター及其時代の忘るゝところ也。清教は其首領の骨と等しく絞臺に掛けらる。然れども其事業進んで完成に向へり。人間一切の眞事業は、其起動者を何等の絞臺に掛くるも必ず成らん、必ず成らざる可らず。吾人今保身律あり、自由代議制あり、萬人皆所謂自由の人たるべき廣大の承認あり、其生を實と正道とに礎し、不正となり僞物となれる舊習に礎せざるは、是自由の人なり。是一部は清教徒の事業なりき、他また其事業多かりき。

清教徒の寃罪がる
○クロムエルは未だし

而して此事漸く明亮となるに隨ひ、清教徒の性格亦明亮となり、其紀念は前後續きて綾臺より下されしのみならず、其一分は今日殆んど祭祀せらるゝに至る。エリオット、ハムデン、ピム、更にルドロー、バッチンソン又エーンに至るまで皆一種の英雄たるを認めらる、政治上の元老にして、英國を自由ならしめしに與て頗る力あるもの、何人も之を惡人と呼ぶを憚るべし。著名の清教徒にして其辯護の人を得ざるはなし、誠實の人皆之を敬す。思ふに一人の清教徒、而かも殆んど彼一人、我が可憐のクロムエル尙綾臺に懸りて未だ何處にも誠實の辯護者を得ざるものゝ如し。善人彼が大惡を赦さず、罪人猶彼が大惡と赦さず。曰く英才多能勇剛の人にして、彼其主義を賣れり、虛名、不正、矯飾、猛激、鄙陋、僞騙の奸物、立憲自由の尊き爭を變して私利を計る狂言となせりと。是の如きもの又更に是より甚しきもの、人以てクロムエルの性格と爲す。而して次にワシントン及其他特に高尙なるピム、ハムデン輩との比較來る、以爲らく、主義を賣れり彼れ是輩の功を偷み之を醜陋の虛業と爲せりと。



十八世紀のクロムエル評

ピム一派とクロムエルとの比較

此クロムエル論評は十八世紀の如き時代には不自然にあらず。吾人が僮僕に關して說きし所又懷疑家に應用すべし、彼等は共に英雄を見るも之を知らず。僮僕は紫袍、金笏、護衞、及皷樂の亂奏を期し、十八世紀の懷疑家は整齊適宜の形式及び主義、演說の行爲體裁恰好と見え、閑雅明亮自ら辯じて懷疑文明なる十八世紀の投票を得べきものを求む。其見るを期するところ僮僕と彼と實相同し、王家の服飾已に世に認められれば彼亦之を認む。眞王來るも組豪にして形式に適はずんば、彼之を以て王となさゞるなり。

ハムデン、ピム、エリオットの如き人物を貶下し、或は貶下の意を暗示するは豈我分ならんや。余は彼等を信じて重厚有爲の人物とす、余力めて手に觸るに隨ひ、之に關する書籍記錄を讀めり、之を愛し之を禮するを、英雄の如からんを欲して也。然れども眞を語らば、其結果は甚だ索然たらんを恐る。其實吾は此事の不可なるを見たり。彼等眞に高尙なり、適宜の雅言、哲學、議會演說、船稅「邦論」等を率ゐ、悠々緩步し、立憲的にして難ずべき點なし、然れども人心これ

が前に冷にして想像獨りこれが崇拜を致さんと勉む。何人の心が眞に之に對して、同胞友愛の活火に燃ゆるを得んや。彼等恐るべく鈍き人となれり。人ビムが憲法辯論「其七に曰く」を讀めば數々途中に止む、人是が天下至好の物たるを見ん、然れどゝ遲鈍鉛の如く、荒漠粘土に似たり、要するに生きて後に傳はるもの其中に存せず。人敬遠して是等の貴人を名譽の壁龕に殘らしむ。粗野放浪のクロムエルは此中に在て人間なり、尚人間の質あり、蠻風偉大の「ベールサアーク」彼閑雅の王邦論を書する能はず、其言行平滑整齊ならず、自ら爲めに語るべき談を有せず、彼赤條にして立てり、彼閑雅の戰甲を穿たず、面相對し心相露し、巨人の如く赤條の事理と角す、是必竟唯一眞人の質なり。余は此の如き人を他人に優りて尚ぶと告白す。人々屢々見るところの圓滑適宜は多く要なし。手を汚すを欲せず、手套を着けずんば物に觸れずと云ふ者に對しては多く感謝するところ無き也。

またこの十八世紀が他の幸なる清教徒を寛恕すると大事に非るが如し。人或は





曰ふべし、是他と等しく懷疑說形式說の一片なりと。人々吾人に告ぐ、我英國自由の基礎「迷信」の置く所たるを思へば悲むべしと。彼等思らく夫の清教徒信ず可らざるカルビンの信條、ロード反對主義、エストミンスター公白を率ゐて來り、首として自個の法に因り禮拜するの自由を求めたり、これ彼等の要求たりき。而して其眞に求むべきは納稅の自由にあらずや。他事を强求せしは迷なり、狂言なり、憲法哲學を知らざるなりと。納稅の自由とは何ぞや、理を示されずんは、懷中より金を出さゞるを曰ふか。思ふに荒廢の時世にあらずんば之を固守して人間首要の權利となさざらむ。余は之に反して曰ふ、正人は其政府に背くに先ち、其形の如何に論なく、理由の金錢に優るものなくんばあらずと。世は混擾の天下なり、何等の政府に論なく、其自ら支ふる法甚しく忍ぶべからざるに非るよりは、善人之を見て可なりとせん。而して今我が英國にありて公額の納稅を理由なしとし、之を納むるを欲せずんば、事彼に便ならざるべし、彼去て他に移らざるべからず。徵稅吏か、金錢か、彼は曰はん、汝能ふべくば、

また之を欲する此の如くならば、我が金を取れ、取て而して去れ、而して獨り茲に我を我業に殘せ。余猶茲にあり、汝余より金を取るも究竟余尚働くを得と。

正當の背反

然れども人若し來りて「僞を承認せよ、神を拜せざるとき之を拜すと僞れ、汝認て眞となす所を信ずる勿れ、我が認むる所我が認むると僞る所を信ぜよ」といはゞ、彼は答へて曰はん、上帝の恩寵に藉りて余之を拒まん。汝我財を取るは可なり、然れども汝は余が道德的主義を滅する能はず。裝銃を以て余に迫る劫盜は皆財を得ん、然れども主義は我の有なり、我を造れる上帝の有なり、汝の有に非ず、余死を決して汝に抗せん、汝に背かん、而して之が爲めに一切の極艱誣告混亂に而せんと。

余の見るところ、是清教徒の背叛を恕すべき唯一の理由也。人間中正當の背反を起すもの其精神皆此の如し。佛國革命すら獨り物慾の產に非ず、僞遍滿して忍ぶべからず、今物慾上に現はれて一般物質上の欠乏虛無となり、隨て萬人の眼中其僞なると明々たるに至る、此感即ち夫の革命を起せる也。吾人は其納税自由



偉人豈詐人ならんや

と共に十八世紀を棄てむ、清教徒輩の心事此に明かならざりしと驚くべからず。全く實を信ぜざる者如何して實中の最たる人間の實心、—宛然上帝今尚我に語る聲なる者を解せん。立憲主義は五官に觸るゝ鄙陋の物利、例せば納税の如き に關す、今誘ひて此主義に致すべからざる者をば、夫の如き世紀斥けて無用の廢塊となすと素より當然なり。ハムデン、ピム及船税は立憲辯論に熱心たらんとするものゝ好題目たらむ、其赫々たるや、火の如くならずんば、氷の如からむ、而してクロムエルは狂及び僞善等の混沌と殘らむ。

余は明に曰はん此クロムエル虛僞の說古より余に信ず可ちずと。何等の偉人に於けるも余はかゝるとを信ずる能はず。多くの偉人虛誕私慾の人物として史上に現はる、然れども善く之を考ふれば、是只吾人に對する形象也、解す可らざる影象也、吾人は全く生ける人として之を見ざるなり。獨り淺薄不信の時代のみ物の外面と假相とを見て此の如く偉人の概念を造らむ。良心なき者豈に偉人たるを得んや、良心は大小一切眞人物の神髓なり。吾人虛僞蒙昧としてクロムエル

クロムエルの性質 鬱憂過敏

を書く能はず、其一身履歴を究むること益多くして益爾か信ず可らず、吾人何すれぞ爾か信ずべけん。證跡何にかある、誹謗丘を爲して一身に集るも、虚僞の首領にして決して眞理を語らず常に眞理の狡猾を語ると曰はるゝも、虚僞一片未だ明に彼を證するなきは奇ならずや。虚僞の首領なりと云はれて而して彼に一片の虚言なし、余未だ其一片を見ざる也。これボーコックがグロチアスに問ふ如し、マホメットの鳩の證何處にあると、蓋し證なき也。請ふ吾人をして此誹謗の怪物を棄てしめよ、是須らく棄つべき也、是クロムエルの寫影にあらずして其歪影也、憎疾と迷暗と相合して之を產せる也。

我自己の眼を以てクロムエルの生涯を觀れば、前者と大に異なる說心に浮ぶを覺ゆ。其隱微の早時に關して少しく知らるゝ所、傳來の際扭歪を免れずと雖ども、全く熱誠友愛の人物たるを表はすに非ずや。其神經的悲哀の性情は、寧ろ眞面目身に餘るを證す。夫の幽鬼談—白鬼白日彼に現はれて、他日其英國王たらんを先言したりといふもの、吾人素より多く信ずるを要せず、恐らくは他の黑鬼



其青年時代

或は惡魔、之に(ウスター戰爭の前、士官の見るところ)彼其身を賣れりといふものと大差なからむ。然れども早時オリバアが黯然過敏鬱憂の性癖は世の明かに知るところ也。ハンチングトンの醫師曾てサア、ヒリップ、ヲーキックに語て曰く、我數々夜半に到れば、クロムエル君鬱憂に沈み、自ら死遠からずと感ぜり、彼れ絞臺のことを想へりと、此事著るし。此の如き多感激性にして粗豪剛强と並び存するもの、是僞の徵候に非ず、全く僞と異なるもの〻徵候なり。オリバア少にして出て〻法律を學ぶ、この間暫時一種青年の放蕩に耽る、これ或は訛傳なるも知る可らず、其、事實なりとするも彼は速に悔ゐて皆之を捨て、廿歲を越ゆると久しからずして娶り、全く沈着嚴正の人となる。傳へ曰ふ、彼常に奕に得たる金を返すと、——彼此種の利を以て自己の有と爲さゞる也。此所謂改宗なるもの甚だ自然にして甚だ趣味あり、偉大の靈魂濁世より覺め、猶然事物の眞理を觀じて、時と影とは皆永劫に據り、此微々たる世界は天國或は冥府の關門たるを見る。セント、アイフス、及エリイにありてオリバアの生、

老實勉勵の農夫たる者、是全く眞實敬虔の生にあらずや。彼己に人世と世務とを捐つ、世の恩賞は彼を富しむるものにあらず。彼れ土を耕し聖書を誦し、日々僮僕を集めて神を拜せしめ、窮迫の法敎使を慰め、說敎使を好み、又自ら說敎し、隣人を誡めて賢ならしめ、時を浪費する勿らしむ。此一切の中僞善功名虛飾等何處にある。余は信ず其希望は他の高上の世界にあり、其目的は善く現世の卑途を歩みて善く彼處に達するにあり。彼れ人の注視を求めず、注視こゝに彼に何をかなさん、彼れ獨り「終始大なる上帝の眼前にあり」。

一度公厄に際して彼衆前に現はれし狀また著し、他人皆行くを欲せざればなり、ペットホード沼澤の件是なり。他に何人も公司と諍ふを欲せざるが故に彼之に當る。事定まりて閑居に歸り、聖書と田畝とに歸る。勢力を得るといふか、彼の勢力は最も正統なり、其正義敬信有理果斷の人物たるを知らるゝより起ればなり。此の如くして生を送りて四十を過ぐ、老齡は今其眼中にあり、死と永訣との大關門今其眼中にあり、彼が俄に「功名心」を起しゝは此時にありき





といふ。余彼が議院の使命を解する此の如くならず。

其議院に於ける、軍中に於けるは、皆勇者の正き成功なり、彼れ他人に優りて決斷心あり、光明腦裏にあり、上帝彼を護り、彼を進めて、混亂世界の猛擊を凌がしめ。殆んと失望の狀を呈せるダンバア攻圍を凌がしめ、衆多戰鬪の死綏を凌がしむ。彼が神に祈願せると、彼が其勝利の神に謝せると、神助相續きてウスター戰役の至上神助に至ると、——是皆幽深なる「カルビン」派のクロムエルに對して佳なり純眞也。唯夫の不信浮華なる王黨騎士、神を拜せずして自己の裝飾と虛禮と輕浮とを拜し、其生全く神の觀察を離るゝもの、夫の王黨騎士に此事僞善と見ゆるや必せり。

彼がチャーレス王の死に預ること亦證むるに足らず。王を殺すは儼然たる大事なり、然れども人一度是と戰はゞ此事免る可らず。多くの他事亦免る可らず。戰一度起るや是勝敗を賭するなり、彼死するに非んば我死なん。調和は疑ふべし。それ或は成らんか、然れども成らざると遙に思ふべし。議院已にチャーレ

ズを敗りて是と堅牢の約を結ぶ道なかりしと今殆んと一般に承認せらる。多數の「プレスビテリアン」黨今は獨立黨を恐れて尤も其訂約を願へり。不幸なるチャーレス夫のハムブトン公廷最後の商議に於て、自ら共に爲すべきなきの人、たるを示せり。彼れ事を解するを能くせず、又之を欲せず、其思想は彼に事の眞相を現はさず、甚きに至ては言全く其思想を現はさず。我之を曰ふは彼に酷なるに非ず、寧ろ之を憐みて也、然れども此の事眞にして否む可らず。彼已に獨り帝王の名を殘すのみ、而して尙帝王の待遇を享くるを見て思らく、黨派を して互に離間せしめ、兩者を欺くを以て我舊權を竊むべしと。吁々二派共に其己を欺くを悟れり。言以て其思ふところ、欲するところを現はさざる人は共に事を商議すべきに非ず。我彼の途を去らざる可らず、我途より彼を斥けざるべからず。チャーレス詐にして再び信ず可らざると明亮となれり、然れども「プレスビテリヤン」其失望に瀕して尙之を信ぜんと欲す。クロムエルは然らず、「一切戰鬪の結果として吾人獨り一小紙片を有すべきか」、斷じて否なり。



クロムエルの慧眼

生死存亡の戰

到るところ吾人はクロムエルの果斷實行の眼を見るべし、彼常に實際と實行すべきものとに馳せ、靈眼あつて事實の何たるを觀る。余は固く曰ふ、此の如き能力は僞人に存せず、僞人は僞觀、外見、私利を見るのみ、實際の事を判ずるに猶眞人を要す。爭亂の始めに當り、クロムエル議院軍隊に關して曰ふ、市井の輩を斥け、醉蕩菲弱の徒を斥け、衷心事を務むる堅實の鄕士を擇びて兵士たらしむべしと、之を勸むるは炯眼の士に非ずんば能はず。實蹟を觀ば實蹟之に答へむ。クロムエルの鐵騎は其炯眼の體現にして只神を恐れ他を恐れざる人なり、之に優りて純眞なる戰士の一團未だ英國の土を踏まず、また他の邦土を蹈まざる也。

クロムエル其鐵騎に告げて曰く「王我に戰場に遇はゞ我之を殺さんと」、人甚だ是言を咎むれども余は甚しく之を咎めず。之を爲す何の不可ぞ。此言を聞ける人士は帝王より上なる者の前に立てり。人茲に賭するところは自個の生命已上のものなり。議院は官司の辭を以て「王の爲めに戰ふ」といはん、然れども吾人

天與の偉人を受けるさは痛むべし

は之れを解する能はず。吾人にとりて是れ閑漫の事業にあらず、平滑なる公事にあらずして、嶮絶峻阻なる死なり、眞面目なり。事遂に戰爭となれり、生死存亡の激戰人々相搏して眼燃え氣狂ひ、中心冥府の分子を激して之れに當る。故に此事爲すべし、爲すべきものなればなり。クロムエルの成功は余以て至當とす、彼軍中に豁れざりし故此事避くべからず。眼以て視み、意以て行ひ、此より彼に進みて凱勝相續き、ハンチングトンの農夫遂に其名稱の如何に論なく、英國最强の人と認められ、實に英國々王となりしと——之を說明するに奇術を要せず。

懷疑に陷り、虛文に陷り、不誠に陷り、目に之を視て誠實を知らざると、是一人の禍なり萬民の禍也、此世に取り一切の世に取り、禍難此の如きものなし。心死して眼見えず、殘るは獨り猾才のみ。人は眞王の降臨を大事に非ずとなし、降臨あるも之を知らず、而して輕侮して曰く是汝の王かと。愚者の無用なる抗爭ありて英雄爲めに其英才を耗し、爲すところ極めて少也。彼自ら英雄の



眞を取り僞を去れ

生を送る、是夥し、是全し、然れども世の爲め彼は比較上一事を爲さず。粗豪の誠人直に造化より來る者、口供席より答ふるところ平滑ならず、小法庭之を偵して贋物と爲し、猾才漫に之を「看破す」。材以て千人に當るが爲めノックス、クロムエルが得るところの報酬は、二百年間其果して能く人間なりや否やの論のみ。神が世に降せる至大の賜を人蔑りて拋棄す、彼れ神異の咒符を微たる一片貨と爲して思ひらく通貨として市場に用ゐるに適せずと。

是悲むべきなり。余は曰ふ是治せずんばあらずと。此物多少治せずんば、又一物の治せらるゝなし。僞物を「看破す」と曰ふか、請ふ皇天の爲め之を爲せ、然れども是と共に信ずべき人の如何を知れ。我之を知らずんば一切吾人の知識は果して何ぞや、又如何して所謂「看破」するを得んや。蓋し猾才自ら知識と信じて此の如く看破する者は大に謬れり。愚物允に多し然れども欺かれんを恐れて毎に退々安んぜざるは其極めて慘なるもの也。世界は在り、世界は內に眞理あり、眞理なくんば世界決して在らず。人須く首として眞の如何を知るべし、然

偉人を知るの難

らば即ち僞の如何を判ずるを得ん、然らずんば僞は到底判ず可らず。

「信ずべき人を知れ」。嗚呼此事今吾人を去るや遠し。誠なる者獨り能く誠を認めん。英雄獨り要あるのみならず、英雄に適する天下亦要あり、(僮僕の天下に非ず)然らずんば英雄の來る徒勞のみ。然り、此事吾人に遠し、然れども來らざる可らず、其來ると見るべき也、其來らんまて吾人何をかなさん。投票函か、選擧か、佛國革命か——吾人若し僮僕の如くにして、英雄を見るとき之を知らずんば是一切何の用ぞ。英雄のクロムエル來る、而して一百五十年間彼吾人より一票を得るとなし。蓋し不誠不信の世界は僞人輩の固有物にして、禍害、混雜、不實のみ獨り茲に在るを能くす。投票函に因て吾人は僞物の形を變ずるも其本質依然たり。僮僕世界を治むるものは、奸雄ならずんばあらず、王服を裝ふ者ならずんばあらず。是彼の有なり、彼是の有なり。要するに二者の一——人は英雄、眞治者、將帥を見る時先よりも善く之を知るを學ばん。或は永く庸者に治めらるゝを續けん。然らば各街偶に投票函の珊々たるあるも一の治法あ



クロムエルの本領

るとなき也。

微々たるクロムエル、偉大なるクロムエル。彼は言語不瞭の預言者也、語る能はざる預言者也、粗野混擾力めて語らんとする者也、蠻風の沈深あり、粗豪の誠實あり、而して典雅なる辭令、華美なる小ヲルクランド、教訓的のチリングヲルス外交的のグラレンドンの間に處して外見奇なること夫の如し。宜く彼を察すべし、混沌紛擾の外殼、惡魔の幻影、神經質の怪夢、殆んど半狂亂也、而して其の中心に當りて明快果斷の精力あり。彼は一種混沌の人なり。無限の憐愛、無形の黯黑中、一道の光働きて星の如し、焰の如し。而して此憐愛は又彼が眞に偉大なる所にあらずや。幽深好愛の激情、事物同感の情、靈覺以て眞理に達せんとするもの、統御以て物を制せんとするもの、是其憐愛なり。其禍は他の一切と等しく其偉大より來る。(サミュル、ヂョンソン亦此の如し)。彼れ悲哀に打たれ半は錯亂して黯黑の原素世界の如きものに掩はる、是預言者の性格なり、全靈を以て見る人、また見んと力むる人也。

之を基としてクロムエル著名の混擾演説を解すべし。是の内意は彼に明なること白日の如し、然れども述べ裝ふべき材料なし。彼從來默爾として生を送り、終始偉大無名の思想海に閉まるゝも、其生活の道自ら之を述べ之を名づくる要なかりき。彼か視力の鋭敏なる、行爲の決然たる、余は其好著者たり好演士たるべかりしを疑はず——彼の爲せしところ著書よりも難し。此の如き人は他の命ずる所の一切を敢行するに適す。知は語ると論ずるとにあらず、見ると也、確むると也。德は勇剛の謂なり、好言文雅整齊の謂に非ず、彼は首として獨乙人の名づくるところ、即勇なり、能力なり。クロムエル此根底を固有す。

クロムエル議場に演説する能はざりしも彼説教を能せり、斷續の説教を能くせり、特に臨時の祈禱を能くせり、是心中のもの自由に溢出して現はるゝ也、之をなすに方法を要せず、熱情幽深至誠あれば足る。クロムエルが祈禱の習慣は著し。一切の大計畫は皆祈禱を以て始まる。黯澹紛擾の厄に當り、諸士官と彼と共に數時數日代る〳〵祈りて遂に決斷起り、其所謂「希望の關門」開くに非ず





んば止まず。請ふ之を思へ。彼等涕を流し心を熱し上帝に叫びて慈を垂れ光を現はさんを祈る。其自ら感ずる如く彼輩基督の神武軍也、基督同胞の一小團、劒を拔て非基督的「マンモン」的惡魔的の社會に反する也、其困阨に當り、其危急に當り、神に祈りて曰ふ爾の大事を捐つる勿れと。光今彼に現はる、人心何の法に因てか此に優る光を求めん。かくの如して得たる目途は正に最美最善、少も躊躇なくして從ふべきものに非ずや。彼輩之を見ること恰も天上の光明燦として慘憺咆哮の暗に輝くが如し、火柱爛として夜間荒凉危險の途に我を導く如し。是眞に然らずや。今に到るまて人心其嚮導を得るに內實この法に因る、有言なるも、無聲なるも、明晰なるも、不明なるも、熱誠力爭の靈魂、敬んて至上者に跪き一切の光を與ふるものに跪くの外なし。誰か「僞善」と曰ふ。人之を聽くに厭く、之を唱ふるものは事此の如きに關して容喙の權なき也。人間眞正の目的を有せざるなり。彼投票を集め評議を集め策略と外飾とに汲々として、獨り全く事物の眞理と俱なるとなし。クロムエルの祈禱は能辯と曰ふも可、蓋

クロムエル詐人の說

し之れよりも多し、彼能く祈禱するものゝ中心たりき。

然れども余は之を知る、クロムエルの演說は其外見の如く不敎ならず、生硬ならず、議場に於てすら彼は一切の演說家の欲するところ、即感動の演說家なりき、初めより重きを有するものなりき。其い鹿野感激の言中常に實ありて、人之を知らんとしたりき。彼能辯術を用ゐず、却て之を賤み、之を厭ひ、用語を前思するなくして語れり。筆記者は當時妙に正直にして、直に記錄を印刷者に與へしが如し。而して又終に至るまでクロムエル嘗て其の演說筆記を顧慮せざりしこと、是豈に豫謀周到にして天下を欺ける僞善者の行ならんや。說を公行するに先ち彼少しく其語を正さゞるは如何。言語若し眞ならばその自ら擴布するに任せて可也。

然れどもクロムエルの「虛言」に關して一言辯ぜん、思ふに其理由は下の如し、然らざるも相去る遠からず。一切の黨派彼に欺かれしを悟れり、各派思らく、彼が欲するところ某事にありと、彼いひし處も亦此の如し、而して彼忽然轉じ



各派の彼を怒りし所以

て欲する所他にあるを顯す。衆叫びて曰く彼虛言者の王なりと。然れども是實に此の如き時に際して優者(僞人に非ず)の免る可らざる命なり。此の如き人は緘口する所なくんばあらず。彼れ徒行の際其心を袖に附して小鴉の喙むところとならば其旅行遠きに及ばじ。何人も硝子製の家に居を占むるを要せず。幾何か他に心を示さんか、之を共同の輩に示さんか、人自ら判すべきなり。もし煩瑣の問を起す者あらば彼をして依然悟る勿らしむるを通規とす、止むべくんば誤解せしめず、只從前と等く曖昧たらしむべし。此時に際して正當の答辭を用ゐ得ば賢者の爲すところ蓋し此の如し。

クロムエルは屢眞に小國黨の言を用ゐ、而して之に其心の一部を現はせり。各小黨彼を我が有となす、故に其然らずして彼自己の黨なるを見て憤怒す。是果して責むべきか。彼若し衆に其逆覩を語らば衆爲めに戰慄せん、然らずんば之を信じて其小計畫全く崩れん。かくて衆己に彼が領域中に働く能はず、又自己の領域中に働く能はざらむ、クロムエル終始之を感ぜずんばあらず。是小人の

間にありて偉人の免る可らざる地位なり。小人營々として事に用ある者到る所にあり、而して其活動は一種の信念に因る、其信念は我が見るところ明に狹く、不完なり、誤謬なり。然れども其活動を妨くると豈に仁ならんや、義務ならんや。衆恒然として事を爲すもの、只舊慣俗習に賴る、彼は之を疑ふ可らずとし、我は之を信ず可らずとす。若し之を破らば、彼無間底に沈まん。ホンテネル曰く余全手に眞理を滿すを得而して只小指を開くと。

彼詐人に非ず

敎理に關して然りとせば況んや實務に於てをや。心を藏せざる者は大事を爲すと能はず、而して人之を「騙詐」といふか。尉官兵士好んで問を發するものあり、將軍之に其意を告げずんば之を詐人と曰ふ、可ならんや。クロムエルの玆に處せしところ、吾人寧ろ其完美を賞すべきなり。問を發する無數の尉官旋回横流して四方にあり、彼之に答へり、彼之に處せしこと達觀偉大の人ならずんばあらず。現證の一虛僞なきと既に曰へり、實に一虛僞なし。紛糾錯雜此の如きに處して何人か能く此辭に當るを得んや。



史家の謬見○事の前後を顚倒す

然れども二個の誤謬盛に行はれ、クロムエルの如き人物に關し、其「虛僞」「功名」等に關して、根底より吾人の判斷を謬らんとす。一は生途の終を途中若くは起端に代ふるにあり。クロムエルの俗史家は思ひらく、彼ケムブリッヂ州の沼地を拓けるとき已に英國の總督たらんと決せりと、又思ひらく彼其前途（全戯曲の目錄）を畫し、歩々進んで之を戯曲的に開きて狡猾詐僞を逞せり、彼奸謀不實の「ヒポクリティス」即俳優なりと。是根本の錯謬にして、此の如き件に尤も普遍なり。而して事實の之に異なる如何を思へ。人幾何か能く自已の生涯を前知するや。前程數歩皆茫寞にして、可能、蓋然、朦朧の希望等、束絲の結んて解けざるもの也。此のクロムエル前途恰も目錄の如きありて、戯曲を見る如く、一齣また一齣狡智を用ゐしに非ず。吾人はかく之を見るも、彼が見しところ決して然らず。史上此否む可らざる事實を顧みば、背理矛盾消却する幾何ぞ。史家は實に之を顧みると曰はん、然れども事の眞否如何を見よ、俗史はクロムエルの件に於ける如く、全く之を顧みず、最善の史もたゞ時々之を想起するのみ。

事實上に於ける如く嚴密正當に之を想起するは稀世の材を要す、否稀世にあらず。此事全く能ふ可らず。同胞の傳記を作り、彼が一生中見しところ之を同胞の眼を以て見、彼の一身と其歷史とを見るはセークスピア若くは其以上の材を要するなり。史家之を能くする者なし。吾人もし正直に表さんとし、其實際を現はさんとし、混亂紛擾の塊を現はさゞらんと力めば、クロムエルの肖影を歪むる是非顚倒のもの大半消失すべき也。

然れども第二の誤謬は世間一般の行ふところにして夫の「功名」に關す。人は偉人の功名を誇張して其性質を誤解す。かゝる意義を以てせば偉人は決して功名を欲せず、之を欲するは小人なり。世上に赫々たらざるを以て不平を懷き、才に誇り榮を求め、自ら衒ふに遑々とし、衆人に逼まりて、恰も上帝の大事なるが如く、己を偉人と認めしめ、人上に己を擧げしめんとする者を見よ、是普天の下極醜の輩なり。彼豈に偉人ならんや、彼は脆弱微賤好名の徒也、病院の門衛たるに適するも人民の統御に適せざる也。人須く彼の途を避くべし、彼靜平の路



クロムエル好名の人に非ず

を步む能はず、彼を眺め彼に驚き彼を說く者なくんば生くる能はず。是たゞ空漠なり、偉大にあらず。彼內に一物なきを以て人の玆に某物を見んとを望むなり。偉人若くは眞人、內に其種の何たるを問はず健康と實質とを有するもの斯く自ら懊惱するを我は信ずる能はず。

夫のクロムエル喧囂の民衆より注視せらるゝと何かあらむ。上帝既に之を注視せり。彼クロムエル既に玆にあり、何等の注視も彼を變化すべきにあらず。髮半白となり、命降路にあり、前途また無窮なるを得ずして、事物の進行已に推知すべきに至るまで彼は躬耕と聖書とに滿足せり。彼老年に至り虛僞に身を賣るとなくして之を支ふる能はざりしや。輕駕を驅りて官邸に行けば、書記簿書堆裏に之を鬪み、叫んで曰く之を決せよ、請ふ之を決せよと。而して何人か懊惱として完く之を決する能はざる也。クロムエル之を欲して然るか。輕駕彼に善く何をか爲さん。重大の事恰も皇天の雄麗と惶懼との如く早時より其心中に存せしに非ずや。死と審判と永刼とは其一切爲せしところ、考へし所の後景を爲せり。其一

切の事恰も無名思想の海洋中に沒入せり。人間の言語之れを名くる能はず、上帝の言、當時清教豫言者の讀めるところ、彼之を獨り大とし、他は皆悉く小と爲せり。此の如き人を呼て功名を欲すと爲し、書きて遠々たる愚物と爲す、是至愚の背理といふべし。此の如き人は曰はん、爾の輕駕と喧擾の愚民とを採れ、爾が赤帶の書記、爾が權勢、爾が要事を採れ、而して余を獨居せしめよ、生命已に我に多しと。往時英國最大の老サミュル、ヂョンソン好名ならざりき、コルシカンボスエル帽に紐して衆前に揚々たりしも、偉大なる老サミュルは家に蟄せり。世界大の靈魂其思想と悲哀とに蓋はるゝもの、華美の帽紐彼に何をか爲さん。

吁然り、偉大沈默の人、——世の擾々爲すなきを見、無意の空言無效の行爲を見て人は沈默の大邦に返るを好む。高尚沈默の人、各其領域に散在し默して思ひ默して行ひ、每朝新紙の揭載する處たらざるものこれ世の鹽なり。國之を有せずんば、不幸なり、根なき森林の如く、皆枝葉に化して忽ち凋萎せざる可からず。若し只表すところ述ぶるところの外、他に一物なしとせば禍なる哉。沈





默よ、沈默の大邦よ、高星辰に過ぎ深冥府に優る。是獨り大なり他悉く小なり。

—我は我英人たるもの永く「緘口の能」を保たんを望む。樽上に立て水を噴き、市場に見らるゝ無くして止む能ざるものは、專ら辯を修めて無根の綠林と爲りて可なり。ソロモン曰く語るべき時あり、默すべき時ありと。老サミュル、ヂョンソンは只錢財の缺乏に迫られて書けり、他の偉大沈默なる某サミュールにして此の如く迫られざる者に問へ、「子何すれぞ起ちて語らざる、何すれぞ子が學統を宣布し子が學派を立てざる」。と彼は答へて曰はん、允に余は從來我が思想を藏せり、我幸にして之を藏する力を有し、之を語らしむべき强迫を有せず。我が學統は首として宣布の爲めにあらず、我自ら生けるに用ゐん爲め也。其大目的是の如し。また「名譽」といふか、嗚呼然り、然れども是れカトーが肖像に關して曰へるところの如し、「汝の公所に肖像斯の如く多し。人若しカトーの像何處にあると問はゞ優らずやと。

然れども此沈默說と相對して我は曰はんとす。好名に二種あり、一は全く咎むべ

種あり○功名心の良否を判ずる如何

く、他は賞すべく又避くべからず。造化は偉大沈默のサミユルが默すると長きに過ぎざらんを計れり。他人の上に赫々たらんとする私慾は全く賤陋なりと曰ふべし。「大事を求めんとせば之を求むる勿れ。」是大に然り。然れども造化人に賦與する所あり、之が度に應じて、人皆己を暢發し、造化が内に置くところ之を述べ之を行はんとする傾向の抑ふ可らざるものあり。是正當避く可らず、是人間の義務なり、人間義務の終局なり。「我」を開きて我が材に適する事を行ふは地上人世の本旨なり是人間の命なり、人間生存の第一義なり。「レリッヂ」善く曰ふ、孩兒は此命を感じて以て語るを學ぶと。故に吾人は曰ふ好名の良否を決せんとせば二事を見るべし、獨り地位を欲するとのみならず、また此地位に適否如何を見るべし。是即問題也恐らく地位は其有ならむ、恐らく彼此地位を求むるに自然の權あらむ、而して更に又責務あらむ。「ミラボウ」が名を好んで總理大臣たらんとするも、若し彼佛國中之に當るべき唯一の人たりせば、吾人如何ぞ之を咎めん。彼若し事を能くすべきを感ぜざりせば恐らく更に有望たらむ。然れども憐むべ



其例證○クロムエル大業の端

きネッカー一事を成す能はず、又自ら其然るを感ずるも、衆に排斥せられて官を免れしが故に憮然傷心するもの、「ギッボン」之を痛むは宜なり。偉大沈默の人また勉めて語らんとは、造化の大に計れるところ也、寧ろ計れると大に過ぎたる也。例せば試に勇なる老「サミユル」、「ヂョンソン」が沈淪の生に當りて、人之に示すに、彼國家の爲め、天下の爲め無價神聖の大事をなすべきを以てするとせよ、曰く完全なる皇天の大法、此世の法となすべく、彼が日常「爾が王國を來らせよ」の祈禱遂に遂げらるべし、この事成る可し、行ふべし、「ヂョンソン」則ち與からんが爲めに召さると、人彼をして斷然之を信ぜしめよ。「ヂョンソン」則ち脚下一切の悲哀疑惑を掃ひ、一切の抵抗艱辛を蔑り、其存生の黯質光明電火の燦爛たるに燃ひ、全心耀て聖明となり高尚の言動及決斷とならむ、是眞の功名心なるべし。而して今「クロムエル」の事果して如何。上帝の敎會の困厄なる、熱誠の說敎師は獄に投ぜられ鞭笞せられ、拷問せられ、耳を斬られ、上帝福音の大事は、小人の脚下に踏まる、是事古より「クロムエル」の心を傷めり。沈默祈禱彼之を

見しこと長し、其一療法地上に存せず、猶信ずらく皇天必ずこれが救治を下さん、此道不正なり、僞なり、永續すべからずと。而して今や曙光明く。默過十六年にして全英國動搖す。議院再び起るべく、正者其言を得べし、曰ふべからざる確たる希望再び此土に來れり。議院此の如きは以て員たるに足らざらむや。クロムエル鋤犂を投じて走れり。

彼こゝに語れり、—誠實の爆發、自見眞理の爆發、こゝに吾人は彼の一微光を認む。—彼こゝに爲せり、砲彈等一切の間にありて剛强なる巨人の如く且戰へり且勉めたり、大事遂に勝を制して强敵悉く退き、希望の曙光は正理と正確との白日となれり。彼こゝに英國中の最强者として立ち、全英國の爭ふべからざる英雄として立てると是何からむ。今や基督福音の大法世に立つを得べし。神政はデヨン、ノックスが其講壇に「敬虔の妄想」として夢むべかりし者—クロムエル極艱なる世事の混沌を經驗して敢て之を善く實行すべしと爲す。今最信最賢にして基督教會の至上なる者國を治めんとす。多少このこと爾かあるべく、又





爾かあるを得べし。上帝の眞理は眞にあらずや、眞ならば是眞に爲すべきに非ずや。英國至剛の人材敢て然りと。答ふ我は之を高尚の眞志となす、是政治家及一般人間の心中に入るべき最高物に非ずや。ノックスの如きにして之を爲すと已に可なり、況んやクロムエルの如き其剛健の知と世間の經驗とを備ふるものをや、かくの如き度に達せるは史上只一回のみ。余之を以て「プロテスタント教」の極頂となす、是「聖典の信仰」命ぜられて此土に現はせし至大の面目なり正をして全く否に勝たしむべく、英國及萬國に至上の善として吾人が期したるもの、祈りたるもの、今眞に達すべしと、この事今人に明になりしとせば事態果して如何。

嗚呼夫の猾才怜悧敏捷にして善く「詐を看破」するもの寧ろ憐むべし。クロムエルの如き政治家は古來英國に一人あるのみ、心中常にかゝる目的を抱きしものの余が見るところは只一人あるのみ。一千五百年間惟一の人にして其待遇や此の如し。其從者は數百人或に數千人のみ、敵は百萬無數なり、英國擧て彼に附さば

ヒームの論

已に基督邦土たるを得ん、然れども遂に此の如くならず。故に猾才巧智の儕、尙此無用の問題を議して止まず、曰く「小人の世界あり其共同の行爲中より正を得ると如何」と。—何等煩瑣の問題を、人は高等法院等に見るか、終に皇天の正憤により、又皇天の大慈により、事沈滯を始めて此問題の全く無望なることを萬人に明かならんとす。

今クロムエルと其目的とに返らん。ヒユームの一派は、クロムエル其初は誠なりしを認む、曰く初めは誠なる「狂信者」なり、而して漸次事の進むに隨て「僞善者」となれりと。此狂信說—僞善者說はヒユームの說にして後廣く他に應用せらる。是恰もマホメットに於ける如し。善く考ふれば內に多少の得るところ如らむ、素より多くにあらず、全なるとは斷じて無し、抑も誠なる英雄は此不幸の狀に沈まず。太陽は不純物を發揮して黑點の蝕するとことなる、然れども消して太陽たるを止め暗黑の塊となることなし。余は此事決して偉大深沈なるクロムエルの毀に起らざるを曰はんとす。余は思ふ斷じて是なしと。彼は造化の獅



彼僞人に非ず

子心—兒、アンテアスの如し、其力は母なる大地に觸るゝに因る、之れを地より揚げ、僞善と空とに付せ、力則去らん。吾人はクロムエルを純全の人と曰はず、罪過を犯さず、特に不誠を犯さずといはず。彼は「完美」「篤行」の好事博士に非ず、彼は粗扑のオルソン、實際の事業に因て路を開くもの也。內に過素より多かるべし、不正、過失、日々刻々の過失、彼之を知るに過ぎたり。神と彼と二者善く之を知る。太陽屢〻曇れり、然れども太陽其物は「曇」とならず。クロムエルが臨終の言は基督的英雄の言なり、斷續の祈禱、—願くは神我事業を判ぜよ、人能はざる故に、神、公正愛憐を以て判ぜよと、感動すべき言なり。此の如く功罪共に了りて上帝の前に彼其粗豪雄大の靈魂を吐く。

我は斷じてクロムエルを僞人と呼ばず。僞者、假面、俳優の生と等く、空漠誇大妄誕にして愚民の歡聲に渴すとは何ぞ。彼頭半白に至るまで微賤を守れり、而して今や認識せられて英國の眞王たり。人は帝王の車服なくして止むべからざるや。簿書の堆を以て赤條の書記に責めらるゝと幸福なりや。一ダイヲクレ

帝王の要　○モントロース

シャン草莱の手植を擇べり、ヂョージ、ワンントン特種の偉豪ならざるも其爲すところ亦之に似たり。是眞人の能く爲す所、好て爲す所、其眞事業一旦帝權の外に出づれば忽ち飄然として去る。

是と共に請ふ一切の中到るところ王の缺く可らざるを曰はむ。衆其長を有せずして敵之を有するときの如何は善く此戰に現はる。スコットランド國民皆熱心に清教を奉ぜり、(島國の此一端全く之に反す)。然れども内に大なるクロムエルの類なし、躊躇逡巡應變のアルギール輩あるのみ、一人も其心飽まて眞理に忠なるものなし、又敢て身を眞理に托するものなし。彼輩實に首長なし、而して國中王黨の殘兵は之を有せり、王黨中の至俊モントロース、文雅豪偉にして英雄騎士と稱すべきもの是也。見るべし、一方には臣從ありて王なく、他方には王ありて臣從なし。王なき臣從は一物を爲す能はず、無臣の王は多少爲すべし。愛蘭土人或は高土人の一塊、(漸く銃を有するものすら内極めて稀なり)――モントローズ之を準ねて清教徒の精兵を襲ふこと旋風の如く、之を追擁すること殆んど五



クロムエルの最も難ぜらるる所

清教徒全勝後の實際問題

回、一時は彼能く全蘇國の王なりき。一人なり、然れども彼れ人なり、他方に百萬熱心の民あり、然れども其所謂一なし。而して百萬の民彼に敵する能はず。恐く清教亂に關せる一切の人中終始缺く可らざるは實にクロムエルならむ、事を見、事を行ひ、事を斷じ、不定混援の間にあつて彼れ一の定柱たり、――衆中の王なり。衆之を稱する如何は問ふところに非ず。

然れどもクロムエルの一非難正しく茲にあり。彼が他の行爲は皆辯護者を得て一般に恕せらる。然れども此「ランプ、パーリヤント」の解散、總督號の占取は人の許す能はざるところなり。彼已に英國の王たるを得英國勝利黨の首長たるを得、然れども王服無くして止む能はず、而して之を得んが爲め失信に陷ゐりしが如し。請ふ暫く此事如何を見ん。

英國、蘇國、愛國、皆清教議院の脚下に伏して實際の問題起れり、之に處すること如何と。天命思議すべからず、之を爾に配す、爾如何して之を治めんと。

「長議會」の殘員數百人至權を取て座するもの、永久こゝに續く能はず、如何せ

「ランプ、パーリヤメント」

ば是可ならむ。理論上の憲法家は之に答ふる容易なるを見ん、然れども其實際を見るクロムエルの眼中未だ之より複雜なるものなし。彼は議會に問へり、其決せんと欲するところは何ぞと。議員之に曰ふべし。然れども血を以て勝利を買ひたる兵士、常規に背くも自ら又之に關して曰ふべきものあるを信ぜり。「吾人は一切我が戰鬪の結果として只一片の紙を求めず」。神我を用ゐて其福音の大法に勝を與へたり、其大法此邦に自ら建つべし、或は建たんを試むべし。

三年間（クロムエル之を言ふ）此問題議員の耳に響けり。彼等答ふる能はず、只言を弄するのみ。恐く是議員團體の性質に因る、恐く此の如き形勢に當ては何等の議會も只言を弄するに過ぎざらむ。然れども此問題は決せざる可らず。汝六十人全國汝を厭ひ、汝を賤み、已に汝を稱して「ランプ、パーリヤメント」と曰ふ、汝續て此に坐する能はず誰か之に續かん、何か之に繼がん。「自由議院」、選擧權、諸種の立憲法規とは何ぞ。——此事は飢たる實蹟の我に迫る者なり。答へずんば彼我を呑まん。而して汝憲法式、議院權を喋々するは何ぞや。汝要



議會の所爲

議院の解散

ありて已に王を殺し、「プライド逐擽」を行ひ、强者の權に因て汝が本分を妨ぐるものを追ひ且罰せり。今汝等殘て討論するもの五六十名、我になすべきところ如何を告げよ、空文を以てせず、實蹟の途に於て告げよと。

彼等が最後の答如何は今日猶知られず。ゴドキンの精勵なるも之を發見する能はずと曰ふ。憐むべき議會尙解散するを欲せず、又能くせざりしこと、而して實際解散せんとするに及べば十回若くは十二回之を延期せしと、而してクロムエルの堪忍は終りしと蓋し尤も實に近し。然れども吾人は議會の爲めに最便の假說をとらん。余之を信ぜざれども是尤も便なるもの、しかも便に過ぐるもの也。

此說に從へば下の如し、夫の危急の時クロムエル士官と共に一方にあり、五六十の「臀議員」他方にありて會せるとき、人俄にクロムエルに告ぐ、曰く議員失望して彼に應ずる法甚奇ならんとす、即嫉妬鬱悶して少くも軍隊を拒がんが爲め急に一種の改革案を作る、之に因れば英國全土より議員選ばるべし、一樣

平等に選擧區を別ち、自由選擧をなさしむべし、云々、甚だ怪むべし、然れども彼輩に取ては怪むべからず。改革案、英人自由の選擧とは何ぞ。王黨今は靜まれども根絶せしに非ず、彼恐くは我を凌がん、算數上英國の多數は常に我黨に冷淡なりき。たゞ之を見て之に服せしのみ。吾人の眞に多數なるは重と力とにありて頭數に非ず。而して今夫の式文と改革案とに因り、劒以て之を得たる事件、再び陸沈して只に希望と化し、蓋然しかも小なる蓋然とならんとするか。吾人神力と手腕とに因りて得、而して今茲に保つものは蓋然に非ず。クロムエル夫の執拗の議員に走り、かの改革案の急演を止め、議員に命じて、退去し、又語るなからしむ。——吾人善く彼を許さゞるや。吾人善く彼を解せずや。ヂョン、ミルトン傍にありて彼を贊せり、實蹟は空文を擁へり。思ふに英國中に多數の實者は此要を認めしならむ。

「ベーヤボーン議會」

故に剛勇のクロムエル一切の空文虛論に敵して、敢てこの英國の實蹟に訴ふ、實蹟我を介くるや否やと。彼力めて立憲風の治をなし、己を介くるに議員を設



けしは奇なりといふべし。彼が第一次の議院は所謂「ベーヤボーン」議院にして彼の「名士議會」と同質なり。英國の諸方より首要の法敎使及清敎官吏、宗敎上の名聲あり、勢力ありて操守に著しきもの指名せられ。是輩集まりて計畫せんとす。彼等過去の事を批準し、力を盡して後來を畫せり。彼等輕侮せられて「ベーボーン議員」と呼ばる、然れども人名はベーヤボーンにあらず。バーボーンなりしものゝ如し、善人なり。また彼等の事業戲に非ず、尤も着實の事なり、幾何か基督の大法能く我英國の大法とならんや、清敎の名士之を試みし也。內に知者ありき、能者ありき、思ふに其大部は敬信の人ならむ。彼等は高等法院を改良せんとして失敗し、潰崩せしものゝ如し、乃無能なりしとして自ら解散し、再び其權を總督クロムエルに讓りて其欲するところ、能ふ所を爲さしむ。

クロムエル大事に當る

彼之を爲すと如何、總督クロムエル、「現在將來一切軍の大元帥」、此無比の危機に當り、英國に存せる惟一有爲の信據として、英國と無政府との間に唯獨り己

を見るのみ。是當時彼及英國の位置也。此實蹟決して拒む可らず、彼之を爲すこと如何。彼熟考の後意を決して之を受け儀式に循ひ儼然として神と人との前に語り、禮して曰はんとす。事此の如し余力を極めてこれに盡さんと。總督官、政府の機關、是れ事の外形のみ、是當時の事情に隨ひ、判官により、首要の官人に因り、「要路官民議會」に因り、批準計畫せられしなり。而して事の實際を問へば、形勢こゝに至て無政か是か二者の外、他に擇ぶものなきこと全く否むべからず。清敎英國は之を受くるを得べく、受けざるを得べし。然れども清敎英國は實に之に因て自殺を免れしなり。余は信ず清敎民喃々不明なりしも要するに感謝信實にしてオリバアが此法外の行爲を受けたり、少くもクロムエルと彼等と合して之を善くし、而して終に至るまで益々之を善くせり。然れども議會上明言法無らに困し之に關して曰ふべきところ如何を知らざりき。

オリバアが第二議會、(實は其成規なる第一議會) 政府の機關に存する法則に因て選ばれし者、集會し、經營せり、然れども暫くにして「總督の權」「纂立」等に關



して無底の問題に陷り、未だ久しからずして解散せざる可らざるに至れり。クロムエルが之に對する終結演說頗る著るし、誇學と頑陋とを責めて、第三議會に語るところ亦相似たり。是等の演說尤も粗野混擾なれども尤も着實の觀あり。有誠無術の人と曰ふべし。彼は偉大不整の思想を語るに馴れず、只之を働くに適し、意餘りて、言足らず。彼多く「天命の降誕」を語る。此等一切の變遷、勝利、經歷は自他の先見に非ず戲曲的計畫にあらず、之を爾か呼んで動かざる者は狂瞽冒瀆の徒也。クロムエルの之を唱ふる沈痛激憤、硫黃の燒ゆるが如し、彼似力之を唱ふ。誰か天下全く混沌となるとき、クロムエル其計畫に當りて之を前知し、針線木片以て預裝の傀儡戲を奏するが如くすと曰ふ。此事何人も前見せず、何人も明かに計る能はず、是「天命の降誕」なり、上帝の指我を導けり、上帝の本分民中に凱旋し、吾人遂に勝利の高處に上れり。而して汝よく議員として相會し、一切此事の組織如何正當可能のものなること如何を述ぶるを得、此を爲すに當り汝知言を以て助くべし。從來英國議會の有せざりし機會

汝は得たり、基督の大法、眞と正善と、多少此土の大法たらしむべし。之に替へて、汝我がこゝに來るに對して、律文の爭論辯難を事とし、閑漫の誇學を事とし、而して余が汝の長たるを證するに、錄事の公書を有せず、只旋風中より上帝の聲を有するが故に再び事を混沌に反さんとす。其機會已に去れり、また何の時歸るを知らず。汝は憲法論理を有し來れり、かくて此土を司るは基督の大法に非ずして「マムモシ」の法なり。上帝爾我の間を判ぜんと。是彼が議員に對する最後の言なり、汝手中に立憲の法文をとれ、我は無文の黽勉、目的、行爲、事實をとらん、而して「上帝爾我の間を判ぜん」。

先にクロムエルが演說筆記は紛擾混沌の甚きものを曰へり。多くは曰ふ狡獪にして曖昧解すべからず、是僞人が紛擾の亂言に隱れしなりと。我見るところは是に異なり、此筆記ありて吾はクロムエルの眞を知れり、否クロムエルなる者なる者あるを知れり。勉めて彼が一種の意あるを信じ、好情を以て其意如何を見ば、斷續、粗野、顚倒の言中、眞說の藏せらるゝあるを見ん。言語不明なる



偉人の心意を見ん。即ち始めて彼れが人たりしを見ん、解すべからず、信ず可らざる曖昧の怪物に非ざるを見ん。懷疑淺薄の時代は深沈なる信人を知る能はず、解する能はず。當時書せられしクロムエルの史傳は彼の演說よりも遙に曖昧なり。人これに因りてたゞ暗黑茫寞の無限界を見ん。クラレンドン其人もいふ「彼の本質は憤激と嫉妬」なりと。憤激、嫉妬、頑癖、空言、剽輕、是重厚沈靜の英人をして鋤犂を投じ、業務を捨て、帝王の最利なるものに反して奮戰激鬪に走らしめしや、誰か之を信ずるを能くせん、懷疑が信仰を說くは珍なり、然れども能ふ所に非ず、是盲人が光學を講ずるなり。

タロムエルが第三議會亦第二と等き岩礁に碎けたり。亦憲法の式文なり、曰く汝茲に來れる如何、我に錄事の公文を示せと。狂暴なる曉吾よ、「汝を議院たらしむる力、並に是以上の者我を總督たらしむ」。我總督空しからば其反射たる、其所製たる汝の議院法は何ぞや。

議院失敗して遺るは獨り專制あるのみ。彼即ち軍務督官を置き、各其領にあり

クロムエル専制となる

て（議員法に因らずんば劒に因て）王黨並に他の反對者を制せしむ、實茲にあり、空文之を如何せん。曰く我進んで外に被壓の清教徒を護り、内に賢正治者判官を指名し、福音宣教使を慰め、力を極めて英國を古羅馬より大なる基督教英國となし、新教派の女王と爲さん、汝余を助けざれば神生を賜ふの間、余之に當らむと。然るに曰ふものあり、法律彼を認めずんば彼何すれぞ去らざる、何すれぞ再び微賤に退かざると、之を曰ふもの多し、誤れり。クロムエル之を棄つべきなし。ビット、ホムバル、シャアジユール等の諸總理大臣相次て國を治めたりき、而して其間彼等の言は法律なりき。然れども此總理大臣クロムエルは辭職する能はず。辭さばチャーレス、スチュアルト及王黨之を殺さんとす、而して其大事亦亡されむ。一たび進めば退却なし、還歸なし、歸るは獨り墓あるのみ。

晩年

クロムエルの晩年哀むべし。彼絶えず大任の重きを訴ふ、大任重し、死に到るまて荷はざる可らず。舊友老大佐ハッチンソン大事ありて止むを得ず彼を訪ふ



——クロムエル友愛和親の狀を以て彼に戸に從ひ、懇ろに此老同胞と和解せんことを乞ひ、其誤解せられ、舊愛なる同胞に棄られて悲甚きを曰ふ、嚴格のハッチンソン共和の式文を守りて怫然として去る。——而して彼今頭白く強腕長く辛苦に勞る。余また常に其同居の老母を想ふ。正直敬神の家庭を見て其女丈夫なるを知るべし、老母銃聲を聞く毎に其子の擊たれしを思へり。クロムエル一日少くも一回、母に見えて其尚生けるを目視せしむ。吁老母憐むべし。——嗚呼クロムエル、彼得しところ果して何物ぞ、彼死に至るまで鬪爭勞苦の生を送れり、名譽か、野心か、史上の地か。其屍は鎖に懸られ、其「史上の地」は——嗚呼其史上の地は——准辱、非難、禍難、誹謗の地なりき。余クロムエルの奸人ならず、純正の人なるを始めて敢言するに加はる、而して誰か今日尚之を爲すの早計ならざるを知らんや。平和彼にあれ、究意彼吾人に盡しゝと多きに非ずや。吾人は彼か粗豪英偉の生を踏み、平滑に彼が屍の溝渠に埋るを越ゆ。歩む時事を蹴却するの要なし。英雄を息ましめよ、彼の訴へしは人間の判斷にあら

佛國革命とナポレオン

ざりき、人間彼を判ずることまた甚だ善からざりき。

一千六百八十八年清教適宜の鎮定を得、平滑の結果を得しより爾來一百零一年更に遙かに深大の爆發起りて之を鎮すると遙に難かりき。佛國革命の名を以て一切人間に知られ、永久又知れらんもの是れなり。これ正に第三最後の齣にして、人間永く僞と假とに倦めるを以て爆裂混撥して再び眞と實とに歸りしもの也。吾人は我英國の清教を第二齣といふ、曰く聖書眞なり、吾人願くは聖書によらんと。——ルーテルは曰ふ「教會にありて」。クロムエルは曰ふ「教會並に國家にありて、吾人願くは神の眞理に據らむ」と。人は實に返らざるを得ず、假相の上に住する能はず。吾人は佛の革命即第三齣を終と呼ぶべし、蓋し人間かの蠻風の極端共和主義より下ることなければなり。人こゝに一切の時世と形勢とに拒む可らざる赤裸露骨の實蹟上に立つ、而してこゝより建設を始めざる可らず。佛蘭士爆發は英國と等く其王を得たり、此王また錄事の公文を有せず。吾人今暫く我が第二の近代王ナポレオンを瞥見せずんばあらず。



クロムエルとナポレオンの優劣

余の見る所ナポレオンは決してクロムエルの如く偉大なるものに非ず。クロムエルは主として英國内に住めり、ナポレオンが歐洲全土巨大の勝利は恰も人の竹馬に乘るが如し、身長は之が爲めに變ぜざるなり。彼の心中クロムエルに於ける如き至誠を見ず、只遙かに是に劣れる者のみ。永年默爾として宇宙の崇畏玄妙なる者に伴ひ、所謂神と共に歩み、獨りこゝに信仰聊賴し、隱密の思想隱密の勇を抱き、隱微に滿足して而して一旦電光の如く爆發すると是皆彼に存せざるなり。ナポレオンの時代にありて神は已に信ぜられざりき、一切沈默隱微の意は人以て空漠となせり。ナポレオンは清教の聖書より始むるにあらず、賤劣懷疑の「百科字典より始めずんばあらず。是其成功なり、是れ已に功德なり。彼が緻密、鋭敏、明晰なる性格はクロムエルが偉大混沌不明晰の性格に比して恐らく小ならむ。瘖啞の預言者力めて語らんとするに代へて吾人はこゝに僞物の分子を見る。ヒユームが狂信——僞人の說、內ちに若干の理ありとせば、其クロムエル、マホメツト等に適せんより寧ろよくナポレオンに適せん、前者に關し

ナポレオンの虚僞

ては殆んど其理なき也。咎むべき好名の分子初より彼にあり、此物遂に彼を制伏して其一身と事業とを破壞せしむ。

「僞れると詔令の如し」、此語ナポレオンの時代に諺となれり。彼れ力めて是が口實を作りて曰ふ、或は敵を欺き、或は兵士の勇を保たん爲めに要ありと、要するに口實なきなり。何の時を問はず人は虚言の自由を有せず、ナポレオン若し全く虚言を吐かざりせは、其成果また彼に可けむ。今日今時に越ゆる目的ありて明日また其存在の見らるゝを欲せば虚言を宣する何の用ぞ。虚言顯はれて、報恐るべし、何人も重ねて虚言者を信ぜず、彼眞を語るとき、彼信ぜられんと至大の要あるとき猶且然り。古、狼の叫を聞かずや、——虚言は無物なり、人無物より某物を作る能はず、人遂に一物を作る能はずして事全く徒勞に屬せむ。

ナポレオンの誠實

然れどもナポレオン誠實あり、吾人は不誠實中皮相なるものと根本なるものとを區別せずんばあらず。ナポレオンが外部の詐僞奸謀多くして且咎むべし然れども之を貫きて彼また眞に對する一種固有不拔の感情ありて、據れば必ず實蹟



の上に立つ。彼其學習に優りて萬有自然の性情を有す。プリーアンヌ吾人に告ぐ、埃及航海中諸博士一夕盛に無神說を唱へ、種々論理法に因り之を證して自ら滿足す。ナポレオン星を仰ぎ答へて曰く諸君甚巧也、然れども夫の一切を造れるは誰ぞと。無神論理は水の如く彼より走る、誰か夫の一切を造れる。大事蹟其面前に炳焉たり。實際に於ける亦此の如し、彼一切の紛糾を貫きて事の實心を見直に茲に突入す、此世にあつて偉大となり勝を制する者皆此の如し。一日チユーレリイ宮の執事新室具を示し其華麗にして且廉なるを褒む。ナポレオン答へず、鋏刀を乞ふて窓帳より金總を剪み之を懷にして去る、數日を歷て恰好の時これを出して用度官ヶ驚殺せしむ、これ金にあらずして箔なりき。セントヘレナにあり、最後に到るまで彼尙實際と眞とを唱ふると注意すべし、何すれぞ語り且怒むや、何すれぞ特に互に爭ふや、これに一結果なし、爲すなきに終らむ、爲すと能はずんば曰ふと勿れと。其不平不滿の從者に屢々語るところ此の如し、孱弱なる怨言の問彼は一片無言の剛强の如し。

ナポレオン初め民政を尊ひ無政を憎む

隨て彼吾人が所謂信仰を有せざりしや、其行はれし間は信仰純なりき。曰く此恐るべき新民政、茲に佛國革命中に興るもの、實に抑ゆる可らず、舊天下其舊力と舊制を以て之を壓する能はずと、是即ちナポレオンが眼にして良心と熱誠とを率ゐて彼之を奉ぜり、彼之を信せり、而して彼其密意を善く解せしにあらずや。「道は知者に聞け器は有能に與みす」是實に眞理、しかも全眞理にして佛蘭士及其他一切の革命の眞意を含む。ナポレオンは初め眞民政黨なりき、而れども民政若し眞物ならば無政たる可らず。彼其性質に因りて、又武道に養はれて、善く之を知れり、彼れ心より無政府を憎めり。一千七百九十二年六月廿日彼れブーリアンヌと共に珈琲店に座して亂民の進むを見、要路の人此暴を鎮せざるを見て極めて輕侮の言を吐けり。八月十日彼かの憐むべきスキス人を指揮する者なきを怪めり、指揮する者あらば勝つべき也。此の如く民政を信じて無政を憎むとナポレオンをして大事を成さしむ。

其光榮なる伊太利戰爭よりレヲペンの平和に至るまで、彼れが天來の靈想は「佛



失敗の端

國革命の凱勝」なり、「之を僞と稱する埃人の僞に反して奮ふ」なり。然れども彼又ともに强力なる有司の必要を感じて思ひらく是なくんば革命盛ならず、又續く可からずと。人を呑み己を呑む佛國革命を取し、之を馴致して其眞意を善たらしめ、整齊して他の有機定形の中に生ずるを得、只破壞としてのみ存する勿らしむ。是ナポレオンが多少志せし所否實際に勉めしところ也。かくてワグラムを經、アウステリッツを經、凱旋また凱旋、續きてこゝに至る彼に慧眼あり、敢爲の靈あり、彼自ら立て王たらんとす、萬人其然るべきを知れり。進行の際兵士常に曰ふパリに於ける喃々嘵舌の令府只空言にして實なし、其失敗怪むに足らず、吾人行きて我が小尉官をこゝに据えざる可らずと。遂に進て一般人民と共に彼々揚げたり、即ち議官となり、皇帝となり、歐洲の征服となり、遂に微々たるラ、フエールの中尉自ら近世々界中の至大者と感ずるに至れり。然れども茲に到りて恐るべき眩惑勝を制せり、ナポレオン先きの實蹟信仰に背きて假相を信じ、墺朝、法王、僞の舊公侯等、嘗て明かに虛僞と見しものに合

せんとし、又自ら其帝統を起さんとし、而して巨大の佛國革命の眞意只茲にありとなせり。強大の誘惑に陷りて彼思ひらく我詐を信ずべしと、恐るべき哉、彼今物を見て眞僞を辨ぜず、心の不眞に從へるを以て重科を拂ふ此の如し。「我」と野心とは今其神となれり、「自欺」は一たび勝てば他一切の欺惑を續くと益多し、是自然の勢なり。劇場的紙袍、粉飾、假面等、鄙陋の補綴を以て彼己れの實を繕ひ以て益實たらしめんと望めり。其空漠なる「法王條約」即ち陽に托してカトリック敎の再建となし、陰に感じて此「宗敎痘病」撲滅の法となすもの、其戴冠禮ノートルダムに於ける伊太利老魔所司の慶式――オーゼローの所謂其華飾を完ふせんが爲め缺くるところは只半百萬の生命、而して此半百萬の死せるは之を倒さんが爲めなるを忘るもの是れなり。クロムエルの即位式は劒と聖書とに因れり、吾人は之を純眞と曰はざる可らず、クロムエルは怪物を須ゐずして劒と聖書とを捧げたり、是清敎の眞標本にあらずや、其の眞の記章に非ずや、清敎之を實際に用ゐて之を奉ぜんを求む。然れどもナポレオン不幸に



乾草の炎燄

ナポレオンの殘忍抑壓

して誤り、人の欺くべきを信ぜしと多きに過き、人中に可欺と飢とを外にして他に深遠の物あるを見ざりき。彼誤れり、浮雲上に築く人の如し遂に家と共に倒れて去れり。

嗚呼此眩惑萬人中にあり、誘惑强からば發達せん、「願くば吾人を誘惑する勿れ」。其發達は禍なり。是に混和せらるゝ物は續くと長からず、外觀大なるも其實は小なり。然ればナポレオンの業喧囂甚しかりしも果して善く何ぞ。火藥の閃光のみ、乾草の炎燄のみ。一時は全宇宙火烟に包まれし如し、然れども只一時のみ、炎燄消せり、而して上には星、下には地宇宙其舊山河と共に猶茲にあり。

ワイマア公常に其友に告げて曰く、勇なるべし、此のナポレオン主義は虛僞不正にして永續せずと。是眞正の敎理なり。ナポレオン世を壓抑して、踏むと甚しければ世の反抗は一旦益激なり。不正は恐るべき重利息を拂ふ。我は彼れ獨乙の書賈バルムを殺さんよりは、其最精の砲隊を失ひ、其至强の軍隊を溺らさんこと、却て優らざるやを知らず。抑壓、殘忍、不正の甚きもの、之を色彩し

て厚さすにいたるも何人も他に紛らすべからず。他の類事と共に此事深く人心に銘ぜり、人々之を想ふて抑壓の活火、眼中に燃たり、而して日の來らんを待てり。其日來れり、獨乙彼が周圍に立てり。——ナポレオンの成功は究竟其正く爲しゝもの、造化大法に因て批準するものに歸せむ。實の其内に存せるもの只是のみ。餘は一切烟と荒寞となり。「道は智者に開く」、夫の大なる使命到る處自ら述べて成就すべきもの、彼れは之を尤も不明瞭の狀に殘せり。彼れは大なる草稿の完成せられざるもの也、何の偉人かよく然らざらむ、嗚呼其粗莽に殘りしこと過多なるを奈何。

彼れが世界の觀念セント、ヘレナに述べたるところ、之を思ふは悲し、事の進行此の如くしてこゝに岩上に投られ、而して世界猶其地軸を轉ずるを見て、彼眞に大に驚けるが如し、曰く佛國は大なり、而して全大なり、而して其實我は佛國なりと。又曰ふ英國は造化の爲す所只佛蘭士の附屬に過ぎず、恰も佛の他のオレロン島の如しと。ナポレオンの見るところ此の如し、而して實際は果し





て如何、彼之を解する能はず、事實は彼の預想に應せざるを解する能はず、佛國の全大ならず、彼の佛國ならざるを解す能はず、強なる哉惑や、緻密、烟眼、果斷の伊太利質、一度己に有して純且剛なるもの佛國誇言の濁氣中に蓋はれて又半は、瓦解せり。世は足下に踏まるゝを好まず、結ばれ築かれて佛蘭士と彼との柱脚たるを好まず、世の目途全く異なり。ナポレオンの驚愕は大なり、然れども今何の補かあらむ。彼其途を行き、造化また其途を行けり。彼一たび實を離れて力なく、眞空中に躓き、又一の救援なし、其沈落や稀世の悲慘、彼遂に巨心を破りて死せざるを得ず、哀むべしナポレオン、大なる器械損耗早さに過ぎ遂に用なきに至れり、嗚呼我最後の偉人。

二樣の義に於て彼は我最後の偉人なり、英雄を求め、英雄を究めて、多時多方に廣く徘徊せしもの、遂にこゝに了るべければなり。余之を痛む。此事、勞多かりしとするも、樂亦我に多かりき。過嚴なるとなからん爲め余が英雄崇拜と曰ふ者至嚴至廣の大問題なり、是深く人世至重の利害に徹して、今頗る說明の

價値なくんばあらず。六日に代ゆるに六月を以てせば爲すと儼るを得ん。余は只端を啓くを約せり、今果して之を遂げしや否を知らず。之れを啓くの法至粗なりき、支離、滅裂、矇昧の言によりて諸子の耐忍度試みるところとなれり、——耐忍、忠直、懇情、親愛、——今これに關して曰はざるべし。文雅なるもの、著名なるもの、美なるもの、賢なるもの、英國中の最善なるもの、忍んで我粗辭を聞けり。余は衷心深く諸子に謝し、併せて諸子の清榮を祈る。

# 英雄論 終



## 附錄 第一 本文略註

頁數

(五) 異教(ペーガニズム)——猶太教、基督教回教の徒が自餘の諸宗教に與ふる稱、猶儒教徒が他を目して異端と曰ふが如し。

(七) 「ラマー教」—佛教の末流にして十五六世紀頃西藏に起れり。

(七) サミュル、タルナア(一七五九—一八〇二)英國外交官、東印度商會に入り、嘗て西藏に行く、其紀行あり。

(十五) イシメイル、アブラハムの子なりしが母ハガアと共に荒野に逐はる其十二子各酋長となれり之を「イシメイル」人とよぶ。アラビヤ人は之を其祖先と認む。

(十五) ヂャン、バオル、リヒテル(一七六三—一八二五)獨乙の文豪、小說等の著多し。カーライル深く之を愛してリヒテル評論を書せること前後二回。

(十六) セント、クリンストム(三五〇—四〇七)著名なる希臘教會の教父、コ

ンスタンチノープルの大僧正たり。

(十六) 「セキナア」Ark of Testimony or Ark of Covenant イスラエル神殿中至高の聖所に設けられし塔。

(十六) ノバリス—フリイドリヒ、フオン、ハルデンベルグの號、有名なる獨乙の神秘哲學者兼文學者、亦カーライルが愛好の人物なり一七七二—一八〇一。

(二十三) ファルネイ、—ヂユーラ山の麓、ゼネバ湖上の一小村、一七六八以來ヲルテイル玆に住めり。

(二十三) カラーは佛國ツーローズの商人、新教を奉ぜり、其子自殺せしが民彼を疑て虐殺せりとし之を訴て酷刑に處せしむ、ヲルティル其遺族を助けて之が寃を雪げり。

(三十三) ウルヒラ「ゴース」人に基督教を傳へ、紀元三百十一年「ゴース」語に「バイブル」を譯して「チユートン」文學の端を啓けり。

(三十六) トレント會議—一五四五伊太利チロールのトレントに開かれし羅馬



教會徒の集合にして新教を難じ、舊教の教理を確定せしもの。

(三十六) アタナシアス—第四世紀の正教派徒、大に「アリアニズム」を論駁せる人なり。

(三十八) サクソ、グラマテカス—十二世紀の丁抹史家。

(四十四) アタールバ—南米秘魯國王、一五三三西班牙人に囚られ縊殺せらる。

(五十二) カリオストロ伯—、大詐欺師バルサモーの僞號、歐洲の諸邦に詐欺を行ひ大に民心を騷がしゝもの、後伊國ウルビノに獄死せり。

(六十五) ネミアン競技、—希腦に四大競技ありき、オリンピヤ、デルファイ、ネミヤ、イスマス是なり、詩人は玆に其勝者を謳へり。

(六十六) マイステル云々、ゲイテ著「ウヰルヘルム、マイステル旅行」にあり、宗教に三種の別あり、一は上なるものを敬し、二は同等なるものを敬し、三は一切の物悉く、罪惡誘惑の如きものをも我が進德の方便として之を敬す、云々の說あり。

（七十）ポーコック—英の東洋學者及聖經學者、アラビヤ語の教授たりしこともあり。

（七十）グロチアス—和蘭の法學者兼神學者。

（七十七）セール、—英の東洋學者、「コーラン」を譯して註釋を添ふ。

（七十九）テオドラス、シクルス—紀元前一世紀シヽリイに生れし史家、歐亞を旅行して史料を求めしことあり。

（七十九）シルベストル、ド、サシイ佛國「アカデミイ」の會員たりき。

（八十三）セルギウス—恐らくシリアに生れし者コンスタンチノープルの教長たりき。六三九死せり。

（百）等質論云々—、アリウスなるもの督基教會の別派を記起して四世紀頃東方教會に行はる、シリヤ派は其一なり。基督は其父と等質なりや、同質なりやの論辯を爲させり。

（百〇四）ブリドー、（一六四八—一八二四）英の神學者兼史家、マホメット傳



を書せり。

（百二十五）サムソン—スイラエルの一判官、怪力あり、後ヒリステン人に囚はれ、殿堂を倒して彼等を殺して併せて己を殺せり。

（百三十）圓諧、—ピタゴラスの説に曰く音調の高低は物體震動の速度に應ず。諸行星の速度互に異にして其運動の爲に起るし音響亦互に異なり。而して自然界の萬物皆整齊たるが故に此種々の音響亦整齊調和ならざる可らずと。

（百三十五）ヂョットーはフローレンスの名畫工、チマブエに學びてグンテの友たり。

（百三十八）「ゲルフ」、「ギベリン、」云々中古伊太利に起りし二大黨の爭、日本の源平の如きか。

（百四十）「マレボルゼ」—神曲地獄篇にあり冥府の八區は即是なり「マレ」は惡、「ボルゼ」は暗窟の意。

（百四十五）Dite の殿堂、—冥府の怪人の居、地獄篇第八章。

（百四十五）プルタス―地獄篇第六章。
（百四十五）ブルネット、ラチニイ、地獄篇第十五章。
（百四十五）フハリナタ及カバルカンテ、地獄篇第十章。
（百四十五）「火雪」、地獄篇第十四章。
（百四十八）「エーオリヤ」琴。エーヲラスは風の神なり「ユーオリヤ」琴は風琴にして風之に觸るれば微妙の音を發するもの。
（百六十九）ドグベリイ及ワルヂ、―沙翁喜劇「骨折損」中の人物なり（第三段を見よ。）



（百九十四）ベラーミンは法王マーセラス二世の甥なり、「基督教信仰の爭」を著して新教を駁す。一五四二―一六二一。
（二百十一）オーヂアス、―荒唐談中エリス國王。ヘルキールスの役務中一は此王の厩を淨むるにありき。
（二百二十一）クラナッハ獨乙の畫工兼彫刻家、ルーテル及メランクトン彼の友なり。
（二百二十四）ネール、著名なる英國の分離派（ダセンダア）、一六七八―一七四三。
（二百二十九）セント、アルドルー、―ノックス一五四二に公然羅馬教を背きて熱心に新教に力め、爲めに迫害を被りて後セントアルドルーに退き之を守る、城陷り、囚となりてルーエンに移さる。
（二百三十一）モルトン、―蘇國の宰相、初新教派に屬せり、一五八一刑死せり。
（二百三十七）マルレイ、はメーリイ女皇の寵臣、後之と隙あり、メーリイが法庭訊問の時之に反して立證せるが爲め其黨に惡まれて暗殺せらる。フルードは彼を偉人物となす。
（二百六十五）バンドーラの匣。大神ヂョブ土よりバンドーラを作り之に匣を與て其夫たらんものに之を讓らしむ、エピテアスなるもの之を受けて開けば一切の禍難悉く溢出して人界これより不幸なりといふ。
（二百六十九）ファラリスはシヽリイ國アグリゲンタムの暴君なり、ペリラス

に命じて銅牛を製せしめ民を其腹中に投じて焚殺せり、而して第一に此慘刑を被むりしは即ペリラスなりき。本文と少しく異なり。

（二百七十五）　オスボールンはオックスホルド侯より其藏書を購ひ、ジョンソンに其整理を托せり、一日渠無禮なりしを以てヂョンソン之を蹴倒して足を其頭に加へりと云ふ。

（二百七十七）　ネッサスの短衣、―ネッサス（半人半獸）ヘルキールスの婦を犯さんとして其夫に殺さる。死に莅みて毒血を含める短衣を婦に與て曰く之を汝の夫に贈れ、然らば彼汝に信ならむと。後この衣の爲めにヘルキールス斃る。

（二百九十七）　ブレゼイ、一七八九佛國大革命起端の時代、宮中に在りて議員の謁見を司どりし者。ミラボリに大喝せられしことあり。

（三百二十二）　ペールサアーク、北歐神仙史中猛勇戰士の一人、また Berseker に綴る。

（三百五十一）　アンテアス、海神と地神との子、母なる地に觸れし間はヘルキ



ールスと角して勝てり、後ヘルキールス之を空中に揚げて拉殺す。

（三百五十一）　オルソン、はワレンタインと雙兒なり、後者は帝王の愛臣となり、前者は熊に伴はれて野人となる、「チャーレマン」物語中の一話。

（三百五十七）　名士議會、一七八七、佛國に招集されし國內名族等の集會にして實に後來諸國會の先導を爲せるものなり。

（三百七十一）　ハルム獨乙出版者、ナポレオン反對の小冊子を出版したるに由り、軍法會議に附せられ銃刑せらる。

## 附錄 第二 カーライル小傳

トーマス、カーライルは一千七百九十五年(佛國大革命始まりしより六年後)十二月四日蘇國ダムフリイ州、エクレフェジャンに生る。父は正直剛爽の農民母は溫好敬信の婦人にして家庭最も嚴肅清教徒の標本なりき。カーライル鄕校を終りてアンナン中學に入り、十四歲にしてエヂンボロー大學に入る。父母彼に觀る所あり、勤儉の生活少しく家計の餘裕を得て此後來の世界文豪が進學程を啓けり。彼大學に在りて特殊の成績なかりしも其圖書館を利用して屹々讀書に耽る。勉勵忠實、無邊の困難に處する不拔の堅忍は彼か一生の特徵にして之を養成するは生として在大學の日に於てせし也。教會の職は父母が彼に望みし所なりも彼之を好まず、父の信仰は己の信仰と異なり。故に教會の職を捐てゝ大學を了りし後アンナン中學の教師たること二年、然れども其嚴峻假すなき性質は教師たるに適せず、去りて當時北方のアセンス」と呼ばれしエヂンボローに行け



り。デヤッフレイ、ロックハルト、スコットシドニイ、スミス、ブルーハム等茲に在りき。云々「エジンボロー百科字典」を編せるものあり、カーライルに托して內若干章を草せしむ、彼力を盡して之に當れり。事の爲すべきあらば自己の全力を擧て之に盡さんとは彼が循守せる格言なりき。一千八百十九年より廿一年に至る間は流寓の生活極めて慘に。且靈界上の疑惑失望相嗣て、三週間殆ど安眠を得ざるとありき。信仰上の大危機及び之に嗣げる「精神的新誕生」は此時にあり。當時彼また獨乙語學文學を研究して後年成功の基礎を置けり。從來殆ど獨乙文學なる者あるを知らざりし英國に初めて之を照會せし功は永く沒すべからず。當時彼またルゼンドルの幾何及び三角法を譯し、自著の比例論を添へて出版せしが、ド、モルガン博士後この例論を稱美せり。既にして親友アルビングの周旋に由り、倫動に行きて一富豪子弟の教育を托せらる。一千八百廿三四年シルレル傳を著して「倫動雜誌」に投じ好評を博せしが、次にゲィテの「マイステル修業時代」を譯して大に物議を招きしも屈せず、猶獨乙文學の飜譯に從事